

餘の諸大官及び地方巡察使、持繩者等は、行政、執法、收税の常制にして、これに興教、慈善の事を兼ね行はしめしなり。而して、鄔闍衍那と咀叉始羅とに王子の總督を置きしことは、父王の代よりの例なりしこと、上に云へるが如くなれど、西南の鄔闍衍那に對して、東南の要地即ちスワルナギリに總督を置き、イシラに大官を置きし小語ことは、蓋し王の勦めしところにして、イシラの大官及びトサリ、サマアバアの市吏等は、スワルナギリ總督の配下に屬し、總督は亦王子なりしなり。想ふに羯陵伽拓疆の事に伴ひて起りし必要に由りしならむ。領内の王侯をば各々獨立せしめ置きて、租税を徵せし

ものゝ如し。こは父祖の代より行ひ來りし政策ならむ。

慈善大官衙の事業は諸宗の徒とこれを共にし、その頒ちしところの布施には、王賜と諸后妃及び諸王子等の所賜とありて、后妃の布施にも園林及び客堂の如きものありき。王都乃至諸々の地方に於いて、官僚は豫め之を民に告げ、而して屢々布施を行ひしなり。石柱第七章及び王妃語文。

政 所 信

阿育王の民に教へし謂はゆる達磨は、主として慈悲、衆善、憐愍、眞實、清淨に在り。石柱第二章。父母に孝なること、朋友、知己、親族及

び沙門、婆羅門に仁厚、敬虔なること、有情の生を重んずること、驕奢ならざること、言語の柔和なること、摩羅第 二章等長者に従順なること、摩羅第 四章伏欲、淨心、知恩、摩羅第 七章奴隸及び繇僕の善遇、師に禮あること、摩羅第 九章精進、捨離、摩羅第 十章布施、摩羅第 十一章自制、摩羅第 十二章不妄語、シツダアブル 小語文 第三章自省、石柱等を以て細目とす。その吏に教へたるものは、曰はく猜忌、不耐、苛酷、噪急、不精進、懈怠、偷逸等の癖を去れ。曰はく民を正道に導け、トサリ、サマ アバア語文。王はこれを以て啻に危殃を免れ、摩羅第 十章延壽を致し、シツダアブル 小語文。乃至吏は債務を王に果たしてその恵を受け、トサリ、サマ アバア語文。人の現世に得益あるのみならず、後世に無窮の功德を生じ、摩羅第 九章等生

天を得る、トサリ、サマ アバア語文。と爲せりと雖も、而もかくの如き單純なる道德を以て尙未だしと爲し、法施、法友、法慈、法縁を尊び、摩羅第 十一章法の本質の増長を冀ひ、摩羅第 十二章深く定念を重んじ、石柱又在俗の男女に至るまで、佛陀の經律中、特に王の指定するところのものを聽聞し、思惟せむことを望めり。パブラ 小語文。當時の佛教が南方佛教即ち北方の謂はゆる小乘なりしことは、王の擇舉せる經の皆阿含、アハガヤ、AGAMA、阿伽摩、阿含、摩羅、無比法、教法部に屬するにても察せらる。而も當時の佛教は、今の義に於けるが如き教育と別なる宗教に非ずして、宗教即ち教育なりしなり。王のこれを以て民を教へ、吏を教へ、悪を遮して善に趣き、且つその心識を開發せ

しめむことを圖りしは、謂はゆる達磨の外に復た高尚なる教育あらざりし草昧の世に當たり、その風を移し俗を易へて文化を高めしことの如何に大なりしかを想ふに堪へたり。實世間に於ける佛法の饒益は、實に王に依りて始めて大いに發揮せられしものと謂ふべし。

拾 結 集

阿育王が結集の事は、誥文にも北傳にも所見なく、唯南傳 MAHIVANSI 第五章、DIPAVANSI 第七章、卷見律卷二。 の語るところなるを以て、その實否を知るに由なし。今姑く南傳に依りてこれを叙せむ。王の登位九

年、王波吒釐子城の四門に藥藏を設けて比丘に施す。每藏日々藥直一萬錢を費やす。王又日々錢一千を以て大德泥瞿陀に供し、一千を以て塔像を供養する華香の直に充て、又復た法堂、律師、衆僧の爲に毎日各々錢一千を施せり。かくの如くなるが故に、佛法の興隆するに反して、「アシイキカ」その他諸々の外道 PANDARANGA, JATHA, NIGANTHA, ACFLAKA 等。 は衰歿し、供養の利を失ひて生計に窮するもの六萬人、乞食すれども得るところなく、飢渴に逼られて託して佛法に入り、黃衣を着けて偽りて沙門と爲り、猶みづから本法を執して以て佛法と爲し、或は火に事へ、或は炙身、寒水の苦行を事とし、或は日天 SURYA, SURYA, 蘇利耶。 を拜し、

甚しきは佛の經律を破ることを公言せり。ことを以て阿育寺すらこれが爲に雜亂せられて、善比丘も如法に布薩UPOSATHA, DPAVASATHA.を行ずること能はず。かくの如きもの七年、戒律終に説くに由なし。目犍連子帝須はこれを慨し、弟子等を摩呬陀に附して、みづから菟伽河の上流阿然河アホヤンダア AHOGANGA.の山中に隠る。阿育王これを聞きて、大臣を阿育寺に遣し、如法に布薩を行じ、和合して戒を説かしめむとす。善比丘等外道と布薩を共にすること能はざるを以てして従はず。大臣怒りて命を用ゐざる上座を斬り殺し、將に王弟帝須に及ばむとす。王その報を聞いて驚いて寺に至り、殺僧の罪誰に歸すべきか

を問ふ。諸比丘説くところ一ならず。王即ち使を阿然河山中に遣して目犍連子帝須を迎ふ。帝須舟に乗り、菟伽河を下りて波吒釐子に至る。王みづからこれを迎ふ。帝須王の爲に神通力を現す。王問ふに殺僧の事を以てす。帝須鷓鴣の例を引いて、大王殺心なくば罪なきなりと答へ、王の爲に本生經JATAKA.を説き、又七日の間園林に在りて、王に教ふるに律と非律、法と非法、佛説と非佛説の別を以てす。王仍りて一切の比丘を召してこれを檢問し、僞比丘の外道を信ずる者をして白衣に更めしめ、悉くその六萬人を驅逐して城に還る。善比丘六萬、久しうして即ち布薩を行じ戒を説くことを得たり。

ここに於いて衆僧目健連子帝須を上座と爲し、三藏を知り、三達智を得たる比丘一千人を選擧し、第三回の集法藏又曰はく毗尼藏を行ひ、九月にしてその業を竟へたり。この時阿育王登位第十七年、目健連子帝須七十二歳なりきと云ふ。帝須は結集の終りに於いてみづから論事KATHAVANTHU. 迦他跋命。と名づくる一書を著し、内外の異見一千題に就いて精細に之を破拆せり。今尙阿毗達摩藏中に存ず。帝須の寂後その遺骨はサンチイに葬られたり。

拾壹 布教

結集既に竟はりて目健連子帝須念へらく。當來の佛法は當に邊地の中に興隆すべしと。即ち諸長老DIPAVANSA 五人を伴ふ。をしてこれを邊地に傳へしむ。即ち末闍提は迦濕彌羅KASHMIRA. 罽賓。今カシミール。及び健駄羅國に至り、阿羅婆樓龍王ARAVALLA. NAGARAJA.及び雪山地方の乾闥婆、藥叉、鳩槃荼GANDHARVA, GANDHARVA. 健達婆、健達婆、吠陀、吠香、食香。YAKHA, YAKSA. 夜叉、夜叉、夜叉、能敬、勇健。KUMBHANDAKA, KUMBHANDA.を化し、藥叉パンチャカPANCAKA.及びその婦訶梨帝HARITA, HARITI. ASVISOPAMA. SUTTA. 後の撰經等をして道果を成ぜしめ、民の爲に譬喩經HARITI. ASVISOPAMA. SUTTA. 後の撰經經經と同じ。増一阿含經卷三十九馬血天子品放牛度の譬喩、同卷四十九牧牛品初分及び佛說放牛經ならむ。を説き、摩訶提婆は摩醯MAHISAKAMANDALA. 即ち婆慢MAHISAKAMANDALA. 即ち陀羅MAHISAKAMANDALA. 即ち國に至りて天使經DEVADUTA SUTTA. 中阿含經卷十二天使經。佛說鐵城泥聖經。佛說闍羅王五天使者經。を説き、勒棄多RAKHTHA. 是婆

那婆私 YANAVASI, YANAVASIN, YANAVASIMANDALA. 林住の義。今の ORISSA の PURI 地方。 國に至り、無始界經 ANANTAGGA PARIYAYA. を説いて五百寺を起こし、史那の人曇無徳は阿波蘭多迦

を説いて五百寺を起こし、史那の人曇無徳は阿波蘭多迦 APARANTAKA, APARANTAKA. 西國の義。PANTAB の地方。 國に至りて火聚譬經 AGGIKHANDHUPANA SUTTA. 阿合經卷二十五、五五品末分

大樹火の燒かるる譬喩か。を説き、摩訶曇無徳 MAHADHAMMA. RAKKHITA. 是摩訶勒陀 MAHARAJITA, MAHARASITRA.

摩訶刺作。BOMBAY の國に至りて、摩訶那羅陀迦葉本生經 MAHANTARA. GODAVARI 河原の地方。 國に至りて、摩訶那羅陀迦葉本生經 MAHANTARA. DAKASSAPA. JATAKA.

を説き、摩訶勒棄多 MAHA- RAKKHITA. 是史那世界 YONALOKA, YAVANA. 國に至

りて迦羅羅摩經 KALAKALAMA SUTTA. 中阿合經卷五十六羅摩經か。 を説き、末示摩 MAJJHIMA. 二葉波と共に、師後 SANCHI に舞ふる。 迦葉波 KASSAPA, KASYAPA. ムウラカアデエロ

鈍毗帝須 DHANDHABINNASSA, DURABHISIRA. 及びサハサデエロ NUJAKADEVA. 善見律の師の提婆とす。

は雪山邊 HIMAVANTA, HIMAVYA. 雪山地方。 國に至りて初轉法輪經 DHAMMACAKKA- PPAVATPANA SUTTA.

佛說轉法輪經。を説き、鬱多羅 UTTARA. 及び須那 SONA. 善見律には須那迦又須那迦那とす。 及

は金地 SUVANNABHUMI. BRITISH BURMA の PEGU, PAIGU 地方か。 國に至り、藥叉女 MAHYANSA 又は RAK- PISACA. を化して梵網經 BRAHMAJALA SUTTA. 長阿含經卷十四梵網經、佛說梵網六十二見經。 を説き、王子

摩呬陀は僧伽蜜多の子なる沙彌須末那 須摩那。 等六人を率ゐ

師子洲に往いて佛法を傳へたり。

この事西域記に、摩醯因陀羅を阿育王の弟として、執師子國

に佛法を流布せりと曰へる等の外、前の結集の事と同じく、

北傳に所見なし。然れども諸國布教の事は、結集の事の毫も

誥文に見えざるに似ずして、摩崖誥文第十三章に見え、而も

史那、錫蘭及び阿波蘭多迦の外、傳説の摩醯娑慢陀羅は誥文

阿育王事蹟 布教

一七一

の案達羅及びプリンダに、摩訶勒陀はボシヤ、ピテニカに地理の略合へるに考ふるも、その頗る信憑すべきことを知るべし。

布教の事、南傳

DIPAVANSA 第八章、NAHAYANISA 第十二章、善見律卷二。

に依れば、結集の翌年、即ち

王の登位十八年なれども、誥文の諸國布教は、灌頂第十三年以前ならざることを得ず。されば年曆は南傳の言ふところ信じ難し。

又南傳

NAHAYANISA 第十三乃至第二十章、DIPAVANISA 第十二乃至第十六章、善見律卷二、卷三。

に依るに、摩訶陀は沙

彌修末那の外、壹地、臈帝、跋陀、多、參、婆、樓

EPHIVA, UPEIVA, BHADRA-SILA, SAMBAHA. 以上四人

及び槃頭迦

大總 及び槃頭迦

BHANDUKA. 居士、或は曰はく、槃頭迦は摩訶陀の卑提寫に於いて化するところにして、摩訶陀の母姓の子なりと。

の五人

を従へ、王舍城を過ぎて先づ鄔闍衍那の卑提寫に至り、その母を省す。母提鞞その立つるところの卑提寫寺に迎へて食を設け、善見律には爲に寺を立つと爲す。摩訶陀をして少らくこれに居らしむ。これより先、師子洲阿窺羅陀ANURADHA. 當時の都城はANURADHAPURA. 今の錫蘭 NORTH CENTRAL PROVINCE の中央、KANDY の北約六十哩。國の老王聞荼私婆NIIVASTIA 在位五十餘年にして殂し、その子天愛帝須王立つ。帝須即位に臨み、使を阿育王に遣はして貢獻するところあり。阿育王又酬ゆるに物件數種品名は善見律等に見ゆ、今略す。を以てし、又書を與へて歸佛を勸む。贈品の中に阿縛達ANOFALPA, ANAVANIPPA. 阿那婆達多、阿那婆答多、阿那達、阿縛、無熱池、山の MANASA. 又曰はく、苑伽河水と。池の水あり。帝須この水を得て再び灌頂しつ。使の往復には十月を費しき。摩訶

陀布教の機到れるを以て乃ち卑提寫寺を發して師子國に赴く。去年十一月阿育寺を出でしより六月を費やし、四月十

五日 或は日はく、六月満月の日。を以て阿菟羅陀補羅に近き眉沙迦 MISSAKA、桑山今名 MIHINTALIE

山頂の AMBATHALA アムパッタラ 巖角に至る。時に帝須王立ち

てより既に七月。星宿の忌を避けて出でく眉沙迦山に狩す。

摩呬陀仍りて帝須を呼びて來意を告ぐ。帝須阿育王の書中

に言へるところを憶ひ、即ち相坐して問訊す。摩呬陀帝須を

試みむと欲し、王の坐するところに近き一樹を指して問ひ

て曰はく、これ菴沒羅樹か。王答へて曰はく、これ菴沒羅樹な

り。曰はく、この菴沒羅樹を置いて更に樹ありや。答へて曰は

く、更に有り。曰はく、復たこの樹を置いて更に餘樹ありや。答

へて曰はく、有り。復た問はく、餘樹を置いて更に樹ありや、な

しや。王答ふらく、これこの菴沒羅樹か。摩呬陀曰はく、善い

哉、大王大智慧あり。王宗親ありや。答ふらく、甚だ多し。曰はく、

王の宗親を置いて餘人に宗親ありや。答へて曰はく、極めて

多し。曰はく、王の宗親を置き、餘人の宗親を置きて更に餘人

ありや、なしや。王便ち答へて曰はく、我即ちこれなりと。摩呬

陀曰はく、善い哉、善い哉、大王聰明なりと。こゝに於いて摩呬

陀王の賢能く佛法を堅立すべきことを知り、即ち王の爲に

象譬經 CUJAHATHIPADOPAMA SUTTA を説き、又天衆の爲に平等心經 中阿舎經卷七象跡喻經。

SAMAGGITA SUTTA. 中 阿含經卷五等心經。 を説く。明旦王摩呬陀を城に迎へ、夫人阿菟羅
 ANULI. 或は曰はく王弟 摩訶男 MAHINAMA の妃。 等と共に餓鬼本生經、 PELVAYATTU. 毗多。 宮殿本經
 YIMNAVATTU. 毗摩那。 及び四聖諦を説くを聞く。民亦集まり來りて法を

聞かむとす。王仍りて摩呬陀を大象屋に請ず。摩呬陀即ち民
 の爲にこゝに天使經を説く。既にして象屋亦衆を容るゝに
 足らざるを以て、城南門外の難陀 NANPANA. と名づくる王園に
 移りて犢譬經 ASVISOPARA SUTTA. 前の譬喻經と同じ。 を説く。王眉伽園 MEGHAVANA. を摩

呬陀に喜捨し、摩呬陀は又民の爲に無始界經を難陀園に説
 き、更に王宮に於いて不懈怠經 APPAMADA SUTTA. を説き、又大臣阿栗抽
ASVAGHOSHA の忠告を聞き、ありて後支帝耶山 CETIYAGIRI. 即ち眉沙迦山。 に歸りて

安居す。安居了はりて後、摩呬陀帝須に勧め、修末那を阿育王
 の許に遣はし、佛舍利を請ひ來りて塔園寺 THUPARAMA. に安置

せしむ。この時王弟無畏 ABHAYA. 出家す。既にして王夫人阿

菟羅亦出家せむとす。王度を摩呬陀に請ふ。摩呬陀曰はく。我
 等沙門は女人を度すること能はず。我が妹僧伽蜜多比丘尼
 と爲りて波吒釐子に在り。これを迎へて師と爲し、また菩提
 樹を分ち來りてこの國に種うべしと。王即ち外甥阿栗抽を
 遣してこれを阿育王に請はしむ。王、わが子摩呬陀及び孫
 修末那の去りしより、これを見ざるここ久しく、日夜憂惱心
 に離れずして、猶手足を斷られたるが如く、僅かに僧伽蜜多

を見て愁を遣るに過ぎざるを、汝亦去らば我必ず死せむことこれを留めむとす。僧伽蜜多兄の言に阿菟羅を度するところを重しことして往かむことを請ふ。王遂に止むことを得ずして、伽耶の菩提樹を分ち取りて齋さしめ、みづから菩提樹を耽摩栗底YANALIPPI, YAMRALIPPI. 旃加河の支流 HUGHLI 河口。今の CALCUTTA 附近。に送る。僧伽蜜多比丘尼十一人を従へ、阿栗抽と共に耽摩栗底より舟にて師子國の閻浮俱那衛渚JAMBUKOLA. PARIJANA.に着す。帝須王水に入りて菩提樹を迎へ、王城に入れてこれを供養し、南門外一拘盧舍の眉伽園中に於いて、基城を作り門屋を設けて移し植ゑつ。この木法顯の見たる頃既に高さ二十丈許りなりきと云ひ、今現

に阿菟羅陀補羅の「ルワンエリ」RUWANVELI. 塔址の南方なる眉伽

園に存して繁茂り。時代の知れたる古木として、殆ど世界第一と稱すべし。王夫人阿菟羅は僧伽蜜多の度を受けて出家しつ。これ等の事は阿育王登位十九年に當れり。摩呬陀の本道場は眉伽園の摩訶毘訶羅MAHAPARIVARA. 大精舍。なりき。佛國記に城南七里に在りて三千の僧ありきと言へり。阿菟羅陀補羅の東八哩餘VIA SACRA.の地に、摩呬陀が晩年退隱せりきと傳ふる處あり。樹蔭深き丘陵の上に在る洞窟にして、西の方平野を望み、幽邃なること譬へむに物なく、盛夏の時その中に坐すれば、耳唯昆蟲の羽音を聞くのみなりと云ふ。今に摩呬陀の石

床を存ず。謂はゆるミヒンタレ MUHINTALE. 此れなり。摩訶陀は少
 き時波吒釐子に在りても比丘陵 BIKUNA PAHARI. に幽居して苦學し、
 その遺蹟も尙存ぜり。摩訶陀の人品想ひ見つべし。阿菴羅陀
 補羅には謂はゆる故宮の千柱、壯大なる石砌の浴地、及び眉
 伽園の菩提樹壇に登る石階その他に用ゐたる半圓形の月
 石等、國都の此處に在りし頃の遺物頗る多し。月石彫飾の一
 例を言へば、中央に蓮花、次に鶯群、外邊に馬と象との列等を
 刻せり。以て錫蘭古代の藝術を考ふるに足る。

帝須王は在位約四十年にして歿し、MAHAVANSA に依りて推歩すれば
 基督前二百六十七年に當る。
 王弟鬱帝臈位を嗣ぐ。摩訶陀は鬱帝臈登位の第八年、上座授

戒後六十年、僧伽蜜多はその翌年、法臘六十九にして寂せり。
 摩訶陀の葬儀は頗る盛なりき。その寂後、弟子阿栗抽及び
 帝須達多、迦羅須末那、地伽修摩那 TISSADATTA, KALASU-
 NANA, DIGHASUMANA. 等相次いで
 法を傳ふ。鬱帝臈王在位十年にして歿せし後 NAHISIYA, SURATTISSA
 のニ王あり。
 幾もなくして「タムリカ」TANULIKA. 達羅毗荼の
 一國、今の部はゆる TAMIL. のエセラアラ ELARA. に
 云ふ者ダクシナアパタ DAKSHINAPATHA. 南地の義。今 DEKHAN,
 DECCAN を稱す。類陀山南を云ふなり。 より入寇
 し、帝須の弟アセセラ ASELA. を殺して 205 B.C. 錫蘭の北部を占領し、王
 と稱する。ここ四十四年なりき。基督前百六十一年頃帝須の
 同胞某の子ツッタガアマニ DUTTIA-
 GAMANI. 父祖の遺業を恢復せしに、
 この王歿して 137 B.C. 後三十四年、敵又來襲しつ。ツッタガアマニ

の子ワッタガアマニ VATTA-GAMANI が再び敵を逐ひしは、基督前八十八年なりき。南方の三藏はこの王の世に於いて基督前八十五年に成りぬと云ふ。阿菴羅陀補羅故城北の阿跋耶祇釐 ABHAYAGIRI の大塔も、この王の基督前八十七年に建つること無し。無畏山。

のにして、元と四百五呎の高さありき。今崩れたりと雖も尙地上二百三十呎に下らず。法顯の行ける頃 300-414 A.D. この伽藍に五千の僧あり。その後支婁の頃 645 は、阿跋耶祇釐と摩訶毗訶羅と既に部執を異にせりと雖も、僧徒皆戒行貞潔にして、儀範師とすべかりきと云ふ。ワッタガアマニは一切の三藏を文字に寫してその保存を圖りたる王にして、基督前七十六

年に殂し、その後三十五代を経て、基督後三百四十一年より三百七十年まで、ブツダダアサ BUDDHA-DASA 王治世の間、「ヂイバ
ワムサ」及「シンガリイス」 SINGHA-LESE 語の註釋を編録せしめき。法顯が無畏山伽藍の佛殿に晋土の白絹扇を見て涙を流ししは、ブツダダアサの後二代の王摩訶男 MAHANNAMA の時とす。後幾もあらずして、基督後四百三十二年の頃、伽耶に生れし僧佛鳴 BUDDHA-GOSA 錫蘭に入りぬ。その遺せる「パアライ」 PALI 語の著作多し。一切善見律論 SAMANTA-PISADIKA の原本の如きこれなり。佛鳴は四百五十年の頃その著書を携へて緬甸地方を遊歴しつ。摩訶男王の後ダアツセエナ DHATUSENA 王あり。篤く佛教を保護す。
412-434

この時王の伯父なる僧摩訶男「マハアワンサ」を編しつゝ、マハアワンサは基督後四百五十九年以下の記録にして、後歴代繼承して追記せるなり。西曆八世紀の末奈良朝、中唐錫蘭の都は阿菟羅陀補羅よりポロンナルワ POLONNARUVA. に遷り、後又今のカンダイ KANDY. に遷りぬ。

阿育王より以前の佛教は僅かに中印度に行はれて、僧衆も信徒もさまで多からざりしものゝ如し。然るに阿育王のこれに歸依してより、啻にその本土に盛なるのみならず、東西南北の諸國に流布せられて、後世殆ど亞細亞の全土を覆ふに至る大宗教の洪基を開きつ。されば阿育王が弘宣久住の

功は、教祖佛陀のこれを開ける徳と並べ稱するも、復た殆ど過褒に非ずと謂ひつべし。

拾貳 巡禮

阿育王は灌頂第二十年 B.C. 250 佛蹟を巡禮しつ。北傳 阿育王傳卷一、卷二、阿育王經卷二、卷三。

に依るに、王八萬四千塔を造りし後、屈吒阿濫摩寺の上座耶

舍 YASA. に聞いて、秣菟羅 NATHURA. 摩訶羅、末突羅、MAHDHURA. 摩頭羅、摩度羅、孔密

三十分二秒、東經七十七度 名聞。 の賣香の長者毘多 GUPTA. の子郎波毘多大

徳が優留慢荼 DRUJUNDA. 山の那哆婆哆 NAPABHATIKA. 寺に住するこ

こを知り、使を遣してこれを屈請す。郎波毘多即ち一萬八千

人の阿羅漢を従へて舟に乗り、閻牟那河より兢伽河を下りて波吒釐子に至る。王みづから出でて厚くこれを歓迎し、佛の遊方行住の蹟を禮せむと欲することを告ぐ。鄔波耆多これを嘉し、王を導きて先づ佛誕生處なる北憍薩羅ウツカラコサラ DEVARA-KOSALA の臘伐尼に詣づ。王十萬金を供養して塔を起さしめきと云ふ。この時馬像を冠したる石柱を建て、臘伐尼の租税を免じ、又布施するところありしことは、先に出だせる現存の石柱に徴して眞に事實なることを知るべし。此處より東南に向ひて劫比羅伐窣堵に至り、迦羅迦村馱佛の塔と、七年前曾て増築せりし迦諾迦牟尼佛の塔とを禮し、共に石柱を建てて來詣

の事を録せしとは、又西域記と前出の遺品とに依りて明かなり。この時釋尊幼時の諸蹟劫比羅伐窣堵に在り。 及び踰城後の還僕、剃髮、易衣跋は並びに藍殿園に在り。 苦行、受乳糜跋は共に婆羅痾斯に在り。 龍王見佛跋は摩揭陀に在り。 等の諸處に詣でしことは、阿育王傳至る處皆塔を建てきと云ふ。 阿育王經龍王見佛處に塔を建てきと云ふ。 に見えたり。ASOKAVADANA 王はこれより摩揭陀の佛成道處なる伽耶の菩提樹に詣で、十萬金を喜捨して塔ASOKAVADANA は GATIYA とす。 を建て、婆羅痾斯の佛初轉法輪處なる鹿野に至り、捨金、建塔、菩提樹に同じく、更に頻毗娑羅王及び帝釋天INDRA SAKRA 受化の處共に摩揭陀に在り。 佛の忉利天爲母說法より來下せし處ASOKAVADANA はこの三處なし。 拘尸那揭羅の佛涅槃處、室羅伐悉底の逝多林、摩揭陀の舍利弗ナハリ PUTRA

奢利宮多羅、奢利補怛羅、舍利MAUDGALYANYA. 目健羅夜那、目健連、弗多羅、舍利子、鷲鷲子、身子。**目連**目乾連、沒特伽羅子、沒刀伽羅子、胡豆。阿難ANANDA 阿難陀、歡の塔及び大迦葉、MAHAKASYAPA. 摩訶迦葉波、飲光。薄拘羅YAKKULA. 薄句、の塔に詣で、

舍利弗、目連、大迦葉の三塔には各々十萬金を供養し、阿育王傳には塔を

建つ。阿難の塔には、その佛弟子中智慧第一にして法身を總

持せしを尙び、一億金阿育王傳。阿育王經には十萬、を供養し、薄拘羅

の塔には、その化他の功なかりしを以て、僅かに一金錢阿育王傳。阿育

王經には二十貝子、ASOKA. VADINA には一銅錢とす。を供養しきと云ふ。

この事南傳に見えざるは、憶ふに摩呬陀の錫蘭に行きし後の事なればならむ。然れども二石柱の現にこれを證するあるは、北傳の頗る信を置くに足れる徴と爲すべし。嘗に現存

の二石柱のみならず、前に擧げたる如く、拘尸那揭羅涅槃像精舍塔、分舍利處塔、婆羅痾斯國婆羅痾河西塔及び鹿野伽藍塔、室羅伐悉底の逝多林精舍、摩揭陀國迦蘭陀池西北塔等にも石柱ありしこと明かなれば、王は少くも佛蹟の最も重き四處誕生、成道、初轉法輪、涅槃。をば巡禮せしならむ。唯上記阿育王傳、阿育王經等に見えたる順序は、佛傳の先後に従へるものにして、その行程は必ずしも信ずるに足らず。地理に依りて憶ふに、王の巡禮の順序は一誕生處、二涅槃處、三初轉法輪處、四成道處にして、略玄奘西域記の行程に同じかるべし。因みに言ふ。後世この四佛蹟に加ふるに逝多林、曲女城KANYAKUBJA. 羯若鞠闍、王舍今の KANAUJ, KANOUJ.

城廣嚴城共に佛の説法せし處。の四者を以てして、八大靈塔八大靈塔經等に稱す。雖も古くは主として四佛蹟を重んじ、從ひて佛傳も八相降兜率、託胎、降生、出家、降魔、成道、説法、涅槃を小乘八相と云ひ、大乘八相は、住胎を加へて降魔を除く。より四相誕生、成道、説法、涅槃を立てしものなること、古代の彫刻殊に鹿野より出でし石浮彫圖等に就いて見るべし。

拾參 眷屬

阿育王の同母弟帝須、毗多輸柯、王子ウツジニヤ、摩呬陀、王女僧伽蜜多、女婿阿耆婆羅門、孫修末那、及び即位以前の妃提鞞の事は、既に前に見えたり。爾餘の眷屬の事は、王子拘那羅

KUNTLA. 拘那羅鳩那羅、拘拏浪。

の話説の外、甚だ記載に乏し。王は古代の俗に從ひて多くの後宮を有せし如くなるに、唯その妃三四人の名のみ僅かに傳はれり。

王の正妃とおぼしきは、南傳MAHAVANSA 第二十卷。に依るに、初めアサン

ヂミッタASANDHI-MITTA.あり。諸國布教の後十二年即ち王の登位二

十九年にみまかりぬと云ふ。この夫人は王と共に先に佛戒を受けつと、おぼしく、北傳の鉢摩婆底PADMAVATI. 蓮華。とは同人なるべし。

第二の王妃は名をカアルウラキイと云ひ、王子チイワラを生めりしものにして、その菴沒羅林、遊園、客堂等を布施せり

しここ、アラアハアバアド石柱の誥文に見えたり。

アサンデミッタアに次いで正妃たりしはチレキ徴沙落起多タタ PISYA-RAKSHITA.

TISSARAKKHITA, TISSARAKKHA, TASSA-RAKHA. 帝舍羅又帝失羅又光護淨容。にして南北兩傳共に、王が菩提樹

を愛するこのの深さを嫉みて、これを枯らさむと謀りしこ

ごを語れり。南傳に依れば、アサンデミッタアの歿後三年即

ち王の登位三十二年に正妃と爲りきと云ふ。

北傳 阿育王傳卷三、阿育王經卷四、瓊目因緣經。

阿育王傳卷三、阿育王經卷四、瓊目因緣經。

には、徴沙落起多妃の事に連なりて、太子

拘那羅の事傳はれり。拘那羅は先妃鉢摩婆底の子にして、八

萬四千塔の成就せし日に生まれ、その目の美しきこと拘那

羅鳥に似たりと云ふを以て名づけられ、又天帝の像に似た

りて天眼とも呼ばれき。諱を達磨婆陀那 DHARMAVARDHANA. 法益、法増。

云ふ。長ずるに及び、父王爲に干遮那摩羅 KANAKAMALA. 真金鬘、金鬘花。 を娶りて

その妃と爲す。一日王太子を伴ひて屈吒羅摩寺に至る。上座

耶舍 瓊目因緣經にては善念。 これを見て眼目の無常を説き、その失明を預

言せり。太子宮に歸りて獨坐靜慮す。徴沙落起多妃太子の美

を戀ひ、情を以てこれを挑む。太子應せず。妃仍りて深く太子

を嫉めり。王太子をして往いて坦叉始羅を治せしむ。 阿育王傳、阿育王經は四

又始羅叛すと爲し、瓊目因緣經は健駄羅と爲し、西域記には妃王に勸めて太子を遣らしむと爲せり。 王これを送りて別る

時、婆羅門の一相師再び太子の久からずして眼を失ふべき

を言ふ。既にして王大いに病み、醫の能く治する者なし。仍り

て太子を召し還して位を傳へむとす。妃これを愁へ、王の病を治せむと欲し、王と同病の人を求め、之を殺して病原の蟲を検出し、蒜能くこれを死せしむべきことを知り、王に勸めて蒜刹帝利種は蒜を食はざるを常とす。を食はしめ、以て王の病を治せり。王喜びて妃に約するにその欲するところを許さむことを以てす。妃念へらく、拘那羅に報ずるは正にこの時なりと。即ち王に請ひて七日の間王權を委せられ、咀又始羅の民に與ふる偽書を作り、拘那羅の兩眼を刳せよと記し、王の眠れるを伺ひて、竊かに牙印を捺して遣りぬ。阿育王傳、阿育王經に依る。璣目因緣經には王の病、妃のこれを治したること、及び王權を委ねられたることなく、太子の曾て輔臣耶奢の頭を打ちしより、耶奢も亦太子を怨み、妃これと謀りて偽書を作り、王を醉はしめてその金印を盗用しつと爲せり。

王夢に齒牙墜つと見て占はせしに、卜者太子失明すべしと告げしかば、憂へて祈禱しつ。咀又始羅の民書を得て太子に示し、太子賤者を召して己の眼を刳らしめむとす。賤者辭みしかば、太子寶冠阿育王經、阿育王傳には價直十萬兩の寶冠とし、璣目因緣經には價直千萬の寶環及び無數の金銀を懸けて創手を繋ると爲す。を與へむことを約して一の醜惡人を得、創手と爲して眼を刳らしめ、これを掌に載せて悟道を得、微沙落起多妃の詐謀なることを知り、妃の爲にその長壽安樂を祈り、悲泣せる干遮那摩羅に告ぐるに、自業の所得なることを以てし、共に咀又始羅を去り、素と善くせるところの琴を鼓して行くく、乞食し、波吒釐子に至りて一夜王旣に宿る。王その

琴歌の聲を聞き、召してこれを見る。こゝに於いて王妃の悪事忽ち顯れ、王その罪を糺さむとす。拘那羅爲に助命を乞へ

ごも聽かず。終に妃を焚殺しつ。時に菩提樹伽藍に阿羅漢瞿

沙ゴサ、妙音。

ご云ふ者あり。王これに拘那羅の明を復せむとこを

請ふ。瞿沙即ち人を集めて説法し、各々一器を持ち來りて聽

聞せしめ、説法了りて衆涙を集め、これを金盤に盛りて誓願

を發し、以て王子の眼を洗はしめしかば、兩眼明視忽ち元の

如くなりきと云ふ。王後塔を王子刳目の處に建てつ。盲人の

祈請する者多く復明を得たりと稱す。復明の事は唯西域記に見えたり。

拘那羅の話説は、六度集經戒度無極章。中佛本生傳の一たる法施一に法盤に作る。

太子の縁と同じく、又佛國記には法益眼を以て人に施しつ

と爲せり。さればこの事元と佛本生傳より出で、後人のこ

れを阿育王太子の譚に作爲したるにはあらかじか。六度集經

は吳の康僧會の譯にして、西晋安法欽の阿育王傳、梁僧伽婆

羅サウハパ、僧護。の阿育王經及び符秦曇摩難提ダハマンナンディ、法喜。の阿育

王息壤目因緣經は、皆これより後の譯出なるも、亦この見を

助くるに似たり。而してこの話説は又頗る羅馬コンスタン

チヌスの王子クリスプスクリスプス、が父王の妃ファウスタファウスタ、

の戀慕の爲に害を蒙りしに似たり。唯クリスプス王子の事

は上記諸書の漢譯よりも後なるが故に、拘那羅の話説のこ

れより出でたるに非ざるこそ明かなりとす。

拘那羅失明の後、阿育王拘那羅の子三波地

SAMPADIN. 具足阿育王傳には或摩提に作る。

立てゝ太子と爲しゝことは、亦阿育王傳と阿育王經に見えたり。

拾肆 晩年

阿育王の誥文は灌頂第二十七年にして終れるが故に、その晩年の事は徴するに由なし。故を以て今唯阿育王傳三卷と阿育王經五卷に依りて、菴沒羅の半菓を僧に施しゝ因縁を叙することを得るに過ぎず。

王鄔波耄多に問ひて曰はく、佛在世以來、誰か最も大いに布

施せしか。答へて曰はく、長者須達多SUDATTI. 蘇達多、須達、善施、樂施。と名づくる

者あり。能く百億阿育王傳、阿育王經には百千萬とす。以下これに準ず。の金を布施しきと。王即

ち己が身及び拘那羅、宮人、群臣乃至大地を以て盡くこれを

布施し、無数の金を以て復たみづからこれを贖ひ、先の摩提陀國波吒釐子

城南佛鉢精舍側石柱の刻文は或はこれを言へるか。

菩提樹の保護、大會その他施僧の費等を合せて、計るに尙九

十六億金に過ぎず。偶々王病を得て憂惱措かず。大臣羅提耄

多所以を問ふ。王曰はく、我百億金を布施せむとし、その數に

充たざること尙四億。憂惱するところ唯これのみと。仍りて

四億金を發して將に屈吒濫摩寺に送り與へむとす。時に拘那羅の子三波地太子たり。羅提毬多これに勸め、守藏の吏を勸して金を出ださしめず。ことに於いて阿育王の令復た行はれず。唯金器の食に供せらるゝあり。王乃ちその金器を屈吒濫摩寺に施す。仍りて銀器を供すれば又これを施し、鐵器に更むれば又復たこれを施し、供御終に皆瓦器を用ゐる。この時王復一物を有することなく、唯半菴沒羅菓の手中に在るのみ。王大いに悲惱し、群臣を召し集めて問ひて曰はく。この閻浮洲、誰かその主たる。諸臣答へて曰はく。唯王を主と爲す。王曰はく。汝等の道ふところ虚妄なり。我はこれ主に非ず。

何を以ての故ぞ。我唯この半菴沒羅菓に於いて自在を得る

のみと。

阿育王傳。阿育王經には、大臣曰はく、天を主と爲す、更に異人なしと爲せり。

涙落雨の如く、王者にして

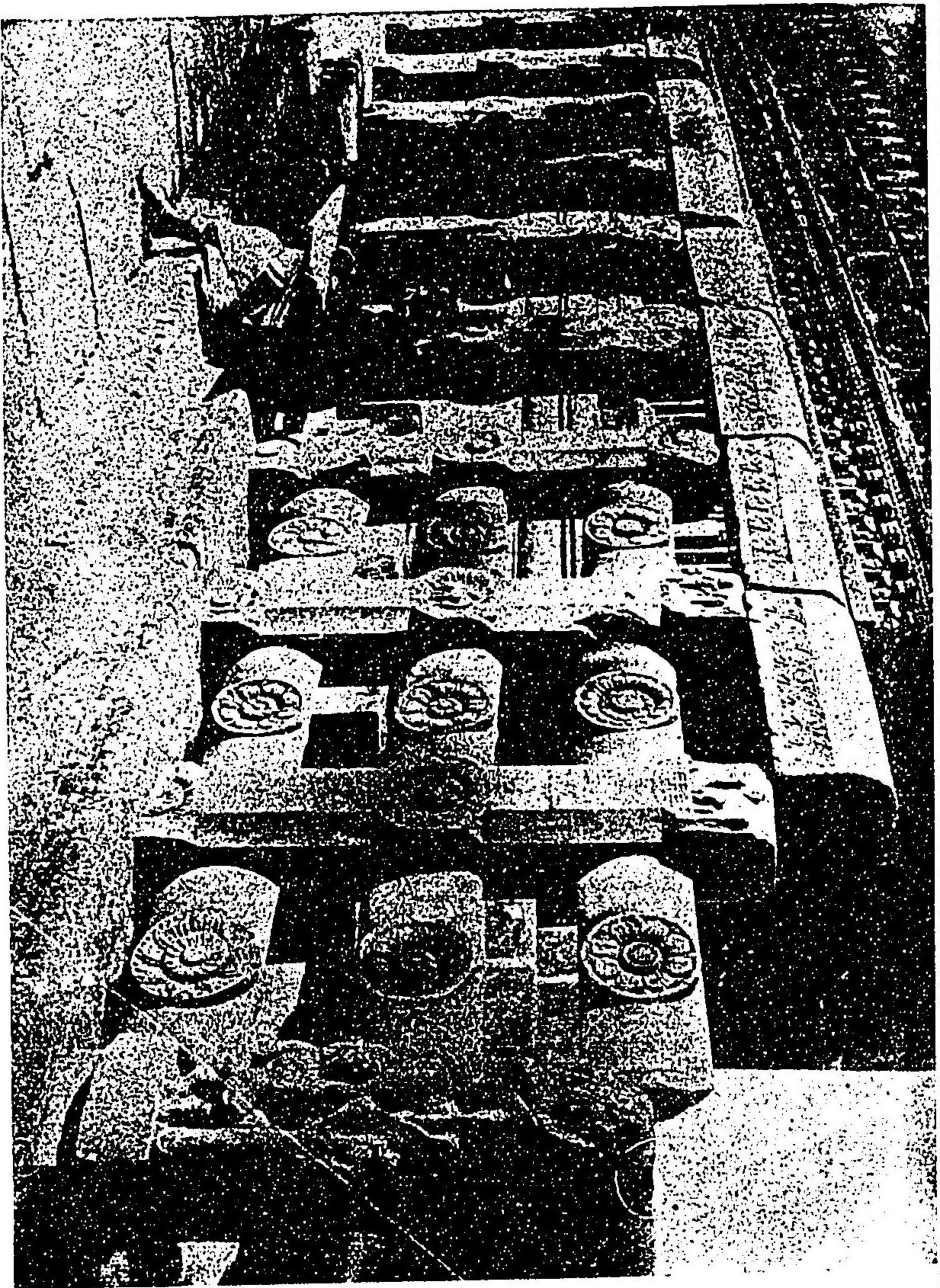
貧匱に終はることを歎じ、傍臣跋陀羅目矽BEADFRANKHAを呼び、

命じて曰はく。我自在を失へり。汝を最後の使と爲す。唯この一事汝應に作すべし。この半菴沒羅菓を屈吒濫摩寺に送り、上座を禮して我が語を宣して言へ。阿育王昔一切の閻浮を領せしが今は唯半菴沒羅菓あり。これ我が最後の布施なり。願はくはこれを受けよ。この物小なりと雖も、以て衆僧に施す。福德廣大なれと。上座耶舍諸比丘を集めてこれを告げ、菓を碎きて末と爲し、羹中に入れて以て遍く衆僧に行る。王又

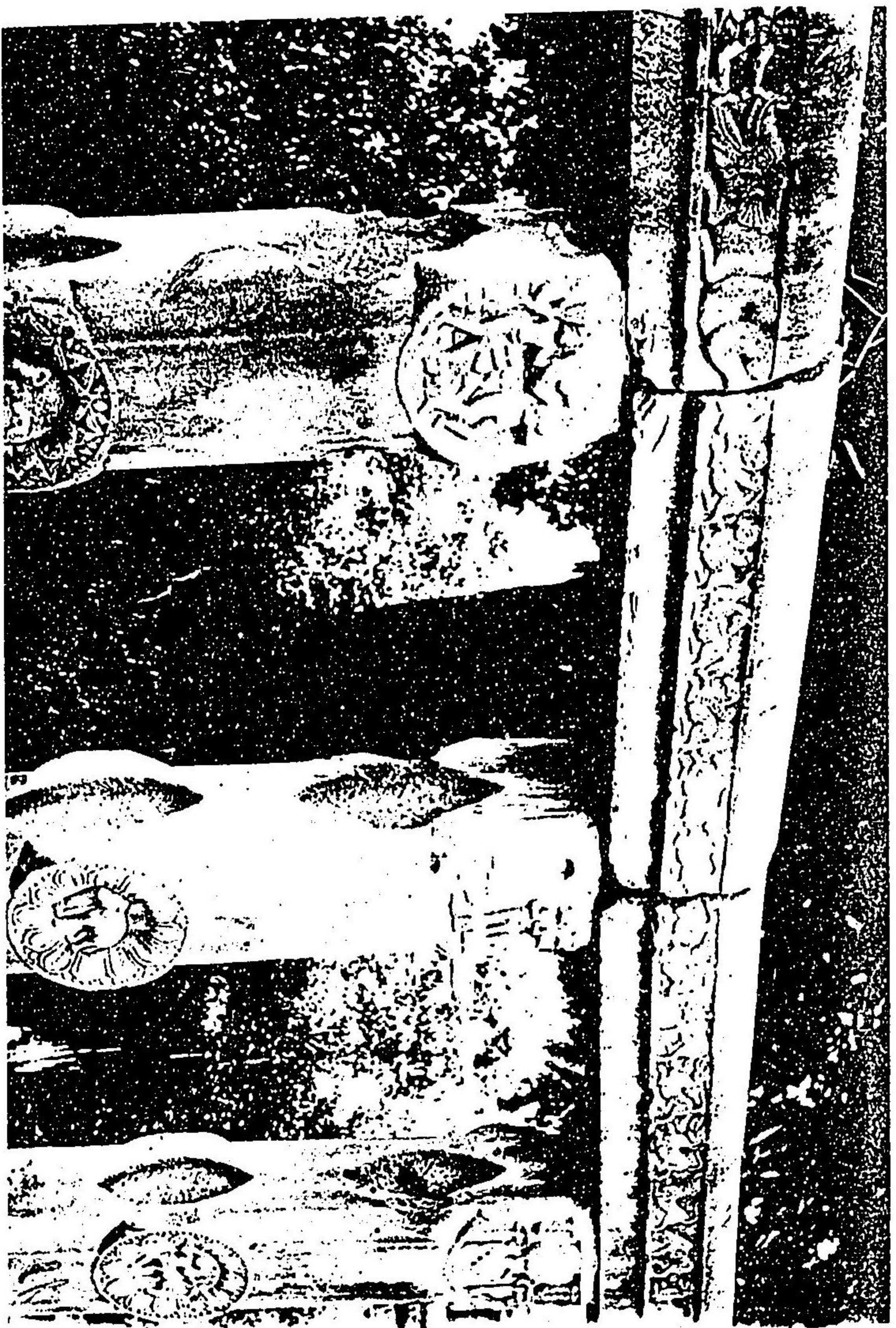
羅提邇多を召し、多羅 タラ FLAVA BORASSUS 葉を取りて詔書を作り、庫藏の珍寶の外、一切の大地四海を僧に施すに書し、牙印を捺して羅提邇多に附し、僧處に向ひ、合掌して即ち瞑す。諸臣相議し、王の先に満たさずとせし四億金を布施して以て大地を贖ひ、三波地を灌頂して王位に即かしめきと云ふ。

拾伍 藝術

阿育王時代の藝術の遺品は、摩崖の刻畫と彫出との象、石柱、佛陀伽耶の石欄及びバラアパアルの石窟の外的、的確なるもの甚だ稀なり。この中前の二者は既に前に述べつ。今當に後



第十九圖 佛陀伽耶の石欄



第二十圖 佛陀伽耶石欄の内面

の二者を説くべし。

佛陀伽耶の石欄 第十 九圖 は今菩提樹と大塔とを圍める四面の

中、ナイル、シ、ナア 尼連禪 NAIRANJANA 河に向へる面は全く闕け、北面の一

小部と南西二面とを存ず。高さ地面より頂まで七呎餘あり。

その構造は格かを連ぬるに三條の貫ぬきを以てし、上に笠木かさぎを載

す。格は方柱にして貫はその断面弧二角形を爲し、格の側面

の柄孔へまきに嵌まりて、而も格を貫かず。笠木は上面を圓め、内側

第二 十圖 は中部に獅象牛馬等の獸列を浮彫し、外側には下縁に

蓮花文を連ねたり。獸形は頗る奇にして間々翼あるものあ

り。希臘神話の半人半馬の「ケンタウロス」KENTAUIROS に酷似せ

るものあり。又鱷魚を圖せり。格は内外兩面とも上中下の三所に圓形の彫飾ありて、中下の二者は蓮花の中に人獸の全形又は半身を彫出し、上なるものは多く圈内に人獸の布局圖及び法輪、菩提樹等を浮彫す。布局圖中には制底チヤイキ、CATHYA、招提、制多、支帝、方墳廟、可供養處。舍利及び菩提樹を供養する圖あり。圓形彫飾の間をば、格角を削りて面を取れり。毎格間の貫にも亦内外兩面に蓮花文を彫出せり。四面の隅柱は滿面に人物の高肉浮彫を加へたり。雖も、破損して圖意明かならず。以上諸人物の表示は、名を題したるバルフウト BIARHUT, BAGHELKHAND & NAGAUDE に在り UCHAIARA の東北六哩、JABALPUR 鐵道の SUNTA 驛南九哩、ALIAHTRAD の西南約百哩に在せる一村。塔欄後に出づ。の浮彫に較べて、その何者なる

かの知らるゝあり。

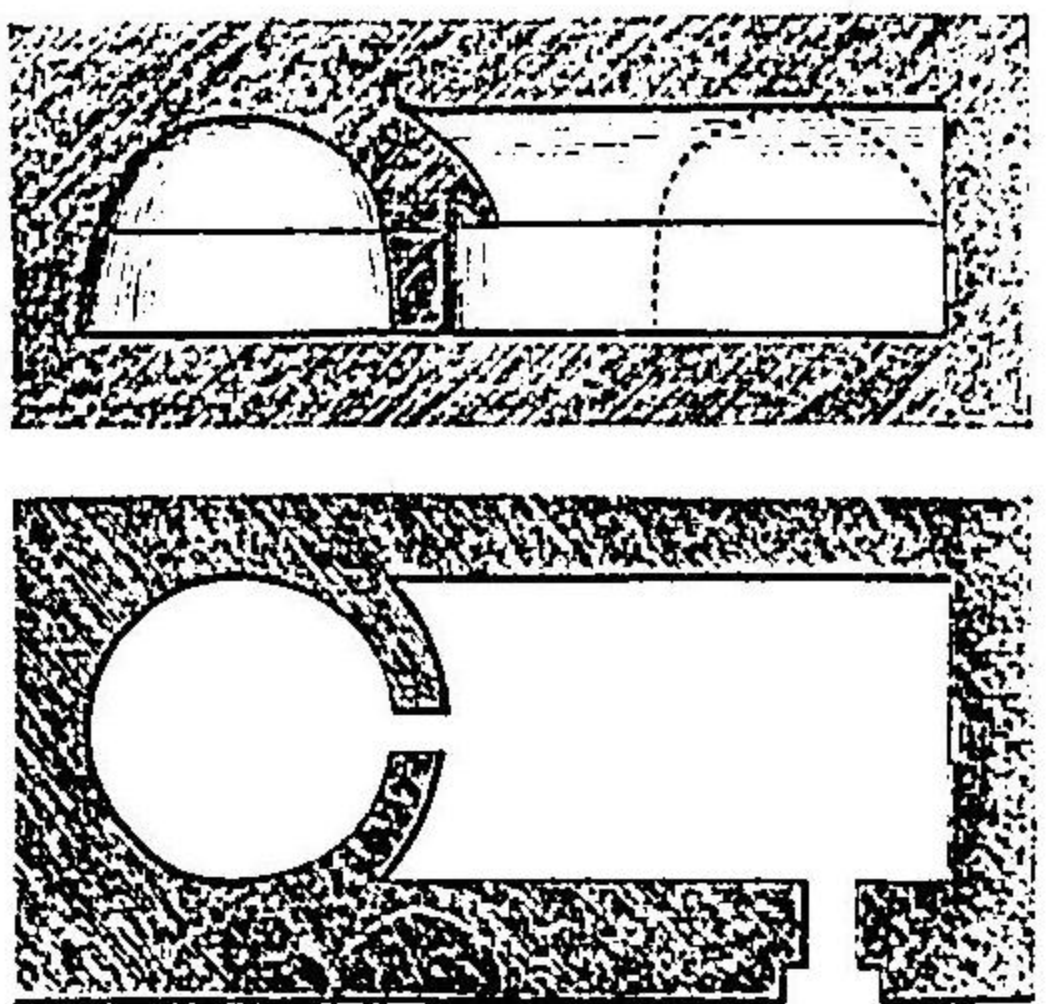
阿育王の刻銘あるバラアバアルの三石窟の中「スダアマ」窟原名尼俱盧陀樹窟。は王の灌頂後第十二年、即ち基督前二百五十八年の所造にして、方圓の二室より成り、方室の一端に近き側面に入口あり。方室の圓室に接する面は、圓室の壁の爲に凹弧を爲し、天井は兩室共に穹窿を爲し、壁面及び天井は、裝飾なし。雖も磨礪を加へたり。方室長さ中央にて三十二呎九吋、兩側にて三十七呎八吋半、廣さ十九呎五吋半、圓室縱徑十九呎十一吋半、横徑十九呎、兩室界の壁に穿てる通路、即ち壁の下邊の厚さ三呎四吋、室の高さ十二呎三吋六呎九吋以上穹窿。あり。圓室の

方室に對する外面は、壁上に屋宇の形斗出せり。入口は裝飾なくして、唯その外部方六呎半巖面より窪めること二呎なるのみ。第二十一圖はその平面と縦断面。銘文は東壁面に二行に鐫せらる。後人鑿もてこれを削らむことしつれども、原字の鐫刻深き爲に遂げざりしことは、その鑿痕に依りて明なり。蓋し後世の王者前人の功を奪ひて、これに己の銘文を刻せむことせしならむ。

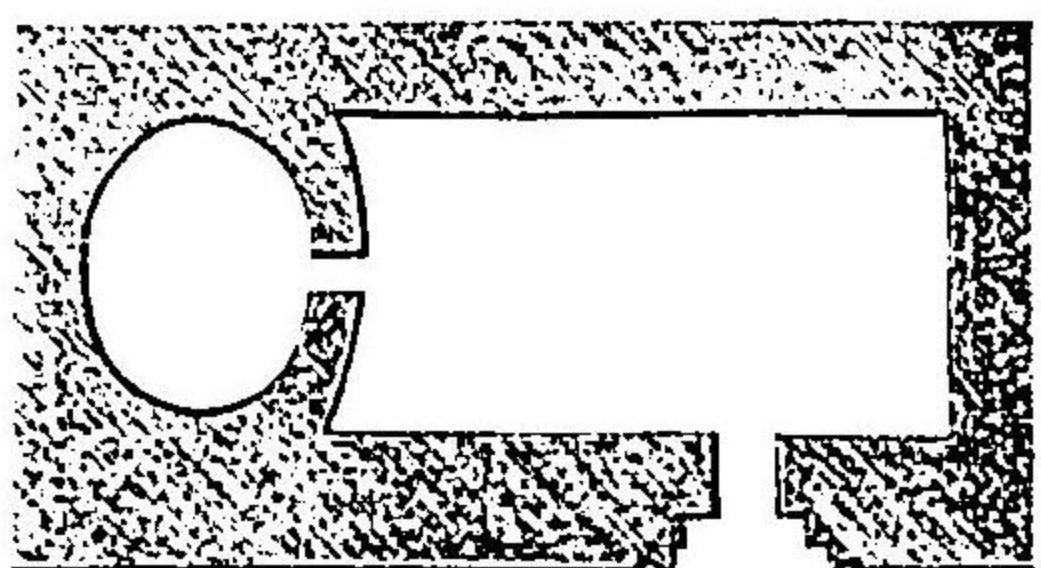
「キシユワ」窟も同年の所造にして、亦方圓の二室より成れり。方室長さ十四呎、廣さ八呎四吋、内面盡く磨礪を加へ、右壁に四行の刻文あり。圓室は徑十一呎。造功未だ全からず。

「カルナ」窟は王の灌頂第十九年即ち基督前二百五十一年の

「スダアマ」窟の縦断面及び平面



圖一十二第



圖二十二第

ロオマシヤ
仙窟の平面

圖三十二第



ロオマシヤ仙窟の入口

所造なり。前二窟と異にて單に一室に造營せり。然れども尙その端に壇VEDIありて、禮拜の用に供せられしものなることを知るべし。室の長さ三十三呎半、廣さ十四呎あり。壁面亦磨礪を加へたれども、裝飾なきこと前者に同じ。然れどもその入口には上方稍内に傾ける左右の側柱あり。入口の西面少しく窪みたる所を造りて、銘文を五行に刻せり。風化の爲に文字稍讀み難し。

この三窟の外「スダアマ」窟に接してロマシヤLOMAS, LOMASA仙窟ISI GUHA. 第

二十二圖はその平面。

あり。二室より成りて側面に入口ある形式及びその方量殆ど全く「スダアマ」窟に同じく、唯圓室の形稍橢圓短徑十四呎、長徑十七呎。

なるを異とするのみ。方室 廣さ十九呎八吋、長さ中部にて三十三呎八吋、兩側にて三十六呎五吋。 の壁面は既に磨礪を加へ、圓室壁 厚さ下邊にて四呎二吋。 は平かにして未だ磨かず。

兩室共に天井及び床上には尙鑿痕を留めたり。天井に石質自然の劈裂あるに合せ考ふれば、穿ちてこゝに至りて、それが爲に殆ど成りし工事を廢せしものならむ。この石窟には「アン

ドラブリチャ」王統 後に のシヤアルツウラワルマン、アナンタ SIRDJAVAR-MAN, ANANTA.

二王の刻銘あり。雖も古銘を抹殺せしものならむも測られず。窟の形式及び壁面の状態に徴して、亦これ阿育王の所造なるべきことを知る。果して然りせば、四窟中最も裝飾の美を具へたるこの石窟の入口 第二十 は、阿育王時代に於け

る建築の藝術を観るに、最も宜しきものと一なるべし。桃形 桃形 の搏風は傾ける兩側柱もて支へられ、その内に穹窿ありて飾るに群象の列をもてせり。この様式漸く複雑の美を加へて、後の BHAI, BEPSA, NASIK, KARLI. 等の諸窟に見るが如きものと爲るなり。

バラアバアルに接したるナアガアルジュニ丘にはダシヤラタ DASARATHA 王の刻銘 後に あり。ダシヤラタは阿

育王の孫にして、その父スヤシヤス SUYASAS は在位八年なり。この傳説に従ひ、この窟はダシヤラタ王の灌頂の後直ちに造りしものなるに考ふれば、凡そ基督前二百二十五年頃の所

造なるべし。大抵阿育王の刻文ある三窟に似て、藝術上別に説くべき特徴なきが故に、ここに述べず。唯その最大なる「ワヒヤカア」VAHYAKA窟長さ四十六呎五吋、
婆羅門女、廣さ十九呎二吋。は、一室にして兩端圓く、漸く後の制底の前方後圓の「プラン」PLANを生じ、又その大きさを増すに従ひて、内部に柱列を設くるに至る基ともなれるを知らば足りなむ。

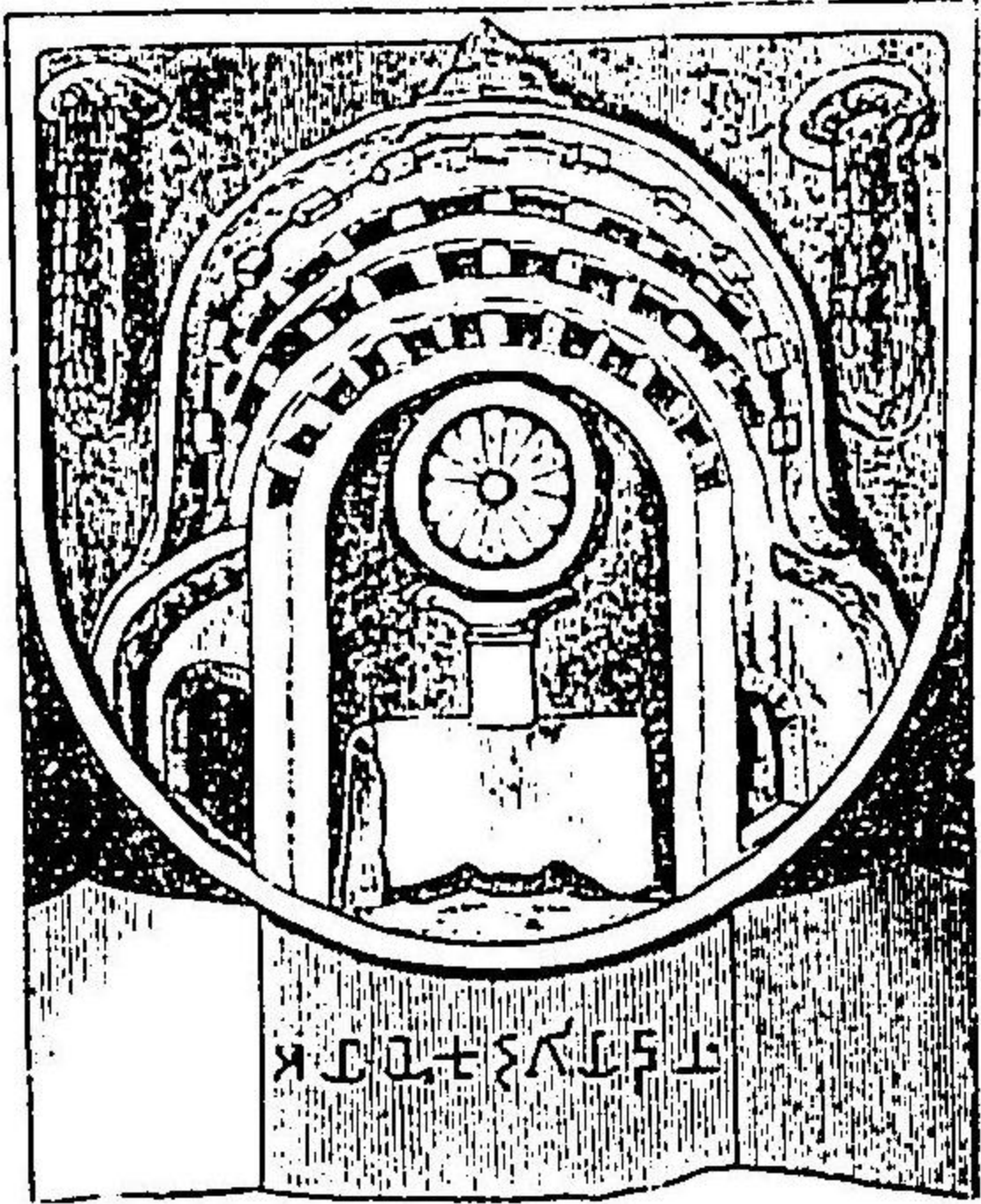
これ等の諸窟は並びに皆謂はゆる制底なり。制底は或は譯して可供養處と云ひ、後世舍利塔、佛像等を安置して禮拜する處たり。然れども阿育王乃至これより降ると遠からざる頃は、僧衆の住房たる毗訶羅との差別未だ著からずして、こ

ゝに法輪又は傘蓋を加へたる舍利篋を置きて禮拜し、併せて比丘の所居と爲し、ものゝ如く、前記の圓室乃至石壇は、即ち所禮物安置の用をなすことならむ。さればこそ「ダシヤラタ王の銘文に「住處」と曰ひしなるべけれ。制底の内にて禮拜するところの物の多く法輪等なりしは、佛陀伽耶石欄の浮彫にも、制底に法輪を置ける圖第二十
四圖。あるにて知るべし。

バラアバアル、ナアガアルシニニ兩丘の石窟よりも、或は古からむと想はるゝもの復無きに非ず。即ち「カッタアク」の南十七哩路程二
十哩。に位せる「ウダヤギリ」UDAYAGIRIの砂岩丘に在り。その象窟HASTIGUHA,
HATHIGUPHAは、傍の石に「羯陵伽王アイラ」AIRAの刻せしめ

たる十七行の長文あり。發見者 BEGLAR. 初譯者 PRINSEP. 字體は阿育王の誥文に同じ。プリンセップの始めてこれを讀みし頃は、カンニングハム等も亦阿育王以後基督前約二百年頃の銘文と爲し、かごも、ラアシエンドラ、ラアラ、ミトラ、HABU RAJENDRA はこれを以て基督前三百年乃至三百二十五年の所刻と爲せり。文中、アイラ王二十四歳にして、第三の戦勝を得て王位に即き、初め婆羅門教を奉ぜしに、後佛教に歸依して種々の大布施を行じ羯跋伽の國內に八十三の制底窟を造り、又許多の石柱を建てしと等を記せり。その第六行に難陀王の百屋を毀ちしと見ゆ。故を以てフェルガッソンはその著印度窟殿 CAVE TEMPLES

圖四十二第



佛陀伽耶柵格浮彫の制底

圖五十二第



ウダヤギリの師子窟

OF INDIA の中にこれを論じて、難陀王の後、阿育王の前を爲せり。この窟の自然の石洞にして、僅に人工を加へたるのみなる古朴の狀に考ふるも、フェルガッソンの言の當れるに近きを知るべし。唯その藝術上に言ふに足るものなきを奈何にせむ。されどこの石窟の外、ウダヤギリには尙師子窟第二十圖、龍窟等ありて、師子窟は巖の上外面を師子の頭の形に造り、入口は開きたる師子の口内に在り。龍窟は入口の上に三首の龍を彫出せり。入口は兩者共に少しく内に傾ける側柱を造り、又並びに阿育王の誥文に同じき字體の刻銘を有す。その文の初終には、アイラ王の銘文と同じく、三寶の象徴たる稍

標 TRISULA 卍字を記せり。師子窟の銘には「ウグラアカダ
UGRA AKHADA 又 UGRA の所造」三銘。とあれど、何れの時の人なるかを知ら
AVEDA ず。想ふにこの兩窟も亦アイラ王を距るここ久しからざる
頃のものならむ。

ウダヤギリに接して又カンダギリ KHANDAGIRI と稱する砂岩

丘ありて、ここにも「ワイクンタ」VAIKUNTHA 又 INDRA 「アナンタ」ANANTA

等の古窟あり。「ワイクンタ」窟 第二十 には「阿羅漢の恩を受けて

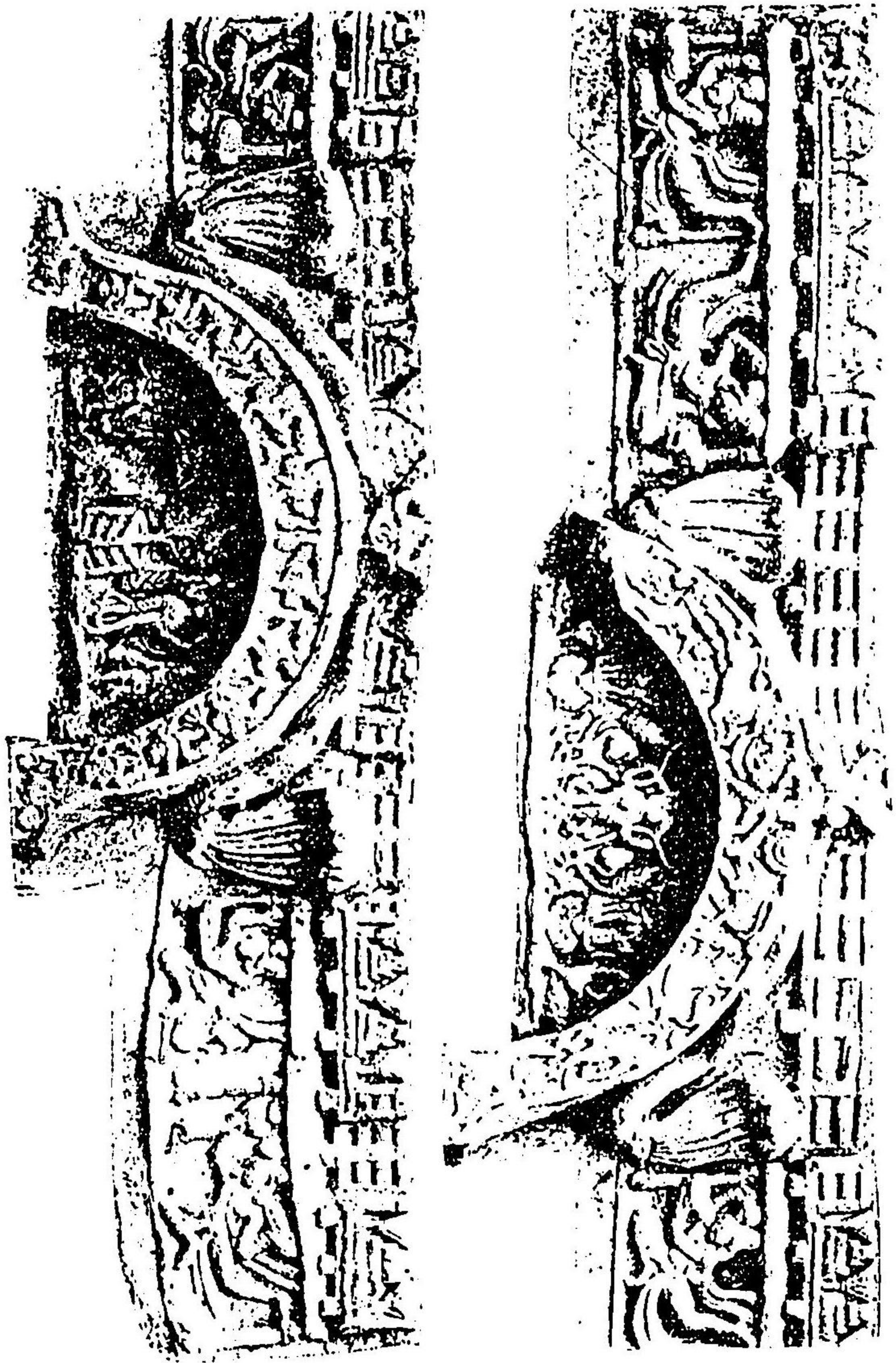
羯餞伽王これを造る」この銘を刻せり。爾餘の石窟 MANIKPURA 等。

にも、「羯餞伽の大王アイラ」又 VIRA の所造、「王子ワツダカ

VADAKA 又 VATVAKA の所造」なご記したる銘文ありて、字體は並びに阿育



諸窟「カバリム」の「カダ」 圖六十一



第二十七圖 カンギリ「アナンク」吡訶羅の浮彫

王時代のものに同じ。嘗に然るのみならず、アナンタ窟の入口は亦傾柱ありて、バルフウトの塔欄に似たる彫飾第二十を加へたり。されば是等の諸窟も、ウダヤギリのこの年代さまで隔歴せるものならじ。然れども、アナンタ、ライクンタの二窟は、前の象窟、師子窟及び龍窟の如き簡素なるものならで、各と數室を具へ、既に全く毗訶羅の體を成し、殊に「ライクンタ」窟は二層に構へられて、建築術上の技巧較く進歩せるを見る。故に學者この二窟を以て基督前約二百年乃至百五十年頃の所造と爲す。或は然らむ。

バルフウト及びサンチイ

この邊東四十七哩、南北十哩許の間、五六群の大小數多の古塔あり。

の大塔の

この頃の建立なるものは、學者の皆一致せる所にして殆ど疑なし。兩塔共にその門欄の刻銘は王の誥文と字體を同うし、彫飾の様式亦王の石柱頭と酷似す。然のみならず、

バルフウト塔は、門柱の刻銘に、VIŠVADEVĀ. 凡そ 300-270 B.C.の

孫、AGARĪĀ. 凡そ 270-240 B.C.の子、SUGAṆĀ. 即ち上國率那の大國 SREGHNA. その都城は今の SUGH.の王

ダナブウチDIHANAHIṬṬI. 凡そ 240-210 B.C.の名あり。又石欄の刻銘にダナブウチ

王の子ワアマVADHAPĪTĀ. 凡そ 240-210 B.C.ダバアラを記したるものあり。且ワア

ダバアラは當時尙王たらずして王子KUMĀRĀ.なりしことも

知らる。さればバルフウト塔の門欄は、基督前凡そ二百四十年乃至二百十年頃、即ち阿育王の晩年に成りしこと明かに

して、塔當體は阿育王の建立ならむも測られず。所以者何と云ふに、この地は昔南方鄔闍衍那と北方憍賞彌、室羅伐悉底及び東方波吒釐子と相通する大道に當り、この道のバルフウトより西南約六十哩を隔てたるルウプナアトには、先にも言へる如く、阿育王の摩崖あり、又東北アラアハアバアドに石柱ありて、若し王の鄔闍衍那に駐まり治せしと實ならば、屢々この道をも過ぎしなるべく、その沿道にこれ等の遺物あるも亦自然の數なりと思惟せらるればなり。

サンチイの大塔には、前にも言へる如く阿育王の石柱あるのみならず、大塔の外尙幾多の小塔ありて、その一CUNNINGHAM の謂はゆる

第二
號塔。

には目健連子帝須末示摩及び迦葉波等の舍利を納め、且つ大塔の四門中最も古しと見ゆる南門の貫の刻銘に、

シユリイシヤタカルニSRI-王の名ありて、シヤタカルニ王は「ア

ンドラブリチャ」王統ANDHRABRITYA凡そ基督前三十一年よ

り基督後四百二十九年か三十六年まで。

に三人あ

れど刻文の字體阿育王の誥文に同じきに依りて、相距るこ

と遠からざるに取り、これを最初のシヤタカルニ即ち凡そ基

督後十年より二十七年まで頃の王

第二の SATAKARNI は凡そ 64-119 A. D. 第三は凡そ 168-192 A. D. と

こ

爲し、塔當體は更にこれより古ければ、その阿育王の所建なるべきこといよく明かなり。唯大塔の當體にはこれを決定するに足る有形の徴あらず。又その北門、東門、西門はこれ

を南門に較ぶるに、時代いよく新なり。然れども最後に成

れりと見ゆる西門すら、南門より後るところと百年を出でじ

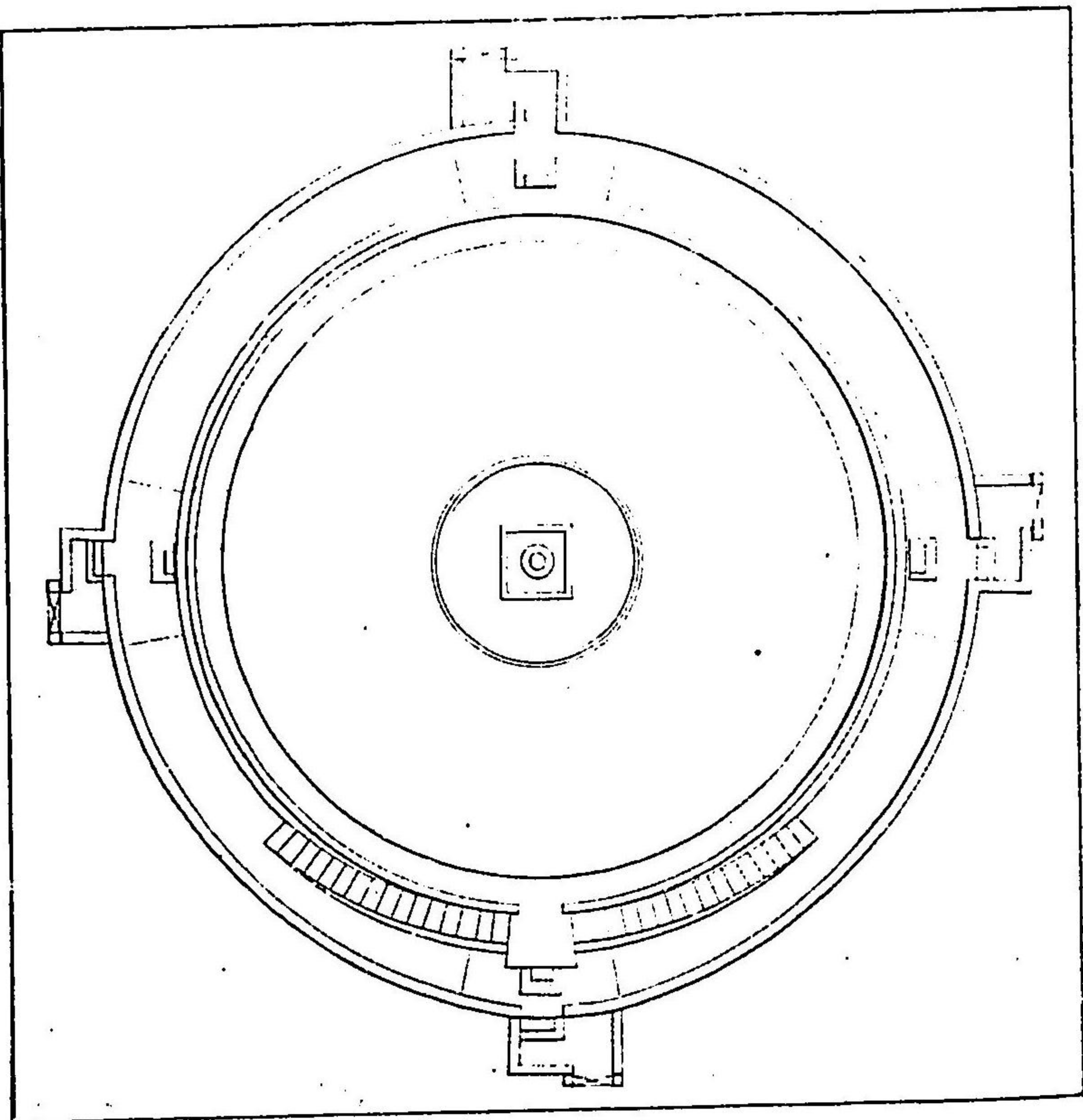
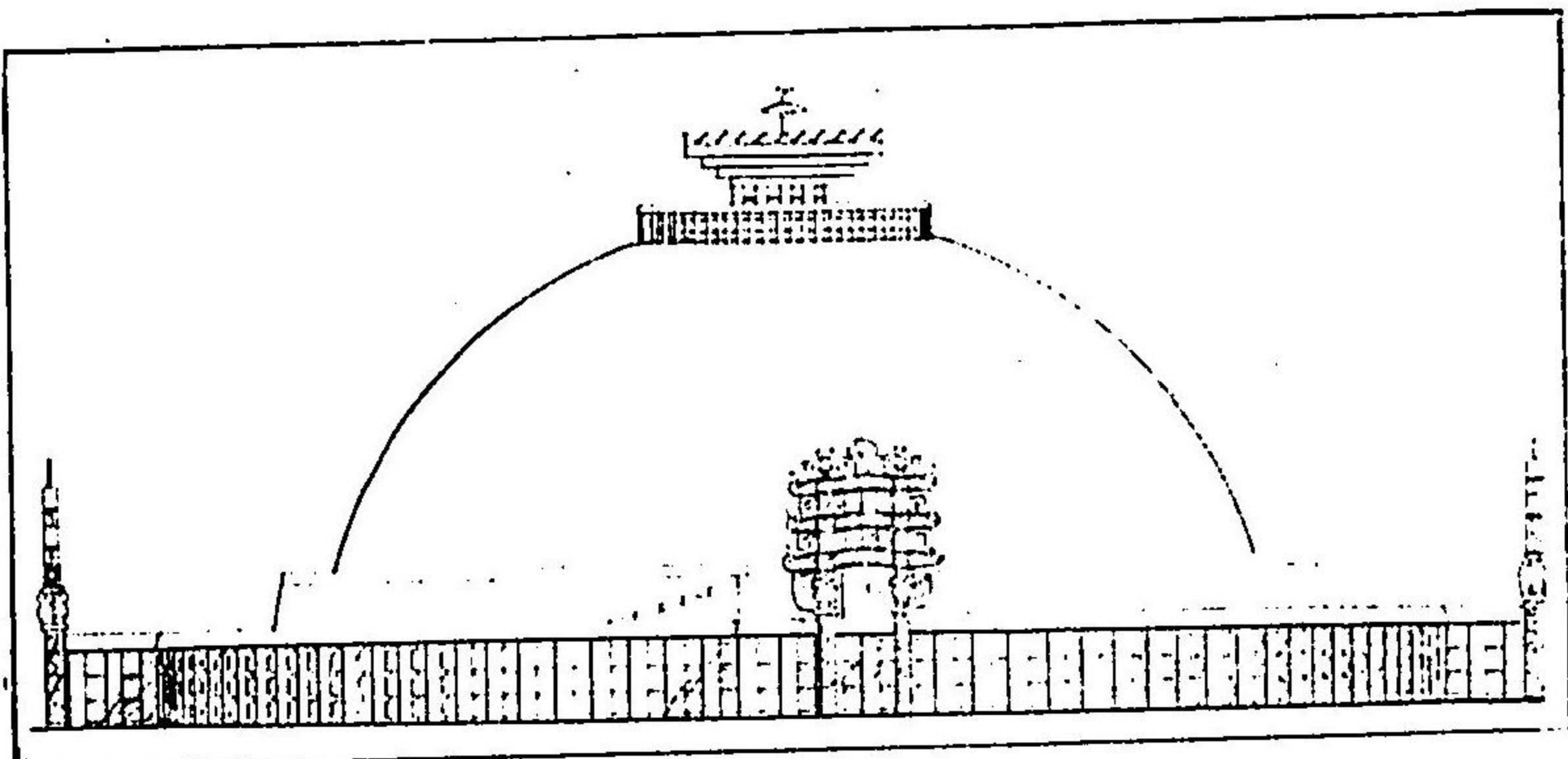
とは、西賢 CUNNINGHAM, FERGUSON 等の考據信すべきものと如し。

バルフウトの塔は現存の状態殆ど廢墟に過ぎずと雖も、その遺址と門欄石材の斷片とに依りて、その塔當體及び門欄の構造概ねサンチイの塔に同じかりしことと、塔身覆鉢の直徑約七十呎、高さ四十餘呎、石欄の圍むところの徑約九十呎、欄高さ七呎餘ありしことを知る。これに比すればサンチイの大塔は未だ甚しく崩潰せずして、覆鉢、門欄共に殆ど全く、南西の二門は地に倒れたりと雖も、その材は以て略原

形を構へ成すに足れり。その稍足らざるを補ひて近頃再建しつ。故に今これに依りて阿育王時代の塔の構造を略説すべし。

塔は地上に基礎あり。基礎の上に謂はゆる覆鉢勢を築く。覆鉢の底面直徑は基礎より短くして、覆鉢下の周邊に残れる基礎の上面は、謂はゆる遶塔の道を成せり。地より遶道に上るには階段を以てす。並びに皆磚もて築き、所々石材を交へ用ゐたり。覆鉢は殆ど正球の半より成り、少しくその頂を平にして、こゝに舍利篋を容るべき石方龕を造り、その周圍に圈狀の石欄を遠し、舍利龕の上には傘蓋を立つ。而して基礎

正 面

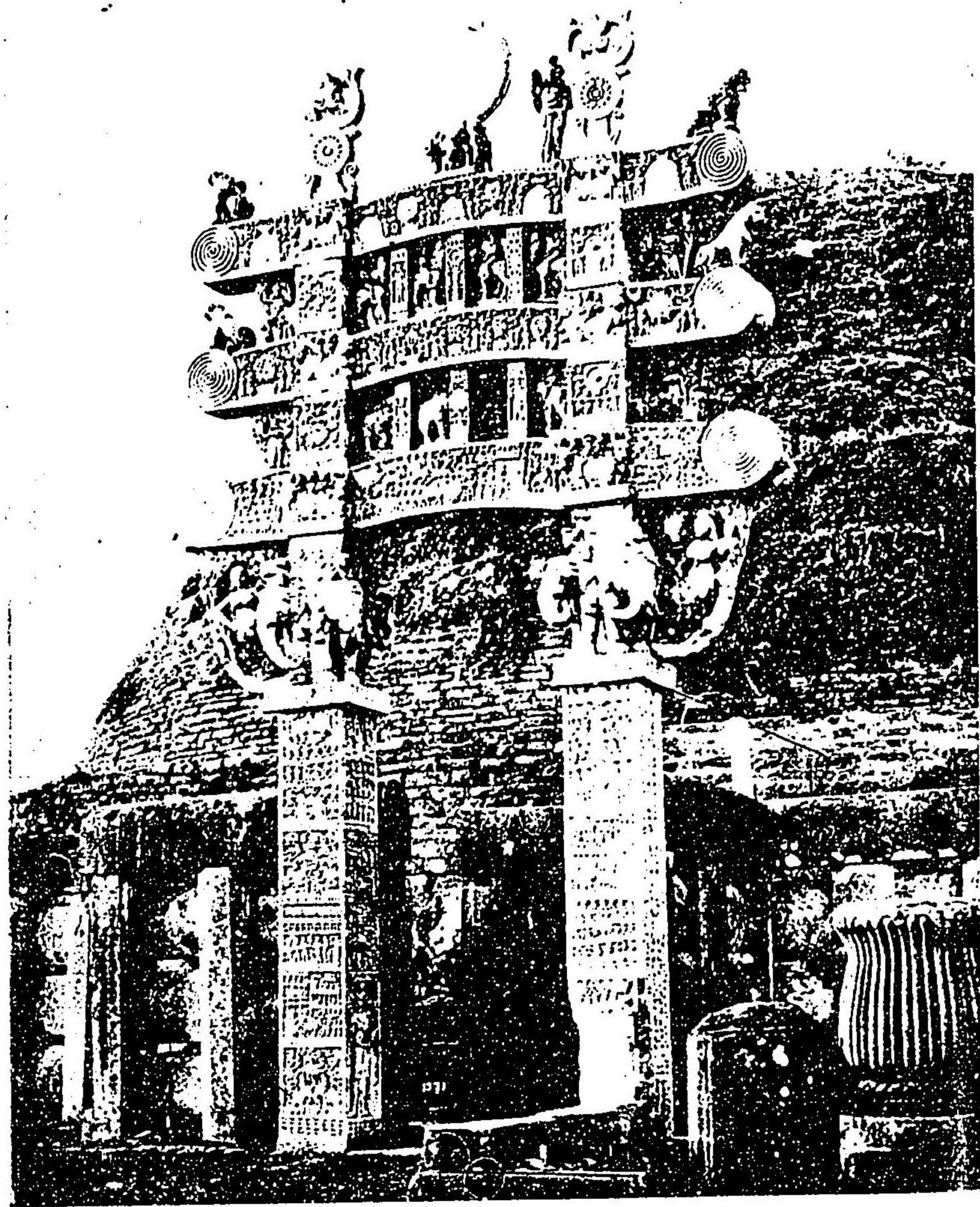


第二十八圖

サンチャイの大塔

平

面



第二十九圖

サンチイ大塔の北門

の外邊には石欄を遶し、その四方に門を開く。門の立つところ石欄斗出し、門路の曲折して欄内に入るこゝ、我が城門の柵形さしがたに似たり。第二十八圖は FERGUSSON の考定せる SANCHI 塔門。TORANA塔門TORANAは亦石もて造り、笠木の下に二條の貫あり。共に中部に於いて上方に彎曲す。その形支那の牌樓の如く、又我が鳥居に似て而も複雑せり。第二十九圖は SANCHI の最も全き北門。PULFUTの門柱は八角のもの四基を集めたる形に刻成し、柱頭に鈴形を着けたるのみにて、柱身に彫飾を加へず。雖も、サンチイの門柱は方形にして、四面悉く浮彫を施せり。笠木貫及びその間の短柱つちかと間束まぐさとは、二塔共に全く満面の彫飾より成る。石欄の構造は先に述べたる佛

陀伽耶のと同じ。サンチイの塔は石欄に彫飾なし。雖も、
バルフウトの石欄は、每格の中部に圓形、上下に半圓形の輪
廓を設けて、その中に種々の浮彫を施し、格角の削りたる面
にも亦彫飾を加へ、門傍の隅柱は滿面に浮彫あり。格間を列
ねたる貫の面にも亦各々一の圓形彫飾あり。SANCHIの
小塔亦同じ。笠木
の側面にも飾文を彫刻せること、並びに佛陀伽耶の石欄に
酷似せり。ANAKAVATI大塔の外欄亦同じ。第三
十圖はBHARHUT塔の門柱及び石欄。
サンチイの塔はその基礎直徑百二十一呎、高さ十四呎、遶道
の廣さ五呎六吋、覆鉢の高さ三十九呎、その頂の平壇直徑三
十四呎、舍利篋を容るゝ方龕は、高さ十一呎六吋の方格十六



第三十圖 バルフウト塔の門柱及び石欄

より成れり。基礎の脚を去るここ九呎六吋にして石欄あり。
その高さ十一呎にして、全欄の格數百十六、格は皆一々別人
の布施に成りしものと見え、各々施主の名を刻せり。門の大
さ、現存の中最も完全なる北門にて全高三十三呎六吋、左右
兩柱の距離七呎、下貫中央の下面より地に至る高さ十八呎
六吋あり。

玄奘の見たる阿育王所建の塔にして、その構造に關するこ
とを記せるものは、那揭羅曷國城東二里の塔、高さ三百餘尺、
編石特起刻雕奇製と言ひ、健駄羅國城北四五里の伽藍の側
に在る塔、高さ數百尺、雕木、文石頗る人工に異なりと言ひ、

僧訶補羅國城東南四五十里の石塔、高さ二百餘尺、摩訶薩埵MAHISATVA佛の本生。王子捨身處北の石塔、高さ二百餘尺、雕刻奇製と言

ひ、薩他泥溼伐羅國城西北四五里の塔、高さ二百餘尺、甌皆黃赤色にして甚だ光淨なりと言ひ、婆羅痾斯國鹿野伽藍西南の石塔、基傾陷すと雖も尙百尺に餘ると言ひ、摩揭陀國波吒釐子城地獄の蹟の南方に在る塔、基址陷落して唯覆鉢の勢を餘し、寶を厠飾と爲し、石もて欄檻を作ると言へるに過ぎず。然れども阿育王の塔の甌と石をもて築き、その富贍なる彫飾には間々木材を交へ用ゐたるものもありて、高さ往々三百餘尺に及びしこと等を知るに足れり。

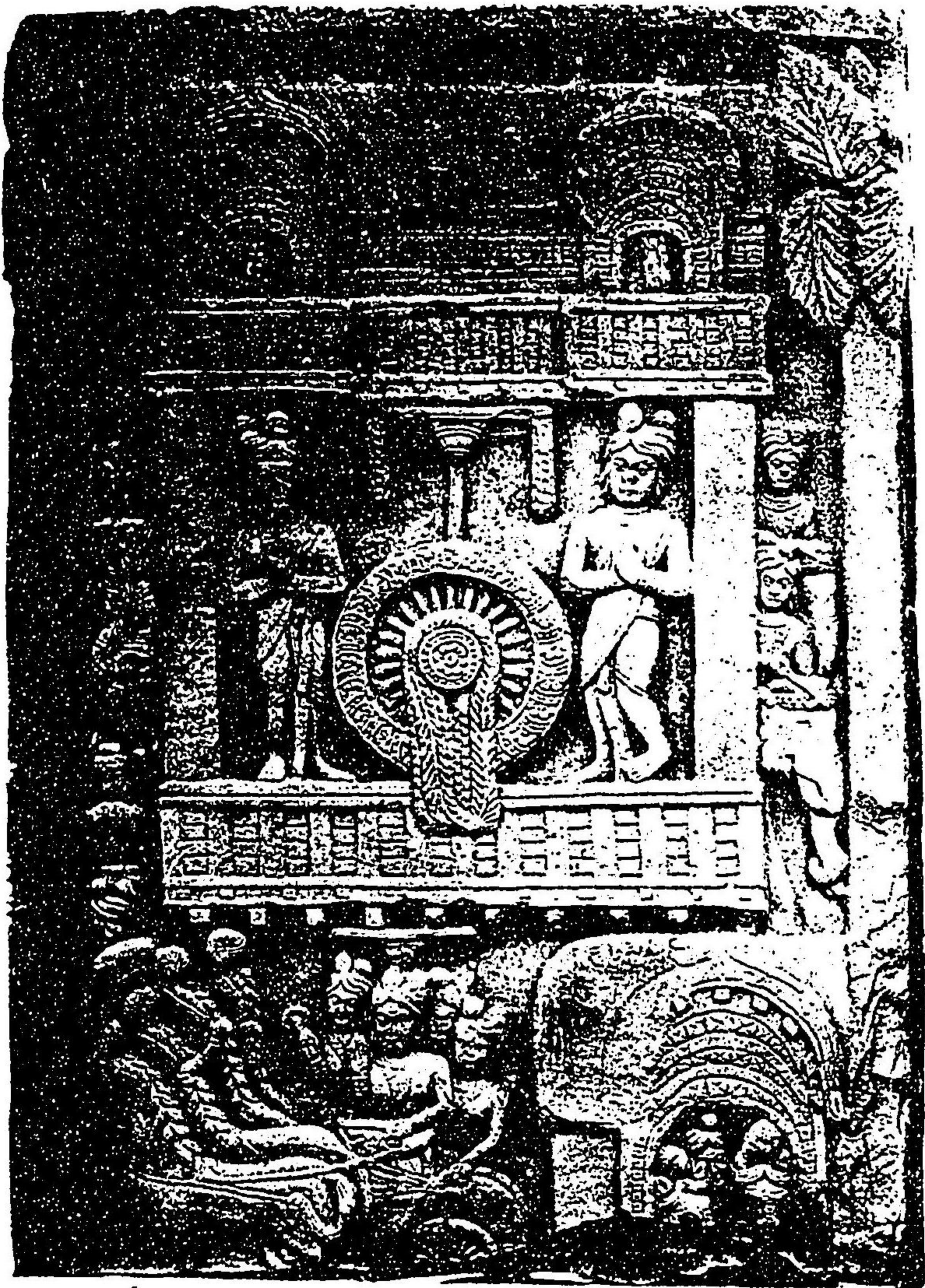
法顯は波吒釐子城を見て記して曰へらく。石を累ねて牆闕を起し、彫文刻鏤、世の造るところに非ず、故に今現に在り。玄奘渡天の頃は、この城唯故基を餘すのみなりき。今恐らく

はバトナニバンキポオル BANKIPORE この間の鐵道の南方クム

ラアハアル KUMRAHAR 村の地下に埋もれたるならむ。法顯の言

ふところを、先のメガステネエスの記せるものに較べ見て、牆壁、望樓の曾ては木造なりしことを憶ひ、今に至るまで發見せられたる古代建築の皆石材にして、阿育王時代より古きものなきこと、及び上記二塔門欄の浮彫圖中に見えたる建築物の欄檻に、緣板縁板の側面と根太根太の小口小口この見えたる構

(BHAGAVATO DHARMA CAKAM. 轉法輪の法輪)



(RĀJA PASENAH KOSALO. 轉法輪王鉢提摩那特多)

第三十一圖 ハルフウト塔欄南門隅柱内面の浮彫法輪禮拜及び鉢提摩那特多王

阿育王事蹟 藝術

造、第三十一圖は BHARHUT 欄柱の浮彫。

乃至門欄當體の構造第十九圖參看。の明に木造を

摸したるものなること等を合せ考ふれば、石材を用ゐる建

築は阿育王時代に始まりしかと思はる。搏風はふりの形は好みて

尖圓の桃形第二十三、第二十四、第二十七、第三十一、第三十四圖參看。を用ゐたり。柱頭には多く鈴

形を着け、鈴上に往々動物又矮人を用ゐる。を彫刻せしことは、先の石

柱にてもこれを知るべし。

ハルフウト塔欄の彫刻には塔、法輪菩提樹

諸佛に依りて樹異なり。の禮拜、

第三十二圖は塔禮拜、第三十三圖は毘婆尸 VIPASIN 佛菩提樹 PRAJĀ 禮拜。法輪禮拜は第三十一圖を見よ。

佛傳、

第三十四圖は須達多長者佛の爲に金錢を地に

布きて逝多林を買ふところ。

佛の本生

第三十五圖は鹿本生。NIRGA, NIGA JĀYAKA. 善薩本緣經鹿品第七、佛說九色鹿經、六度集經卷六に出づ。

及び天、

龍、藥叉

第三十六圖は藥叉王俱毗羅 KUYERA

等あり。然れども佛像あらず。サンチイ塔



第三十二圖　ハルフウト塔欄南門隅柱側面の浮彫塔禮拜

(BHAGAVATO VIPASINO EODHI.

善御梵尼婆尸の菩提樹)



第三十三圖

バルフット塔欄格の浮彫菩提樹禮拜



第三十四圖 ハルフウト塔標格の浮彫逝多林故事

(JETAVANA ANĀDHAREḌIKO DEṬI KOṬI SANṬHATENA KEṬĀ.

給狐獨長者一億金もて逝多林を買ふ)

(PASUSA THABHO DĀNAM. なるまの施柱)

(MIGA JĀTAKAM. 鹿本生)



第三十五圖

バルフウト塔欄格の浮彫鹿本生

第三十六圖

バルフウト塔欄柱の浮彫樂又王俱毗羅



(KUTIRO YAKHO. 俱毗羅樂又)

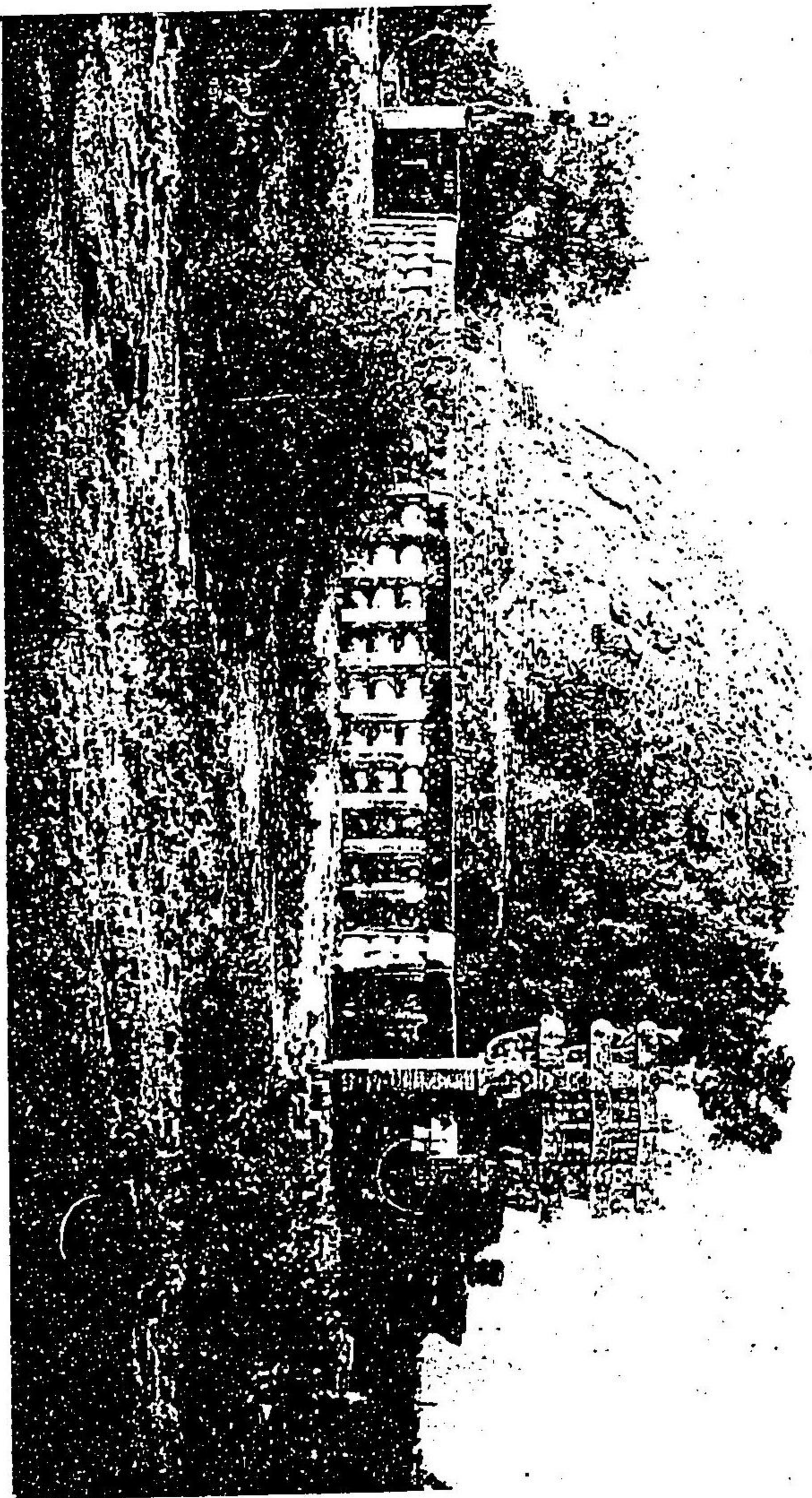
(PHADANTA HEDHA KAKHITASA SATUPADANASA DANNAN' THIRO.

サツバダナの俗同胞ブダ、ラクシタの施柱)

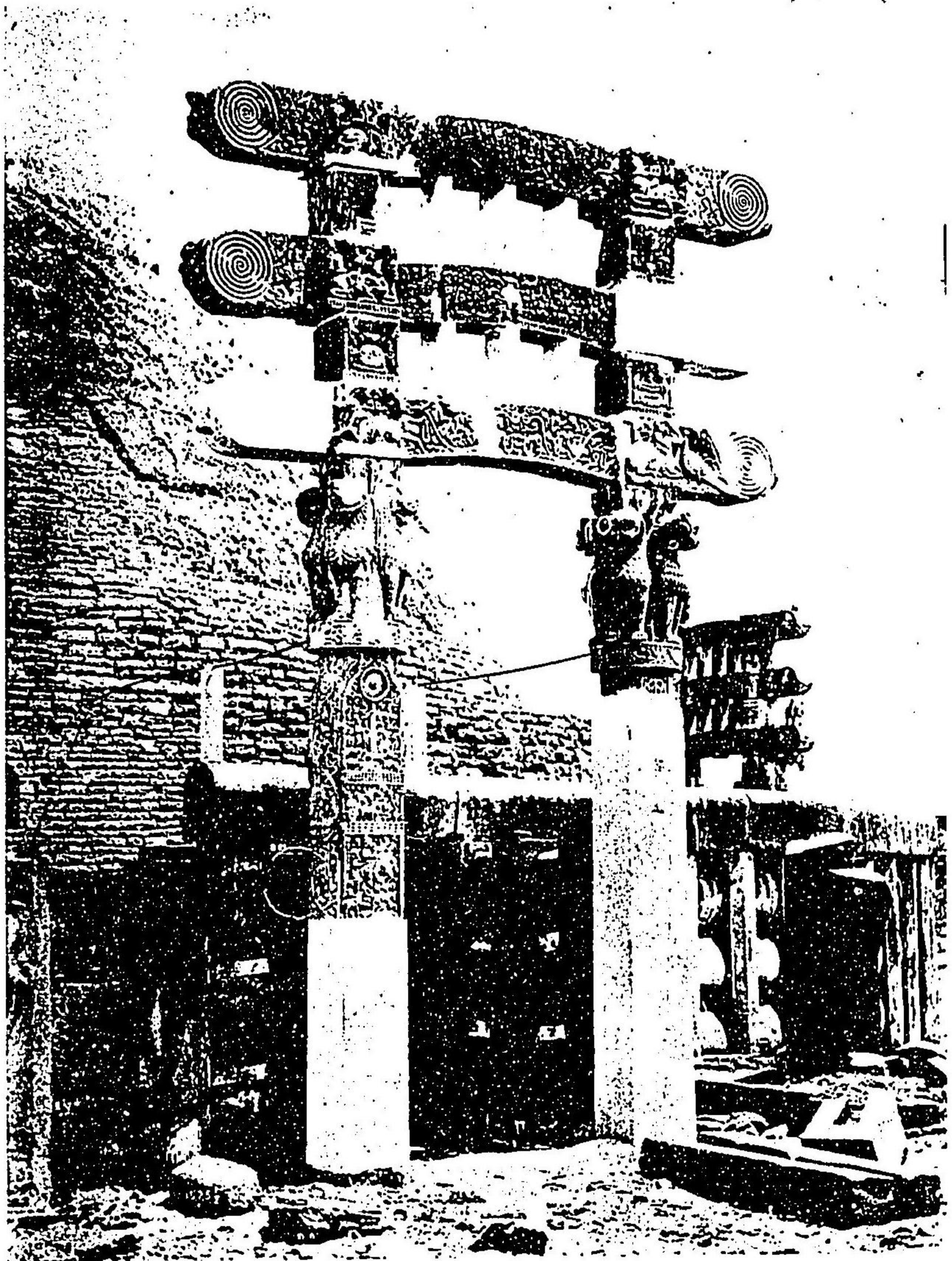
亦然り。これに由りて觀れば、當時の信仰は未だ佛像を造りて禮拜するに至らず。主としてその舍利を納めたる塔、佛の遺物、成道定坐の蔭を爲しと菩提樹、法の標幟たる法輪等を禮拜せしものなるを明なり。史傳圖には、鉢邏犀那、持多王、駟馬の車に乗りて奔攘舍羅PUÑYASALA、福舎、施場に行くところ第三十圖等あり。諸々の佛本生の話説は、當時既に盛に行れて、以て佛傳と共に藝術の好題目と爲りしを見る。天龍、藥叉の屬は、吠陀の神話を襲用せるのみ。龍は皆頭上に數蛇首を加へたる人像に作れり。門の上貫うへくわに人面及び鳥首の獅子を彫出せるものあるは、所々の飾文に用ゐたる蓮花の頗る埃及藝術に似たるも

のこ共に、或は西方の「スフィンクス」及び「グリフォス」SPHINX. GRYPHOS.より來れるかも知れられず。BHARHUT 塔の建築及び彫飾の事は、具をたは CUNNINGHAM 著 STÜPA OF BHARHUT に見ゆ。其の 諸圖は皆同 書に取れり。

サンチイ大塔第三十 七圖の四門は大體に於いて皆相同じく、満面の彫飾頗る繁縟なり。今そのシャタカルニ王の刻銘ありて、建立最も古しとおぼしき南門第三十 八圖を略叙せむ。千八百十九年文政 二年英國の陸軍大尉フネルFRUIT.の始めて此處に至りし時は、この門全く崩れて地に倒れ居たりき。後これを修建しつ。門の表面、笠木には舍利塔と菩提樹との禮拜を一つおきに圖して、前者は三、後者は四あり。その兩翼端には各々貴人の



第三十七圖 サンチイ大塔の全景



第三十八圖 三ツチイ大塔の南門

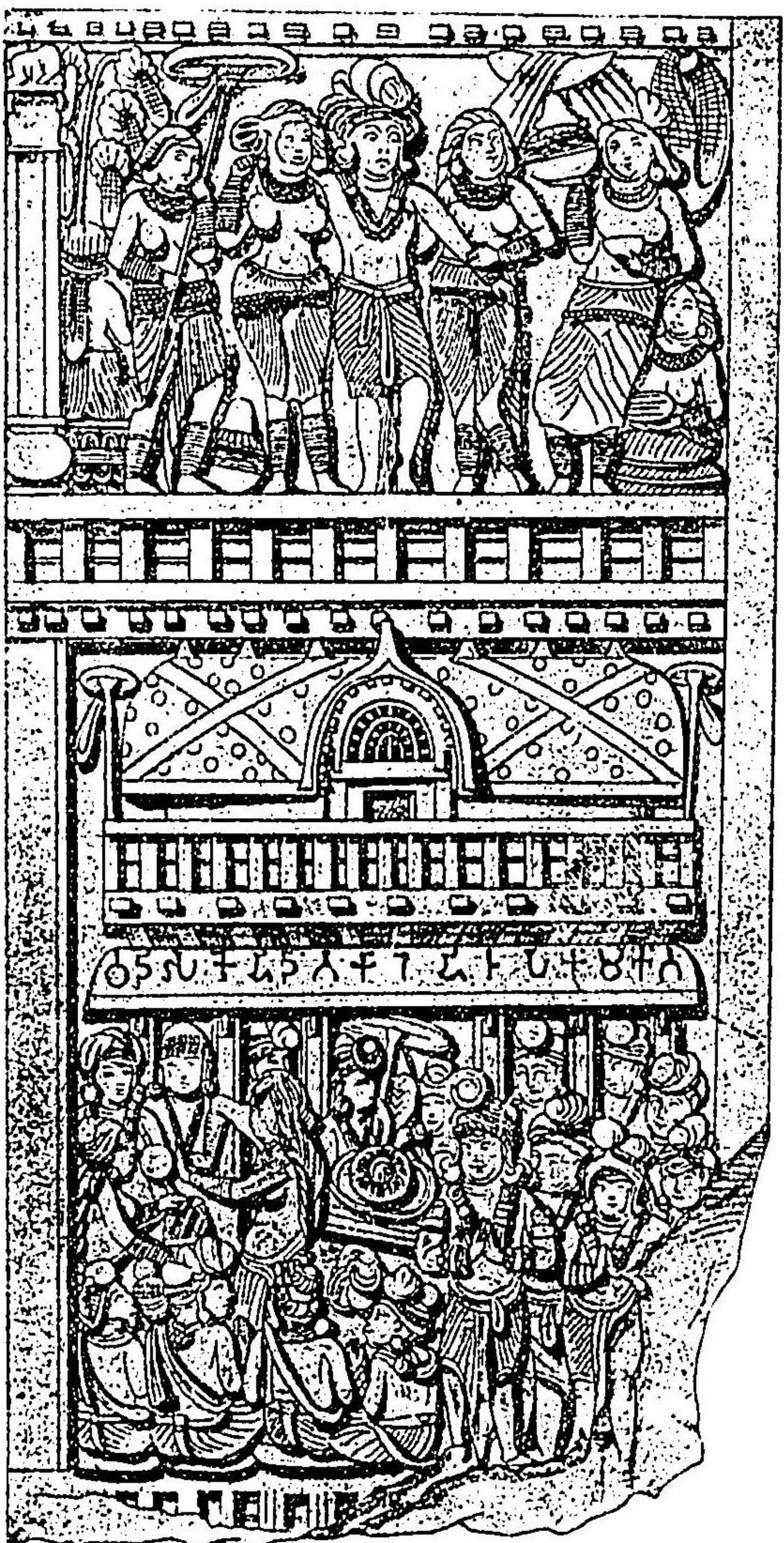
牛馬に乗りて供養の物を捧げたる圖あり。上貫には一の舍利塔禮拜圖あり。塔上には飛天ありて供養の物を捧げ、塔の左方には王者の馬車に乗りて塔に詣づるあり。右方には五首乃至一首の龍群ありて禮拜せり。右翼端には又象馬に乗れる人を圖す。左翼端は失せたり。下貫したみには舍利を奪ふ戦争しやうりと、これを獲て還る行列とあり。頗る當時の俗を考ふるに足る。蓋しこの大塔に納めたる舎利の縁起ならむ。門の裏面は笠木の中央に、吉祥天SHI. 室利。毘紐天の妃の乳海LAKSHI. 洛乞史著。 KSHIRABDH.より涌出して天象の灌ぐところの水に浴する圖あり。その左右には蓮池を圖せり。上貫には象王のその群を率ゐて菩提樹を禮

拜供養する圖、下貫の裏面及び左柱の外側には、天界の諸寶の自然に樹に懸り、又は天部の口より出づる文様圖、右翼端には孔雀、右柱の外側には巧妙なる蓮花文あり。二柱の爾餘の諸面には、菩提樹、法輪幢、三寶の標幟たる三鈷及び佛の遺物等の禮拜圖を彫出せり。柱上方板の側縁には有翼の獅子あり。柱頭は前半身相背きて外に向へる四獅より成り、以下貫を受く。短柱にも亦吉祥天、蓮花瓶及び菩提樹、舍利塔の禮拜圖を彫せり。間束は表に人物、裏に蓮花文あるもの僅に一を存す。笠木及び貫の拳鼻こぶなには渦うずを彫り、その尖端に獅子の前身を着けたり。これ等の中、唯有翼の獅子四門のもの殊に巧妙なり。の亞

西里亞に類例ある外、作風は總べて全く印度獨造の藝術たることを示し、その發達頗る歎賞すべきものあり。これを前のバルフットの彫刻に比すれば、人物の形相較く妥帖に、布局益々巧密にして、技巧の自在を加へたるを見る。南門の彫飾中、貴女及び佛遺物明不禮拜圖第三十九圖の如き、以てその例を爲すべし。北西東三門の彫刻には、佛傳圖、佛本生圖等多し。殊に著きは四門を通じて菩提樹禮拜七十六、舍利塔禮拜三十七、法輪禮拜及び吉祥天各々十圖あることにして、皆以て當時の信仰の状態を考ふるに足るのみならず、バルフットの石欄にも、カンダギリの「アナンタ」毗訶羅にも、亦一の吉祥天圖

あるに徴すれば、この頃早く既に婆羅門教神話の佛教の所
信に混じて、後の大乘教の法身の佛、菩薩乃至密教の諸尊を
生ずる萌芽ともなりしものか。大塔の三門及びサンチイ小
塔の一石門は、その構造及び彫飾略前者に同じきが故に、今
別に詳説せず。SANCHI塔の事具そはFERGUSSON著TREE AND SERPENT WORSHIP
に見ゆ。上の諸圖は同書及びTHE ANCIENT MONUMENTS, TEMPLES
AND SCULPTURES OF
INDIAより取れり。

阿育王は、啻に佛教史の研究に於いて、先づ年代上の立脚地
を定むる基となるのみならず、印度文化史上に於いても亦
同様の根底たり。東洋の藝術、殊に佛教美術の歴史を尋ねむ
とする者は、必これより始めざるべからず。唯恐らくは阿育



第三十九圖

サンチイ大塔南門石柱内面の浮彫貴人及び佛遺物禮拜

王前に溯ること極めて難からむか。本章工學博士
伊東忠太君閱。

拾陸 後 紀

阿育王以後の孔雀王統は、阿育王經卷五に依るに、三波地の子
毗黎訶鉢底星、太白、毗黎訶鉢底の子毗黎沙斯那牛、毗黎沙斯那
の子弗沙跋摩星、尾、弗沙跋摩の子弗沙蜜多羅星、差友、BRĪHASPATI,
BRĪSASENA, PUSYA-
VARMA, PUSYAMITRA, 阿育王傳は取
摩留、音阿提弗舍摩、弗舍蜜味とす。あり。弗沙蜜多羅に至り、佛法を壞り、
僧徒を殺し、終に藥叉の爲に破られて修尼喜多MUNIHATA山に
死し、孔雀大姓ことに滅ぶと云へり。然るに「プラアナ」にはこ
れに異なる種々の傳説ありて一定し難けれど、その二三を

錯綜して列擧すれば阿育王の後アシヨオカワルダナASOKAVAR-

VISNU PURANA スヤシヤス SUYASAS. 登位 230? サ ン
見ゆ。 240 又は 222 B.C. ダシヤラタ 登位 215 B.C.

ガタ SAṅGATA. 登位 220? 又 208 B.C. インドラパアリタ INDRAPĀLITA. 登位 212? B.C. シヤリシユウカ

SALISŪKA. 登位 201 B.C. ソオマシヤルマン SOMASĀRMAN. 登位 210 又は 194 B.C. シヤシヤダルマン

SĀSADHARMAN. 登位 203 B.C. ブリハドラタ BRIHADRĀTHA. 登位 195 又は 187 B.C. あり。旃那羅笈多より

孔雀姓王の世を治するころ百三十七年。或は曰はく、百三十年。最後のプリ

ハドラタ王は、基督前百八十三年又は百七十八年。諸の PURĀNA 相異なり。

大臣弗沙蜜多羅に篡弒せられ、爾後百十年又は百十二年間、

弗沙蜜多羅の裔摩揭陀を治せり。これを「シユンガ」SUNGA.王統と

す。SUNGA 姓 見 PUSYAMITRA, 183; AGNIMITRA, 152; SUJYESHTHA, 144; VASUMITRA, 137; ĀRDRĀKA, 129; PULINDUKA, 127; GHOṢAVASTU, 124; VAJIRAMITRA, 121; BHĪGAVĀLA, 112; DEVĀBHŪTĪ, 86 B.C.

「シユンガ」王統に代はりて「カヌワ」KANVA.王統あり。摩揭陀を治

するころ五十四年なりきと云ふ。KANVA 姓 見 VASUDEVA, 76; BHŪMIMITRA, 67; NĀRĀYAṆA, 53; SUSĀRMAN, 41-31 B.C.

弗沙蜜多羅は孔雀姓王に非ずして、孔雀姓を滅じと王なる

べく、その佛教を奉ぜざりしことは亦信すべきが如し。

ダシヤラタ王が「アシイキカ」の徒に布施したる三石窟は、今

王舎城に近きナアガアルシユニ丘に存じ、各々刻銘あるを

以て、阿育王傳、阿育王經に見えざるこの王の實在せしとは

明なり。さればこれを孔雀姓王の一人と傳へたる「プラアナ」

の傳説は、略信據するに足れるを認む。三石窟の刻銘は窟名

の相異を除く外、殆ど全く同文なり。曰はく、PRINSEP 始めこれを譯す。

「ワヒヤカア」他の二篇は牧羊女 GOPIKA 窟は、尊き「アシイ牛カ」徒の窟は VADATHIKA となり。爲に、天愛十車王灌頂の後直ちに施すところなり。日月と共に永くその住處たるべし。

阿育王時代に維持せられしセレウコス王朝の平和は、久しきに耐へざりき。大夏、安息 BAKTRIA, PARTHIA. に居りし希臘諸侯セレウコス王朝に叛きて、各々自立せしが中に、進みて印度の内地に入りし者あり。基督前約百五十年頃、大夏王畢隣陀 MILINDA, MENANDRA, MENANDROS. は都を奢羯羅に置き、又サアケエタ SIKEIA, AYODHYA MENANDER. 今 OUDH. を圍みしことありき。畢隣陀王の佛教を奉ぜしことは、那先 ナラセネナ NAGASENA. 比丘經 即ち PĪLI の MILINDAPANHA. に見え、又その貨幣に法王の語及び

法輪あるにて知られたり。既にして希臘の諸侯等互に相闘ぎて漸くみづから勢を失ひ、月氏 YUEH-CHI. みづから KUSANA (後漢書の貴霜侯) と稱す。 の族隙に乗じて興りぬ。その人種上の關係は詳かならず。後漢書に月氏の五翕侯あり。丘就卻、閻膏珍 希臘文獻の KOZDIO, KADPHISES 及び HIMIA, KADPHISES 又は GUDAPHARA, GONDPHARES 五侯を統一して、カアブルを併せ領せしが、フシユカ カ。 王に至り、國人に逐はれて去り、迦濕彌羅に入りてこれを治し、その領地は閻牟那河畔の秣菟羅に達せりき。弟シユシユカ JUSKA. 嗣いで立ち、その弟迦膩色迦又嗣いで立ちぬ。 VINCENT SMITHS は迦膩色迦を先とし、HUSKA, JUSKA を後とし、雖も今 RAJATARANGINI に後多。 迦濕彌羅の書「ラアジャタランギニイ」 KALHANA の RAJATARANGINI. には、この三王の三都

HUSKAPURA 即今の USHKUR, JUSKAPURA 即今の ZUKUR, KANISKAPURA 即今の KANISPUR. を立て、又賢王ジュシユカがジュシユカプラの精舎及びジャヤスワミアミプラ JAYASYAMIPURA.

の都をも立てしこと、三王の世佛教大いに弘まり、那伽刺樹那 NIKAIRJUNA. 龍樹、龍猛、龍勝。この年代は信に難し。 菩薩出生せりしことを記せり。正にこ

れ羅馬國のストラボ STRABO. が印度に遊び、後漢の明帝が使を遣して佛教を求めし時代なり。

迦膩色迦王は基督後百年頃の人なり。その領地はカアブルより葱嶺、ボロル、タグ BOROR. TAGH. に至り、ヤルカンド、ユカンド YARKAND, KHOKAND.

を踰え、迦濕彌羅、ラダク、LADIK. 雪山と葱嶺との間。 ヒマワラ、恒河の上流、

閻牟那よりアグラ AGRA. に至り、パンジャアブ、信度より南ラア

シプウタナ、グシエラアトを占めて、健駄羅に都せりき。諸

王の王 PAONANOPAO. 波斯語。 の稱あり。西域の諸蕃皆質を送る。その貨

幣に佛像を印し、希臘字もて「ボッドオ」 BODDO. と題せり。即ち

佛陀の謂なり。佛典の第四 北傳にては第三。 結集はこの王の世に行は

れぬ。波栗濕縛 PARSAVA. PARSVIKA. 勝尊者。 の發議に依り、當時迦濕彌羅の都

府たりし閻爛達羅 JALANDHARA. に五百羅漢を會し、伐蘇蜜多羅 VASUMITRA. 婆須密、和須密多、世友尊者。

上座たりき。當時梵文にて述作せられしもの

阿毗達磨大毘婆娑論 ABHIDHARMA MAHAVIBHASSI SASTRA. 等あり。即ち説一切有

部の本典なり。

大乘 MAHAYANA. 摩訶衍。 佛教は第四結集より後に起りしものと如し。他

の諸部はこれより小乗として貶せられぬ。爾來大乘の論師相次いで崛起するあり。その最も著名なる龍象は、阿濕縛婆

沙ASVAGHOSA. 馬鳴菩薩。大乘起信論等を造る。迦膩色迦王頃。那伽闕刺樹那中觀 MADHYANIKA を唱ふ。大智度論、中論、十二門論等を造る。基督後三世紀。

阿僧伽ASANGA. 無著。阿毘達磨論師。論、攝大乘論等を造る。伐蘇槃度天親。無著の弟。俱舍論、唯識論等を造る。 YASUBANDHU. 婆伽槃豆、婆修盤頭、世親

この二人基督後五世紀。420-500 A.D. 達摩波羅DHARMAPALA. 護法。成唯識論等を造る。基督後六世紀。 等なり。

迦膩色迦王の後、迦濕彌羅は訖利多KRITA.種の王自立して佛

教を破壊しつれど、健駄羅は法顯の至れる頃、塔廟の壯麗威

嚴無比なりきと云ふ。王の健駄羅造塔の事は、載せて佛國記、

西域記に在り。輓近ユスフツアイの諸地の廢址より出で

て、世界に傳れる健駄羅藝術の遺品は、蓋し皆月氏朝の物にし

て、迦膩色迦王前後より摩醯羅矩邏NAHERAKUTA. 大族。烏仗那及び迦濕彌羅の王。王の滅

法基督後約四百七十二年、塔及び伽藍千六百所を破壊す。に至るまでの製作なるべし。歐洲の神

話及び藝術の影響頗る著きを以て特色とす。これを純印度

の藝術に較ぶるに、技巧大いに進めり。佛像を造りてこれを

禮拜することは、當時既に盛に行はれしを認む。

迦濕彌羅はその後ゴナルダGONARDA.王の子孫久しく國を治

めしが、基督後三百五十年頃プラタアバアデチャPRATAPADITYA.

王これに代り、四百三十四年頃に至りて、ゴナルダの後裔

メエガワアハナMEGHAVAHANA.再び王位を回復せり。

「ガヌワ」王統に代りて、中印度には「アンドラプリーチャ」王統初

め摩揭陀に起り、幾もなくして南方に偏安す。基督前三十一年
SIPRAKAの即位に
始まり、基督後四百二十九年又は
三十六年 PULOMAFの祖に終る。その南遷後の摩揭陀王は繼承年代

共に明ならずして、僅にシヤクラアヂチャ、ブツダグプタ、タタア

ガタグプタ、バラアヂチャ、ワシラ SAKRADITYA, BUDDHAGUPTA, FATHA-
GATAGUPTA, BALADITYA, VAJRA 等

の名を傳へ、又婆羅阿迭多 SALADITYA が曾て摩醯羅矩邏を懲ら

しと西域記に見ゆるのみ、ANDRAPURICHA王統に後る

ると二三十年にして、GUPTA王統起り、

國を治すると約三世紀半。基督前約五十七年 NAHAPANAの即位に始まり、基督
後約二百九十二年 SVAMIRUDRA SĪHに終る。

基督後三百十九年 BALABHIに至り、阿踰陀 AYODHYA 國に毗訖羅摩

阿迭多 VIKRAMADITYA 王起りて「サアフ」王統に代り、月氏を印度の

境より逐ひて「グプタ」 GUPTA 王統の基を立つ。子孫相傳へて、

六世紀頃に及べり。有名なる戯曲作者カアリダアサ KALIDASA、

DITYA 王の實の一人。戯曲 SAKUNTALA, VIKRAMORVASI,

MEHAVIKĀGINĪTRĀ, MEGHADŪTĀ, RAGHUVANŚA 等を作る。の出で、この頃な

り。この餘南方には五世紀より八世紀に亘りて、カリヤアナ KALYANA、

基督曆五百十八年 梁天監十七年。魏の沙門宋雲健駄羅に至り、六百二

十九年乃至六百四十五年 唐貞觀三十一年。玄奘徧く印度を跋涉し、同

年唐使李義表、王玄策 貞觀十七年發し、同二十三年歸る。
玄策は顯慶五年再行、龍朔元年歸る。摩揭陀に至り

て石碑を建つ。この頃羯若鞠闍の王室盛なり。曷利沙伐彈那

HARISAVARDHANA 王に次いで戸羅阿迭多 SILADITYA 王あり。東征西伐

六年にして殆ど五天に覇たり。六百三十四年この王玄奘の爲に衆僧及び十八國王を會して大會を催しつ。その盛況は具さに西域記及び大慈恩寺三藏法師傳に録せられたり。この頃東印度羯羅拏蘇伐刺那KAIRYASUVARNA 國設賞迦SASANKA 王佛法を壞り、摩揭陀の補刺拏伐摩PURANVARMMA 王善提樹を護りしこと等、亦西域記等に見えたり。西藏の佛教を傳へしも、唐の貞觀中太宗の女文成公主の西藏王に歸ぎし後にて、基督後六百三十二年なれば、亦復この頃の事なり。喇嘛LAMA 教はこれより興る。かくて支那僧の渡天する者、玄奘の後急に多きを加へ、大唐求法高僧傳に見えたる者約六十人。或は

吐蕃即ち西蕃 を經、或は多く海路を取りぬ。當時達磨波羅以後、摩

揭陀の菩訶菩提、那爛陀NALANDA の諸寺法燈頗る盛なりき。六

百七十一年乃至六百九十五年店成亨二一證聖元年 義淨波斯の商舶に乗

り、南海スマトラSUMATRA の室利佛逝今のPALEMBANG を經て渡天す。そ

の頃呪明藏呪禁藏 は既に成文十萬頌の梵本と爲れりき。

これ即ち支那、日本の密教經軌の本にして、婆羅門教諸神崇拜の信仰が、その形式の作法と共に、佛教に混淆したるもの

なり。婆羅門教はこれより先早く既に僧徒、衛世師SANIKYA 僧

勝論 等諸派の哲學ありて、基督後五世紀の頃その勢頗る

盛なることを致し、官文書に至るまで俗文PRAKRITI を廢して

梵文 SANSKRIT. を用ゐることゝ爲り、六七世紀に至りては、佛教の大乗、婆羅門教の「エエダンタ」全盛の時代と爲り、文藝も亦先のカアリダアサに次いで、シユウドラカ王、SUDRAKA. シユリイハルシヤ王 SRIHARSA. 等戯曲の名什を出だし、八世紀に BHAVABHUTI あり。「プリアナ」の神話も亦漸く大成せり。當時の宗教はなべて修観誦呪の一面に傾き、婆羅門教の「プリアナ」と佛教密部の呪明藏とは、この傾向よりして殆ど同時に成れるものと如し。第八世紀に、亞拉伯の回教徒信度を侵しつ。亞拉伯には當時「カリイフ」ワリツド第一世 KALIF WAHIDI. 位に在り。カアブルの地は、これより先早く國境と爲りたりき。戦争の起因は、信度の民

亞拉伯の船一隻を奪ひきこ云ふに在り。亞拉伯の將カシム KASIM. 軍を率ゐて信度河を渡る。信度の王ダヒル DAHIR. 戦死し、未亡人城を守りて自焚す。時に基督曆七百十二年なり。これより三十五年の後、回教徒は國人の蜂起するに會ひて引き去りぬ。

第十世紀の末、基督曆九百十九年。 波斯の「スルタン」マアムツド SULTAN MAHMUD. 位に即き、基督曆千一年兵をカアブルに進め、ラホオル LAHORE. 王シエイバル RAJA JEIPAL. を破る。シエイバルみづから焚死す。これより千二十四年に至るまで、回教徒の來襲すること十二回にして、就中千十七年には、カナウジ及ムットラ KANAUJ, MUTTRA.

を破壊し、千二十四年には、グシエラアトのツムナアトなる
摩醯首羅MAHESVARA. SIVA, 自在天。の祠を破壊しつ。これより後、マアムツド
は波斯に事あるが爲に、侵伐を反復すること能はざりき。

第十二世紀に、シユバト、エツヂン SHUBHAT ED DIN. 印度に入り、その知
事たりしクトブ、エツヂン KHUTB ED DIN. 自立して、頻陀山以北の地を
領す。

第十三世紀に、アルツムシユ ALTUMSCH. TSINGGIS. 纂立す。時に鐵木眞 FANU. DZIN.
信度を経て來襲す。次いでピラム HIRAN. の時、蒙古又來
り侵しつ。外寇のベンガルより印度に入りしは、この時のみ
なりき。シエラル、エツヂン DSHELLAL ED DIN. 進みてデカン DEKHAN. を治

す。佛教迹を絶ちて、婆羅門教益々盛なり。

第十四世紀に、シヤア、マホメツド SCHAH MAHOMED. デカンを定む。されど
幾ならずして、その地又分裂す。千三百九十八年帖木兒 TIMUR.

來襲す。その軍はカアブルより入りて、デリイに捷ちぬ。帖木
兒みづから印度帝と稱し、吏を留めてその疆を治せしめ、信
度河を渡りて去りぬ。

第十六世紀 千五百二十六年。 に、帖木兒の族にしてカアブルの知事た
るババル BARBAR. MOGUL. NOGDI. 帝國を興しつ。この世紀の末「シツ

クス」SIKHS 徒弟。の宗門起りて、回教と婆羅門教と高下なしと唱ふ。
第十八世紀 千七百五十七年。 に、英國の移住民兵をベンガルに起して、

恒河の下流を占領す。時にモグル國はアウラングゼツプ
 AURANGSEB. 王新にみまかりて、諸侯離れ背き、「シツクス」の徒は
 ラホオル國をパンジャアブに立てつ。これより後、英國は幾
 多の権力の消長を閲して、千八百七十七年女皇 VIKTORIA
 VICTORIA に印度帝の稱號を兼ねしむるに至りぬ。宗教上には、
 近頃時々宗教統一 UNIVERSALISMUS の運動を見ることあるのみ。

阿育王事蹟終

阿育王事蹟附録

第壹 阿育王年表

- 基督前三二一年 孔雀姓の始祖旃那羅笈多王立つ。
- 三一二 西里亞王セレウコス、ニカトル立つ。
- 三〇八 キユレエ子エのマガス將たり。後王と爲る。
- 三〇五 西里亞の使メガステチエス印度に入る。
- 二九八 旃那羅笈多王殂す。
- 二九七 頻頭婆羅王立つ。
- 二九六 西里亞の使ダイマコス印度に入る。
- 二八五 埃及王プトレマイオス、フィラデルフォス立つ。
- 二八一 西里亞王セレウコス、ニカトル殂す。
- 二八〇 西里亞王安テオコス、ソテル立つ。
- 二七七 マケドニヤ王安テゴノス、ゴナクス立つ。

。二七四 頻頭婆羅王殂す。

二七二 エビイロス王アレクサンドロス立つ。

。二七〇 阿育王灌頂。

二六九 灌頂第一年。

二六二 灌頂第八年。羯鉢伽を征す。

二六一 西里亞王アンチオコス、テオス立つ。

二五九 灌頂第十一年。僧伽に近づいて菩提を求む。

二五八 灌頂第十二年。摩崖誥文第四章まで。尼俱盧陀及びカラチカ

丘の石窟を、アジイキカ徒に施す。五年大會を制定す。

。二五七 キユレエチエ王マガス、エビイロス王アレクサンドロス殂す。

灌頂第十三年。摩崖誥文第五章より第十四章まで、竝びに

トサリ及びサマアバアの吏に宣する誥文。

達磨大官を置き、法務大官衙を設く。

二五六 灌頂第十四年。迦諾迦牟尼佛塔を増築す。

二五三 灌頂第十七年。小誥文。パブラの刻文もこの年か。

南傳の結集。

二五二 灌頂第十八年。南傳の諸國布教。

二五一 灌頂第十九年。バラアバルの失名窟を施す。

錫蘭王帝須立つ。摩訶陀、僧伽蜜多錫蘭に入る。

二五〇 灌頂二十年。佛蹟を巡禮し、臘伐尼及び迦諾迦牟尼塔に

石柱を建つ。

二四七 埃及王ゾトレマイオス、フィラデルフォス殂す。

二四六 西里亞王アンチオコス、テオス殂す。

二四四 灌頂第二十六年。石柱誥文第四章まで。

目健連子帝須寂す。

二四三 灌頂第二十七年。石柱誥文第五章より第七章まで。

マケドニヤ王アンチゴノス、ゴナタス殂す。或は日はく二三

九年。

- 二四一 灌頂第二十九年。王妃誥文はこの年か。アサンデミッタ妃殂す。
- 二三八 灌頂第三十二年。徴沙落起多王妃と爲る。
- 二三三 灌頂第三十七年。阿育王殂す。
- 二一二 錫蘭王帝須殂す。
- 二一一 錫蘭王鬱帝與立つ。
- 二〇四 摩訶陀寂す。
- 二〇三 僧伽蜜多寂す。
- 一八三 孔雀姓最後の王ブリハドラタ殂す。或は日はく一七八年。

第貳 引用書目

EDMUND HARDY, KOENIG ASOKA. MAINZ 1902.
” BUDDHA. LEIPZIG 1903.
HERMANN OLDENBURG, DIE RELIGION DES VEDA. BERLIN 1894.
” BUDDHA. BERLIN 1897.
” DIE LITERATUR DES ALTEN INDIEN. STUTTGART & BERLIN 1903.
” DĪPAVAṆĪSA (ENGLISH TRANSLATION). LONDON 1879.
CHRISTIAN LASSEN, INDISCHE ALTERTHUMSKUNDE. LEIPZIG & LONDON 1858-74.
VINCENT A. SMITH, ASOKA. OXFORD 1901.
TH. W. RHYS DAVIDS, BUDDHISM. LONDON 1877.
” BUDDHIST INDIA. NEW YORK & LONDON 1903.
L. C. WIJESINĪHA, MAHĀVAṆĪSA (ENGLISH TRANSLATION). COLOMBO 1889.
ALEXANDER GUNNINGHAM, CORPUS INSCRIPTIONUM INDICARUM. CALCUTTA 1877.

ALEXANDER CUNNINGHAM, THE ANCIENT GEOGRAPHY OF INDIA. LONDON 1871.

” BOOK OF INDIAN ERAS. CALCUTTA 1883.

” THE STŪPA OF BHARHUT. LONDON 1879.

” COINS OF ANCIENT INDIA. LONDON 1891.

JAMES FERGUSSON, HISTORY OF INDIAN AND EASTERN ARCHITECTURE. LONDON 1899.

” TREE AND SERPENT WORSHIP. LONDON 1873.

” CAVE TEMPLES OF INDIA. LONDON 1880.

” ILLUSTRATIONS OF THE ROCKCUT TEMPLES OF INDIA. LONDON 1845.

M. A. STEIN, KALHAṆA'S RAJATARANĪNĪ (ENGLISH TRANSLATION). WESTMINSTER 1900.

GRUENWEDEL, BUDDHIST ART IN INDIA. LONDON 1901.

W. GIGGS, THE ANCIENT MONUMENTS, TEMPLES AND SCULPTURES OF INDIA. LONDON 1897.

” PRESERVATION OF NATIONAL MONUMENTS IN INDIA. LONDON 1896.

H. H. COLE, PRESERVATION OF NATIONAL MONUMENTS, PANJAB. SIMLA 1883.

EDWARD BALFOUR, THE CYCLOPAEDIA OF INDIA. LONDON 1885.

南條文雄著 CATALOGUE OF TRIPITAKA. OXFORD.

安法欽譯 阿育王傳

僧伽婆羅譯 阿育王經

曇摩難提譯 阿育王息懷目因緣經

康僧會譯 六度集經

僧伽跋陀羅譯 善見律毘婆沙

僧伽提婆譯 僧一阿含經

同 中阿含經

佛陀耶舍竺佛念譯 佛說長阿含經

鳩摩羅什譯 佛說放牛經

竺曇無闍譯 佛說鐵城泥犁經

慧簡譯 佛說閻羅王五天使者經

竺法護譯 佛說當來變經

安世高譯 佛說轉法輪經

- 失譯 舍利弗問經
- 地婆訶羅譯 方廣大莊嚴經
- 一行著 大毗盧遮那經疏
- 玄奘譯 異部宗輪論
- 真諦譯 十八部論
- 同 部執異論
- 吉迦夜、曇曜譯 付法藏因緣傳
- 僧祐著 釋迦譜
- 智旭著 閱藏知津
- 玄奘著 大唐西域記
- 義淨著 大唐西域求法高僧傳
- 同 南海寄歸內法傳
- 法顯著 佛國記
- 彦悰著 大慈恩寺三藏法師傳

- 道世著 法苑珠林
- 范曄著 後漢書
- 井上哲次郎著 釋迦牟尼傳 東京明治三十五年
- 高楠順次郎著 「シヤクンタラ」戲曲序論 東京明治三十六年
- 南條高楠同述、澤井常四郎編 佛領印度支那 東京明治三十六年
- 姉崎正治著 上世印度宗教史 東京明治三十三年
- 同 印度宗教史考 東京明治三十一年
- 松本文三郎著 佛典結集 東京明治三十六年
- 同 印度雜事 東京明治三十七年
- 藤井宣正著 佛教小史 京都明治二十九年
- 小野玄妙著 佛教年代考 東京明治三十八年
- 本願寺刊 印度攝影帖 京都明治三十七年

第 參 索 引

- ABAṆḌA 阿婆荼 147 (註)
 ABHAYA 無畏 117
 ABHAYAGIRI 無畏山 182, 183
 ABHIDHARMA 阿耨婆羅 168
 ABHIDHARMA-MAHĀYIBHĀṢĀ ŚĀSTRĀ 阿耨婆羅大
 耨婆羅經 239
 ABHINIṢKRAMAṆA 出家 190
 ABHISAMBODHANA 受戒 190
 ABHIṢEKA 授戒 34, 98, 126, 127, 130, 173, 202
 ACELAKA 165 (註)
 AGA 216
 ĀGAMA 阿含 163
 AGGI 阿伽 145
 AGGIBRĀHMA 阿耨婆羅經 144, 146
 AGGIKHANDHŪPAMA 阿耨婆羅經 170
 AGNI (= AGGI) 145
 AGNIBRAHMA 144 (註)
 AGNIMITRA 234 (註)
 AGRA 238
 AIRA 211, 212, 214
 AJĪTASĀTRU 阿耨婆羅經 5, 7, 8, 141
 AJĪTĪKA 103, 112, 140, 105, 235, 236
 AHICCHĀTTRA 阿耨婆羅經 146 (註)
 AHOGAṆḐĀ 阿耨婆羅 166, 167
 ALEXANDROS 阿耨婆羅 (MAKEDONIA) 11-15
 ALEXANDROS (EPĪROS) 129
 ALIKASANDARA 65, 129
 ALIYA-VASĀNI 阿耨婆羅經 78
 ALIĀHĀBĀD 82, 107
 ALTUMSCH 248
 ALUṆA 95
 AMBĀKAPĪLIKA 阿耨婆羅 96
 AMBĀLA 79
 AMBAṬṬHALA 174
 AMITRAGHĀṬA 19
 AMITROCHĀṬES 19
 ĀMRA 阿耨婆羅 102, 107, 175, 197, 200-201
 ANĀGĀṬA-BHAYĀNI 阿耨婆羅 78

- ANAMATIYAGGA-PAHIYĀYA 雜貨名錄 170, 176
 ĀNANDA 國號 188
 ANANTA 208
 ANANTA VIHĀRA 214, 215, 231
 ANATHIKAMACHA 博學 96
 ANĀTHIPIṆḌIKA (= ANĀTHAPEḌIKA) 國服學師林
 學' 梨居國或於於川十四國
 ANAVATAPTA 173 (註)
 ANDARĀB 於自錄錄 147 (註)
 ANDHRA 於錄錄 56, 147 (註)' 151, 152, 172
 ANDHRABHĪṬĪYA 208, 218, 241-242
 AṅGA 122 (註)
 AṅGUTTARA (= EKOTTARA) 華 | 國如 77 (註)
 ANOTATTA 國錄錄 173
 ANTIĠONOS GONATAS 128
 ANTIKṬNA 55, 128
 ANTIŌCHOS SOTER 20
 ANTIŌCHOS TĒOS 128, 130
 ANTIYOGA 33, 55, 128
 ANULĪ 國錄錄 176-179
 ANŪPA 122
 ANURĀDHĀPURA 國錄錄錄錄 173, 174, 179, 180, 182, 184
 ANURUDDHA 國錄錄 9
 ANURUDDHAKA 9 (註)
 ANUSANĪYĀNA 大如 34, 63, 157, 158, 199
 APARANTA 於錄 38, 65, 152
 APARANTAKA 國錄錄錄 170
 APPANĪDA SUTTA 長錄錄 176
 ARABIA 國錄錄 246-247
 ARAMAIC 23
 ARARĪJ 85
 ĀRAVYĀLA-NĀGARĀJA 國錄錄錄 169
 ĀKDRĀKA 234 (註)
 ARHAN 國錄錄 146, 186, 196, 214, 233
 ARITṬHA 國錄錄 176, 177, 178, 181
 ĀRYA 國錄錄 2, 3
 ĀRYĀVĀRĪYA 2
 ASANDHIMITṬĪ 191
 ASAṅGA 雜錄 240
 ASELA 181
 ASIA 國錄錄 184
 ĀSIVĪSOPAMA SUTTA 於錄錄' 於錄錄 169, 176
 AŠOKA 國錄錄 20
 AŠOKA (KĀLA) 國錄錄 (原錄) 9

- AŠOKĀRĀMA 國錄錄 143, 166
 AŠOKĀTĪAKU 雜錄錄 131
 AŠOKĀVADĀNA 121 (註原註)
 AŠOKAVARDHANA 234
 ASSYRIA 國錄錄 84, 230
 AŠJĀDHYĀYĪ 141 (註)
 ASTRĀGALOS 於錄 84
 AŠVA 錄 109, 116, 121, 180, 203, 229
 AŠVAĠHOŠA 於錄 240
 ASVASTĀMA 28
 ATTOCK 11
 AURANGSEB 250
 AYODHYĀ 國錄錄 146 (註)' 236 (註)' 242
 AYUPĀLA 國錄錄 143
 BABAR 249
 BABYLON 國錄錄 13
 BĀDARĀYANA 141
 BAIRĀT 68
 BAKHRA 87, 113
 BAKROR 114
 BAKTRIA 大國 22, 236
 BALABHI 於錄錄 25 (註)
 BALABHIPURA 於錄錄錄 26
 BALĀDITṬYA 242
 BANKIPORE 225
 BARĀBĀL 111, 205
 BARYGAZA 126 (註)
 BASYĪ 109
 BEDSĪ 209
 BELUCHISTAN 154
 BENĀRES 68
 BENGAL 68, 84
 BERHAMPUR 29
 BESĀRH 113
 BESNAGAR 124 (註)' 248, 249
 BETTIA 85
 BEYAH 12 (註)
 BHABRA 70, 76
 BHADRĀMUKHA 於錄錄錄 201
 BHADRASĀLA 於錄錄 172
 BHADRĀYUDHA 於錄錄錄 124
 BHĀGAVĀTA 234 (註)
 BHĀJA 209
 BHĀṆDUKA 於錄錄 172

- BHARHŪT 204, 215-217, 219, 221, 222, 231
 BHĀROCH 耆宿 126 (註) 147 (註) 152
 BHĀRUKACCHA 126
 BHAVABHŪTI 246 (註)
 BHIKṢANAPAHĀRI 出處 180
 BHIKṢU (= BHIKṢHU) 出 132, 136, 143, 146, 165-168, 201
 BHIKṢUṆĪ 出 143, 177-178
 BHILSA 6 (註) 116, 124 (註)
 BHOJA 56, 161, 162, 172
 BHOPĀL 87 (註)
 BHRIḠUKACCHA 126 (註)
 BHŪMIKĀ 釋名錄 51, 157, 160
 BHŪMIMĪTRA 235 (註)
 BHUVANEŚVARA 27
 BIDASPES 41 (註)
 BIGNONIA SUAVEOLENS 7 (註)
 BIHĀR 84
 BIHAT 44 (註)
 BIMBIŚĀRA 藥名錄 58, 187
 BINGUPHA 68
 BINDUSĀRA 藥名錄 19-20, 121, 123, 133, 150
-
- BIPASIS 12 (註)
 BIRAM 248
 BODDO 卷 239
 BODHI 佛 44, 134-135
 BODHISATTVA 佛 232
 BODHITARU 佛 147, 177, 178, 187, 192, 199, 208, 204, 223, 227, 228, 229, 230, 231, 244
 BOMBAY 27
 BORASSUS FLABELLIFORMIS 202 (註)
 BOROR-TAGH 233
 BOŪTA 卷 18
 BRAHMA 卷 144 (註)
 BRAHMAḠIRI 69, 70
 BRAHMAJĀLA SŪTRA 經 171
 BRĀHMAṆYA 經 3, 14, (註) 18, 34, 134, 140, 156
 BRĀHMĪ 卷 22, 25
 BRHADRĀTHA 234
 BRĪHASPATY 醫 233
 BRĪŚASENA 醫 233
 BUDDHA 卷 3, 77, 185, 232
 BUDDHADĀSA 183
 BUDDHAGAYĀ (= GAYĀ) 卷 111, 114, 147,

- 149, 178, 187, 203, 211
 BUDDHAGOSA 卷 183
 BUDDHAGUPTA 242 (註)
 BURMA 卷 170 (註) 183
 CAITYA 聖 120, 121, 204, 210-211.
 CAKAVĀKA 卷 95
 CALCUTTA 70, 82
 CALUKYA 243
 CAMPĀ 卷 122
 CĀṆAKYA 15
 CAṆḌAḠINI 卷 131
 CANDAGUPTA 卷 29
 CAṆḌAŚOKA 卷 132
 CAṆḌRA 卷 133
 CANDRABHĪGĀ 卷 2 (註)
 CANDRAGUPTA 卷 14-19, 130
 CAṆḌUR ĀRYASATYA 卷 176
 CAṆḌUR VARṆA 卷 14
 CAVETEMPLES OF INDIA 212
 CENTRAL PROVINCE 卷 69
 CEṬYĀḠIRI 卷 176
 CEYLON 卷 151, 154, 159, 180-184

- CHAKRĀTYA 23
 CHAMPĀRAN 84, 87
 CHANDANPTR 69
 CHATTRAŚĪLĀ 卷 24
 CHEKA 卷 146 (註)
 CHINAPĀT 卷 146 (註)
 CĪTRASILĀ 卷 24
 CODĀ 32 (註)
 COLA 32, 55, 151, 162
 CONSTANTINCS 137, 197
 COUPEL, M. 21
 CRISPUS 197
 CŪLAHATTHIPADOPANNA SŪTRA 卷 175
 CUNNINGHAM 81, 114, 116, 212
 CUTTĀK 27, 211
 DĀPI 卷 96
 DAHIB 247
 DAINACHOS 19
 DAKṢA 140 (註)
 DAKṢĪ 140 (註)
 DAKṢINĀPATYA 181
 DĀNA 卷 157, 161, 201

- DAREIOS 23
 DARIUS CODOMANNOS 23 (註)
 DARIAVOS 23 (註)
 DAŚARATHA 十誡中 209, 211, 234, 235-236
 DAVID MASSON 21
 DEANE, COLONEL 22
 DEKHAN 181 (註)′ 243 (註)′ 248, 249
 DELHI 70, 79-82, 249
 DEIHI-SIVĀLIK 81
 DEOMACIUS 20 (註)
 DEVA 卍 227
 DEVABHŪTI 234 (註)
 DEVADATTA 聖教綱要 8
 DEVADŪTTA SUTTA 卍經 169, 176
 DEVALA 140 (註)
 DEVALOKA 卍索 230
 DEVANĀGARĪ 25
 DEVĀNĀDIRĪYA (=DEVĀNĀDIRĪYA) 卍教 31, 173, 236
 DEVĀTA 卍 136, 176, 230
 DEVĪ 聖母 124-125, 173
 DHANĪMA 34 (註)
 DHANĪMACAKKĀPĀVĀYATĪANA SUTTA 聖經卍經 170
 DHANĪMALIPĀ 聖經卍 卍經 20, 31, 40, 42, 57, 58, 62, 67, 83, 91, 98, 119
 DHANĪMANĪHĀMĀTA 聖經卍 卍 33-40, 61, 102, 103, 157, 169
 DHANĪMAPĀLA 聖經卍 143, 243
 DHANĪMARAKKHITA 聖經卍 145, 170
 DHANABHŪTI 216
 DHANANNANDA 聖經卍 15
 DHANDHABINASSA 聖經卍 170
 DHANĪKA 122 (註)
 DHARMA 聖經 34, 52, 55-56, 90, 100-102, 134, 161-164
 DHARMAČAKRA 卍經 117, 204, 211, 226, 227, 230, 231, 237
 DHARMAČAKRA-PRAVARTANA 聖經 卍 卍 190
 DHARMAMĀHĪMĀTĪRA 38 (註)
 DHARMAKĀYA 卍 232
 DHARMANANDĪ 聖經卍 197
 DHARMAPĀLA 聖經卍 卍 卍 240
 DHARMARĀJA 卍 236
 DHARMAŚĪSTRA 141 (註)
 DHARMAŚOKA 聖經卍 132
 DHARMAVARDHANA 聖經卍 卍 卍 193, 196

- DHĀTUV 語彙 141 (註)
 DHĀTUV-PĀTĪHA 141 (註)
 DHĀTUSENA 133
 DHAULI 27, 59, 161
 DĪGA (=DĪRGHA) 聖經卍 77 (註)
 DĪGHASŪMANA 聖經卍 181
 DĪPAVĀMSA 29, 183
 DRAVIDA 聖經卍 (武經) 2
 DRAVIDA 聖經卍 卍 147 (註)′ 153
 DRONĀ 聖經卍 141
 DSCHELAL ED DIN 248
 DULHĀ 109
 DURABHISĀRA 170 (註)
 DUṬṬHAGĀMAṆI 141 (註)′ 181
 EDWIN NORRIS 22
 EGYPT 聖經 20, 126, 123, 154, 159, 227
 ELĀRA 181
 ELLIOS, SIR WALTER 30
 EPĪROS 129, 154, 159
 ERANNOBOAS 7 (註)
 EUDEMOS 13
 FAH-HIEN 聖經 114, 115, 116, 119, 149, 182, 183, 225

- FAUSTIA 197
 FELL, 223
 FERA INDICA 卍 (註)
 FERGUSSON, JAMES 115, 212, 218
 FIGUS INDICA 卍 (註)
 FIGUS RELIGIOSA 147 (註)
 FĪROZĀBĀD 80
 FĪROZ SHAH TUGHĪLAK 80
 FORREST 24
 GĀJĀPATĪE 24, 卍 卍 卍
 GĀMAKAPOTA 聖經 96
 GAṆĀPĀTĪHA 141 (註)
 GANDAK 4 (註)
 GANDHABBA 聖經 139
 GĀNDHĀRA 聖經 38, 146 (註)′ 161, 152, 155, 163, 223, 239, 240, 243
 GANDHARVA 聖經 169 (註)
 GAṆGĀ 聖經 卍 卍 2, 7, 238
 GANGES 2 (註)
 GAṆGĀPUPPĪKA 96
 GANJĀM 29
 GARJANĀPĀTI 聖經 119, 147 (註)

- GARBHAKOŚADHĀTU MAṆḌALĀ 胎藏長壽佛經 (經)
135
- GELĀṬĀ 96
- GHARRĀ 12 (冊)
- GHĀZĪPUR 114, 119 (冊)
- GHĀZNI 嚙嚙 152
- GHOŚAVASU 234 (冊)
- GIRNĀR 26, 28
- GO (𑀘 RĪṢABHĪ) 𑀘 117, 121, 203, 229
- GODĀVARI 167 (冊) 170 (冊)
- GONARDA 241
- GOPĪKĀ 𑀘𑀓𑀭𑀮 236 (冊)
- GOPISANĀ 嚙嚙 146 (冊)
- GOŚĀ 嚙 196
- GRĪYPHOS 223
- GUDDAPHARA (=GONDPHARES) 237 (冊)
- GUJERĀṬ 25, 239, 242
- GUPTĀ 嚙 𑀘𑀓𑀭𑀮 185
- GUPTĀ (𑀘𑀓𑀭𑀮) 243
- GYMNOSOLPHISTAI 140
- HANSA 嚙 86, 88, 95
- HARIŚAVARDHANA 嚙 243
- HĀRĪVĀ 嚙 169
- HĀSṬĪ 𑀘 6, 17, 24, 28, 114, 115, 116, 121, 180, 203, 229
- HĀSTIGUHĀ 嚙 211
- HĀYANUKHA 嚙 147 (冊)
- HAZĀRA 22
- HELĪAS 嚙 11-19, 84, 126, 154, 203, 236, 237
- HEṆRĪ DUNANṬ 132
- HĪMA-KADPHISES 237 (冊)
- HĪMĀLAYĀ 嚙 19, 169
- HĪMAVĀ 170 (冊)
- HĪMAVANTA 嚙 170, 238
- HĪNAYĀNA 𑀘 10, 240
- HINDŪKŪSH 嚙 2, 238
- HINSAḠIRĪ 68
- HĪRĀNĀYAVATĪ 𑀘 4
- HONEYSTUCKIE 嚙 84, 83
- HUEN-CHWANG 嚙 108, 110, 113, 114, 115, 117, 118, 119, 149, 189, 223, 243, 244
- HUŚKA (=HUVIŚKA) 237
- HUŚKAPURA (=UŠKURU) 238 (冊)
- HYDASPES 41 (冊)
- HYPHASIS 12 (冊)

- INDAGĪṬṬĀ 嚙 142
- INDĪKA 18
- INDRAPĀṬĪṬĀ 234
- INDRAPRAŚṬĀ 70 (冊)
- INDRA ŚAKRA 嚙 187
- INDU 嚙 2, 11, 13, 17, 19, 153, 184, 231, 236
- IONIA 33 (冊)
- IRĀVATĪ 嚙 2 (冊)
- ISILA 71, 169
- ITIVŪṬṬĀKA 𑀘 77 (冊)
- I-TSING 嚙 245
- ITṬHIYĀ 嚙 172
- JABALPUR 69
- JĀḠANĀṬH 27
- JAHĀNGĪR 83
- JAININI 140
- JAININI SŪTRA 140 (冊)
- JAINA 嚙 140
- JĀLĀLĀPUR 12
- JĀLĀNDHARA 嚙 239
- JAMBUDVĪPA 嚙 71, 73, 142, 201
- JAMBUKOLĀPAṬṬĀNA 嚙 178

- JAMES PRINSEP 23, 212, 235 (冊)
- JĀṬAKA 𑀘 167, 196, 197, 226, 237, 231
- JĀṬĪLA 165 (冊)
- JĀṬŪKĀ 嚙 96
- JĀṬṆḠARĀMEŚVARĀ 69, 70
- JĀUGĀDA 30, 59, 151
- JĀYASVĀMĪPURĀ 238
- JĀYPUR 68
- JEIPAR 247
- JETĀVANĀ VĪHĀRA 嚙 116, 117, 167
189, 嚙 14區
- JHELUH 11 (冊)
- JĪVĀ 𑀘 140
- JONESIA ASOKA 131 (冊)
- JOMNA 2 (冊)
- JŪNĀḠAR 25
- JŪRYĀ 嚙 147 (冊)
- JUŚKA 237
- JUŚKAPURĀ (=ZUKUR) 238 (冊)
- JUṢṬĪNUS 130
- KĀBUL 2, 11, 19, 237, 238, 246, 247, 249
- KĀBULĀ 2 (冊)

- KAINUR 68, 69
 KĀKAṆḌA 扇殼殼 10
 KĀKAṆḌAKA 10 (註)
 KAKŪA 5 (註)
 KĀLAKĀRĀMA SUTTA 扇殼經 170
 KALAṆḌA 扇殼殼 119, 189
 KĀLĀṢOKA 扇殼殼 7, 9-10, 15
 KĀLASŪMANA 扇殼殼來給 181
 KĀLIDĀSA 243
 KALĪE WALID I. 246
 KALIṆGA 扇殼殼 27, 29, 52, 64, 151, 152, 160, 211, 214
 KALINGĀE PROXIMIMARI 27 (註)
 KALPA 卷 36, 37
 KĀLSĪ 23
 KALYĀNA 243
 KĀMĀSOKA 133
 KANĪSKA 扇殼殼 155, 237-238, 240, 241
 KANĪSKAPURĀ (= KĀNESPURĪ) 238 (註)
 KAMBOJA 33, 65, 151, 152
 KANAKAMUNI 扇殼殼 103-109, 119
 KANAUVJ 114 (註) 189 (註) 247
 KĀṆCANANĀLĀ 十類扇殼殼 193-196
-
- KĀNCĪPURA 扇殼殼 153 (註)
 KANDY 184
 KANT 137
 KAṆVA 235
 KANŶĀKURĪJA 扇殼殼 扇殼殼 146 (註) 189, 243
 KAPHATA 卷 96
 KAPILAVASTU 扇殼殼 扇殼殼 3 (註) 5, 109, 118, 147 (註)
 KAPITHA 扇殼殼 114 (註)
 KAPURDIGIRI 21
 KĀRLI 209
 KARMA 卷 扇殼殼 140
 KARṆAGUHĀ 112, 118, 206-207
 KARṆASUVARĪNA 扇殼殼 扇殼殼 147 (註) 244
 KĀRŪVAKĪ 107, 191
 KASĀYA 扇殼殼 (註) 135
 KĀSHGĀR 151 (註)
 KASIA 4 (註)
 KASĪMĪRA 扇殼殼 146 (註) 169, 241, 237, 238, 240
 KASSAPA 扇殼殼 170, 218
 KATĶĀVĀYĪTHU 卷 168
 KATĶĀVĀR 25
 KAUSĀMBĪ 扇殼殼 4, 84, 107, 146 (註)

- KENTAUROS 203
 KERĀLAPUTRA 33, 151, 162
 KESARIYĀ 85
 KHALĀTIKA 112, 118
 KHALLĀṬĀKA 卷 123
 KHANḌAGIRI 214
 KHAROṢṬHI 扇殼殼 22, 76
 KHIZRĀBĀD 79
 KHOKAND 238
 KHUTB ED DIN 248
 KITTO 28
 KOILA 2
 KONĀKAMANA 108 (註)
 KONKAN 153 (註)
 KOṆKANĀPURA 扇殼殼 扇殼殼 147 (註) 153
 KOPHENE 扇殼殼 2 (註)
 KUSĀLA 扇殼殼 147 (註)
 KOZULIO KADPHISES 237 (註)
 KRAKUCCHANDA 扇殼殼 扇殼殼 118, 186
 KRISNA 56 (註)
 KRITĶA 扇殼殼 240
 KROṢA 扇殼殼 102
-
- KSATRĪYA 卷 卷 3 (註) 14 (註)
 KṢĪRĀBDHI 卷 229
 KUBHĀ 2 (註)
 KUKKŪYĀRĀMA SAMGHARĪMA 國語國語 147,
 149, 185, 193, 220
 KUKṢĪ-PRAṬISANDIG AHAṆA 卷 190
 KUKṢĪ-VASANA 卷 193
 KULŪTA 國語 146 (註)
 KUMĀLA 111-63, 64, 71, 126, 160, 201, 216
 KUMBHĀṆḌA 169 (註)
 KUMBHĀNDAKA 卷 169
 KUṆĀLA 卷 190-198, 199, 220
 KUṢĀGARĀPURA 扇殼殼 扇殼殼 扇殼殼 7
 KUṢĀNA 卷 237 (註)
 KUṢĪNĀGĀRĀ 卷 卷 卷 3 (註) 4, 118, 147 (註) 187, 189
 KUSUMĀPURA 扇殼殼 扇殼殼 扇殼殼 6 (註)
 KUVERA (= KUPĪRA) 卷 226, 卷 11-16
 KYRENE 129, 154, 159
 LADĀK 238
 LAHORE 243, 250
 LAṆHULOVĀDA MUSĀVADĀMĀDHIGICHYA 扇殼殼
 卷 73

LAJAKA 雜錄 34, 93-94, 102, 167, 169, 160
 LAKSA 雜錄 123
 LAKSMĀNA 122 (註)
 LAKSMĪ 雜錄 229 (註)
 LAMA 雜錄 244
 LANĀ 雜錄 33 (註)
 LAṬṬYA 114
 LAURIVĀ 85
 LI-I-PIAO 雜錄 243
 LIŅGA 雜錄 85, 86
 LIŅGĀNUŚĀSANA 141 (註)
 LOHARA 247 (註)
 LOMĀŚARISIGUHA 207-209
 LUMBINĪ 雜錄 110, 111, 186
 MADHURĀ 雜錄 185 (註)
 MĀDHYAMIKA 中錄 240 (註)
 MĀDHYĀNTIKA 143 (註)
 MADRAS PRESIDENCY 29
 MADURA 153 (註)
 MAGADHA 雜錄 5, 9, 15, 16, 20, 76, 117, 118, 119, 147
 (註) 187, 189, 224, 249, 244, 245
 MAGAS 129

MAHĀBODHI 雜錄 245
 MAHĀDEVA 雜錄 143
 MAHĀDHĀRMĀRAKKHITA 雜錄 170
 MAHĀKĀILA 雜錄 133
 MAHĀKĀŚYAPA 雜錄 8, 188
 MAHĀNĀMA 雜錄 (中) 183
 MAHĀNĀMA 雜錄 (中) 184
 MAHĀNĀMA 雜錄 (雜錄) 176 (註)
 MAHĀNĀRADAKASSAPA JĀTAKA 雜錄 雜錄 170
 MAHĀRAKKHITA 雜錄 170
 MAHĀRĀŚTRA 雜錄 147 (註) 152
 MAHĀRĀṬṬA 雜錄 170, 172
 MAHĀSAMĀGHKA 雜錄 10
 MAHĀSĀṬṬYA 雜錄 224
 MAHĀVĀMBA 29, 184
 MAHĀVIHĀRA 雜錄 179, 182
 MAHĀYĀNA 大錄 232, 239, 246
 MAHERAKUTA 雜錄 241, 242
 MAHEŚVARA 雜錄 248
 MAHĪSĀKAMĀNDALA 169 (註)
 MAHINDA 雜錄 125, 126, 143, 145, 146, 166, 169, 171,

172-181
 MAHISAMĀNDALA 雜錄 169, 171
 MAHRĀṬṬA 152 (註)
 MAJJANTIKA 米錄 143, 1 3
 MAJJHIMA 米錄 170, 218
 MAJJHIMA (=MĀDHYAMA) 中錄 78 (註)
 MAKA 55, 129
 MAKARA 雜錄 204
 MAKEDONIA 11, 164, 169
 MALAKŪṬA 雜錄 147 (註) 153
 MĀLAVIKĀGNIMITRA 243 (註)
 MALILA 雜錄 3
 MĀNĀSA 173 (註)
 MANIKPURA 214 (註)
 MANSERĀ 22
 MANU 雜錄 16
 MĀRĀṬṬHA 152 (註)
 MĀRAṬṬYA 雜錄 180
 MĀṬHA-KŪAR-KAKOT 4
 MATHA 86
 MATHURĀ 雜錄 146 (註) 185, 237
 MAUDGALYĀYANA 西錄 183

MAURYA 米錄 16, 126, 233-234, 255
 MAXENTIUS 137
 MAYŪRA 雜錄 16, 230
 MAYŪRAPOŚAKA (註) 16
 MEGASTHENES 17-18
 MEGHADŪṬA 243 (註)
 MEGHĀYĀHANA 241
 MEGHAVANA 西錄 176, 178, 179, 180
 MENANDROS 236 (註)
 MESOPOTAMIA 25
 MIHINTALĪ 180
 MILINDA 雜錄 236
 MILINDPAÑHA 236 (註)
 MĪMĀṆSĀ 雜錄 140
 MINĀR-I-ZARIN 雜錄 80
 MIN-TI 雜錄 238
 MĪRĀṬH 81
 MISSAKA 西錄 174
 MOGALANAPUTTA TISSA 西錄 149, 166-168,
 169, 218
 MOGUL 雜錄 249, 260
 MONEYA SUTTA 米錄 78

- MONEYMAN 78 (註)
 MONGOLIA 蒙古 248
 MOPHIS 11, 13
 MORA 16 (註)
 MORIYA 16 (註)
 MRIGADĀVA SAṆGHARĀMA 鹿野園 119, 187, 189, 190, 224
 MRĪGA JĀTYAKA 鹿科 226, 狢川十洲圖
 MUDDĀLĀPUTTARĪṢYA 143 (註)
 MUDDĀ-RĀKSASA 14
 MŪLAKĀDEVA 170
 MUṆḌA 彌蘭 9
 MUṆI-GĀTTHA 牟尼迦 78
 MUNIHATA 摩訶陀 233
 MURĀ 14, 16
 MUSSOORI 23
 MUTASĪVA 毘瑟婆 173
 MUTTRA 185 (註) 247
 MYSOBE 69
 NĀBHAKA 56
 NĀBHAPANTI 56
 NĀGA 龍 227, 229
 NĀGADĀSĀKA 烏菟納蘇 9
 NĀGAGUḬĀ 龍鱗 213
 NĀGARAHĪRA 龍宮樓 146 (註) 223
 NĀGĀRJUNA 龍窟龍窟 238, 240
 NĀGĀRJUNI 111, 209, 235
 NĀGASENA 龍女 236
 NAHAPANA 212 (註)
 NAIRĀJANĪ 尼梨離 203
 NĪLANDA 龍窟 245
 NANDA 彌蘭(將) 9
 NANDA 彌蘭(王) 14, 15, 212
 NANDANA 彌蘭(國) 176
 NANDANĀKRI 96
 NĀDĀYANA 龍津 119, 235 (註)
 NARMADĪ 33 (註)
 NĀSUK 239
 NAṬABHAṬĪKA 龍宮 185
 NAṬAKA 78 (註)
 NEMITTA 122 (註)
 NEPĀL-TAKĀI 4, 108
 NIĠANṬHA (= NIRGRANṬHA) 165 (註)

- NIĠĪVA 108
 NIĠĪVASĀGAR 108
 NIĠRODHA 龍窟(象) 136, 165
 NIRGRANṬHA 尼龍, 103, 140
 NIRRIṬI 龍窟 117, 120, 127, 131, 135
 NIZAM 169 (註)
 NORTH-WESTERN PROVINCE 北印度 81
 NYAGRODHA 尼龍窟(窟) 102
 NYAGRODHAGUḬĀ 尼龍窟窟 112, 205 (註)
 OKAPIṆḌA 龍 95
 OMPHIS 11 (註)
 ORIENT 東 154
 ORISSA PROVINCE 27
 OUDĪ 236 (註)
 OZENĀ 63 (註)
 PADERĪĀ 4, 109
 PADESIKA 聖地 34
 PADMA 蓮 48, 180, 203, 204, 229, 230
 PADMAKA 122 (註)
 PADMĀVĀTĪ 蓮葉 131, 192
 PALEMBANG 棉蘭 245
 PALASATA 鹿 96
 PĀLI 183
 PALIBOTTHA 6 (註) 15
 PAṆCAKA 169
 PAṆCANADA 2 (註)
 PAṆḌABAṆGA 165 (註)
 PĀṆḌYA 33, 55, 161, 162
 PĀṆINI 梵語 140
 PAṆJĀB 附 2, 11, 12, 13, 22, 79, 238, 250
 PANNASASESIMĀLA 96
 PAONANOPAO 龍 239
 PARINIRVĀNA 龍 4, 187, 189, 190
 PĀRSVA 梵語 239
 PARTHA 狄 236
 PĀṬALI 6, 226, 狢川十洲圖
 PĀṬALIPUTTA 7
 PĀṬALIPUTTA 梵語中 佛出 6-7, 17-18, 39, 117, 124, 125, 146, 147, 148, 167, 177, 225
 PĀṬNA 6, 7, 68, 225
 PAUṆḌRAYARDHANA 龍窟 147 (註)
 PAURAVA 11 (註)
 PAUṢA 96 (註)
 PEGU 170 (註)

PERSIA 波斯 11, 23, 245, 248
 PESHAWAR 21
 PETAVATPU 彼塔瓦特 176
 PHOENIKE 25
 PILOSANA 皮羅薩那 146 (註)
 PIṄGALAVATSA 皮根羅薩 123
 PIPARIA 87
 PIPPALA 皮波拉 147 (註)
 PISĀCA 171 (註)
 PĪTASILĀ 皮塔西拉 147 (註)
 PITENIKA 38, 56, 151, 152, 172
 PIYADASI 皮亞達西 29, 138
 PIYADASSANA 29
 PIYADASSI 29
 PLAN 210
 POLONNARUVA 184
 POROS 11, 12, 13
 PRĀCYA 15 (註)
 PRAKRIT Prakrit 245
 PRASENĀJIT 普善那吉特 4, 227, 披沙十一國
 PRASII 普沙 15
 PRASŪTI 普蘇提 4, 190

PRAṬĀPĀDITYA 241
 PRAYĀGA 普里亞加 82 (註) 147 (註)
 PRIYADARŚIN 29 (註)
 PTOLEMAIOS PHILADELPHOS 20
 PULINDA 56, 151, 152, 172
 PULINDUKA 234 (註)
 PULOMAT 242 (註)
 PUNARVASU 普那瓦蘇 97
 PUṆYAŚĪLĀ 普那悉拉 227
 PURĀṆA 233, 235, 246
 PURANARAJGIR 7 (註)
 PŪRĀṆAVARMA 普羅那瓦爾摩 244
 PURU 11
 PURUŚAPURA 普魯沙波羅 21 (註)
 PUŚYAMITRA 普蘇亞密特 233, 234, 235
 PUŚYAVARMA 普蘇瓦爾摩 233.
 RADHAGUPTA 拉達加普塔 131, 199, 200, 202
 RADHIAH 85
 RAḠHUVANŚA 243 (註)
 RĀJA 卅 3
 RAJABATTS L. 95 (註)
 RĀJAGRĪHA 拉加格利哈 卅六章 5, 7, 141, 189

RĀJATVARAṄGIṆĪ 234
 RĀJENDRA LĀLA MITTRA, BABU 212
 RAIGIR 5 (註)
 RĀJPUṬTANA 88, 239
 RĀKHAŚĪ 170 (註)
 RAKKHITVA 羅克希塔 169
 RĀMA 羅摩 141
 RĀMAGRĀMA 141 (註) 147 (註)
 RĀMPURVA 87
 RĀṢṬRIKA 38, 151, 152
 RAṬHIKA 122 (註)
 REVATA 羅瓦塔 10
 RĪŚIKULYĀ 30
 RĪSIPATANA 19 (註)
 RUMMINDEĪ 110
 RŪPNĀTH 69, 73
 RUVANVEIṆĪ 178
 SADDHARMA 沙達摩 77
 SADDHĀNMA 77 (註)
 SĀGALĪ 12 (註)
 SĀH 242
 SAHĀRAMPUR 23

SAHASADEVVA 170
 SAHASRĪM 69, 70
 SĀKALA 12 (註)
 SĀKETA 236
 ŚAKRĀDITYA 242 (註)
 ŚAKUNTALĀ 17, 243 (註)
 ŚĀKYA 釋迦 3
 ŚĀKYAMUNI 釋迦牟尼 3, 6, 75, 111, 185 (註) 141
 SĀLĀDITYA 薩羅耶 242
 SĀLIKĀ 沙利迦 95
 ŚALISŪKA 234
 SAMATĀṬYA 三昧目陀 147 (註)
 SAMACCTTA SUTTA 沙摩赤經 175
 SAMANTA-PĀSĀDIKA 1 摩訶沙提 183
 SAMĀPĀ 59, 64, 151, 160
 SAMBARA 沙摩羅 172
 SAṆGHA 僧 71, 73, 77, 135, 140, 165, 174, 202
 SAṆGHAMITTRĀ 125 (註)
 SAṆGHAPĀLA 沙僧波羅 197
 SAṆGHARĀMA 沙僧羅摩 120, 121, 143, 148
 SAṆGHASTA 沙僧婆 114 (註) 148

- SANĠITTI 碑文 8, 9, 10, 164-168, 239
 SĀNĪKYA 舍利 245
 SAMPADIN 山塔碑 193, 200, 202
 SANUDRAGUPTA 83, 84
 SANCIĪ 88, 109, 116, 168, 215, 217-219, 221, 222-223, 226, 228
 SANDAKA 舍利 96
 SANDIKOKOTIṬOS 16
 SANDROKUPTOS 16
 SANGALA 塔婆 12, 236
 SAṄĠAMITṬĪ 舍利塔 125, 127, 143, 171, 177-178
 SAṄĠAṬṬA 234
 SANGAṬṬHA 舍利 103
 SAṄĠĪṬI SUTṬA 77 (註)
 ŚAṄĠHIKA 122 (註)
 SANKISA 114
 SANKUJAMACHA 塔婆 96
 SĀNSKRĪṬ 碑文 246
 SAPṬAGUḤĪ 碑 112
 SAPṬAPARṆAGUḤĪ 塔婆塔婆 8
 ŚĀRDŪRAVARMAN 208
 ŚĀKIPUṬṬA 舍利塔 167
- ŚAKṬĪRA 舍利 109, 142, 177, 210, 204, 220, 229
 ŚĀRNĀṬH 119 (註)
 SARVĀSTIVĀDA 釋迦尊嚴 82 | 序文 10, 239
 ŚAŚADHARMAN 234
 SA'ĪNKA 舍利塔 244
 ŚĀṬADRU 舍利塔(尼) 2 (註)
 ŚĀṬADRU 舍利塔(國) 146 (註)
 SAṬYA 舍利(尼) 141 (註)
 SAURĀŚṬĪRA 舍利塔 25 (註)
 SAURĀSTREṆE 25 (註)
 SEṆṬIṬ 23, 25
 SELEUKOS NIKATOR 13, 17, 236
 SEṬAKAPOṬA 舍利塔 96
 SEYAKA 舍利 96
 SHĪHBĀZGARHI 21
 SHĀH-DEBĪ 11 (註)
 SHAH MAHOMED 249
 SHUBHAD ED DIN 248
 SIDDĀPUR 69, 70, 75, 152
 SHHS 249, 250
 ŚIKŚĪ 141 (註)
 ŚĪLĀDṬṬA 舍利塔 243

- SILĀPHALAK 舍利 20-31
 ŚILĪSTĀNĪBHĀ 碑 20, 74, 79-88, 108-110, 119, 155
 186, 189, 189
 SĪNĪHA 舍利 86, 113, 114, 115, 116, 117, 121, 203, 213, 227, 230
 SĪNĪHAGUḤĪ 舍利塔 213
 SĪNĪHALĪ 舍利塔 33 (註) 171, 173, 178
 SĪNĪHAPURĀ 舍利塔 146 (註) 224
 SINDHU 舍利塔 11, 12, 13, 238
 SINDHU 舍利塔 147 (註) 246-247
 SINGHALESE 183
 SIPRAKA 242 (註)
 ŚISUNĀGA 舍利塔 9
 ŚIVA 248 (註)
 SIVĀLIK 79 (註)
 SMITH 83
 SOLFERINO 132
 SOMĀŚARMAN 234
 SOMNĀTH 25, 248
 SONA 171
 SON 7 (註)
 ŠONA 舍利 7
- SOPĀRĀ 27, 152
 SOLĪAI 32 (註)
 SPHINX 228
 SPUOṬA 舍利 141 (註)
 ŚRĀMAṆĀ 舍利 35
 ŚRĀMAṆĒRA 舍利 146
 ŚRĀVASTĪ 舍利塔 4, 147 (註) 187, 189
 ŚRĪ 舍利 229, 230, 231
 ŚRĪHARŚĀ 246
 ŚRĪKRĪṬĀṬ 舍利塔 151
 ŚRĪ-ŚĀṬĀKĀRṆĪ 218, 228
 SRUGHMA 舍利塔 79 (註) 146 (註) 216 (註)
 STADION 17 (註)
 STHĀNEŚVARĀ 舍利塔 70 (註) 1:6 (註) 224
 STHAVĪRA NIKĪYĀ 舍利塔 10
 STRABO 238
 STŪPA 舍利塔 85, 109, 141-142, 146-149, 153, 182, 190, 203, 215-224, 226, 227, 228, 229, 230, 231
 STŪPA OF BHARHŪṬ 228 (註)
 SUDĀMAGUḤĪ 112, 205-206
 SUDĀṬṬA 舍利塔 193
 ŠUDDHODANA 舍利塔 5

- ŠÜDRA 奴隸 14
 ŠÜDRAKA 246
 SUGAṂA 216
 SUJYEŠṬHA 234 (註)
 SUKA 廢墟 95
 SULĀN MAHMUD 247, 248
 SŪMAṂA 悉米奈(俗塵) 171, 177
 SŪMANA 悉曼奈(汗牛) 122, 125, 136, 144
 SUMATRA 長壽洲 245
 ŠUṂGA 234
 SUN-YUN 宋雲 243
 SURIYA 日天 165
 SŪRYA 165 (註)
 SUŠARMAṂ 235 (註)
 SUSĪMA 悉悉曼 122, 123, 124, 125
 SUSUNĀGA 9 (註)
 SUTTA NIPĀṬA 77 (註)
 SUVANŅABHŪMI 妙喜國 171
 SUVARŅAGIRI 71, 160
 SUYAŠAS 209, 234
 SVĀMIBUDDA 242 (註)
 SVASTIKA 卍字 30, 214
 SYDIA 圖圖 13, 17, 19, 20, 126, 154, 159
 TAI-SUN 宋孫 133, 244
 TAKI 12 (註)
 TĀKSAŚ'ILĀ 因陀提摩 11, 63, 114, 123, 126, 146 (註)
 150, 158, 160, 193-195
 TĀLA 舍羅 202
 TĀMALITṬI 旃檀林樹 178
 TĀMBAPAṂNI 33, 55
 TĀMBALIPṬI 147 (註)
 TĀMUDZIN 悉米真 249
 TAMULIKA 181
 TĀPROBANE 33 (註)
 TĀRAN'THA 122 (註)
 TASSĀRAKKAḂĀ 192 (註)
 TĀTHĀGATĀGUPṬA 242 (註)
 TĀXIĀLA 11 (註)
 TAXILA 11 (註)
 TAXILES 11 (註)
 TĀHĀNA DISTRICT 27
 TĀNESAR 70 (註)
 TĀUPA 85 (註)
 TĀUPĀRĀMA 華園 177

- TIBET 西藏 244
 TIMUL 悉米呖 249
 TISSA 悉悉(因陀州尊) 122, 125, 144-145, 166
 TISSA 悉悉(曠野中) 173-181
 TISSADATṬA 悉悉樂 181
 TISSĀRAKKAḂĀ 192 (註)
 TISSĀRAKKAḂĪTA 192 (註)
 TIŠYA 122 (註)
 TIŠYA-NAKŠATRA 或夜 62, 97, 98
 TIŠYARAKŠITĀ 悉悉樂 192-196
 TĪVARA 107, 191
 TOLERANTIA 容忍精神 139
 TOPRA 79
 TORAṂA 特羅 221, 223-230, 232
 SOSALĪ 59, 64, 126, 151, 160
 TRAYASTRIṂSA 或夜 115, 148, 187
 TREE AND SERPENT WORSHIP 232 (註)
 TRIPṬĀKA 川樓 8, 168, 182
 TRISŪRA 律' 川樓 214, 230
 TSAUKUTĪA 悉悉 147 (註)
 TSEKA 悉羅 146 (註)
 TU-FAN 古藩 245
 TULĀNĀYYA 55, 123
 TUŠTĀRBHAVĀNA-CYĀVANA 悉悉 190
 UDAYABHADDA 8 (註)
 UDAYABHADRA 廢墟 悉悉 6, 8
 UDAYĀGIRI 116, 211, 213
 UDAYANA 悉悉 4
 UDYĀNA 或夜 5, 146 (註)
 UDAYĀŠVA 6 (註)
 UDAYIBHADDAKA 8 (註)
 UDRA 或夜 27 (註)
 UDDUMBALA 圖圖 廢墟 147 (註)
 UĀRA AKHADA 214
 UJJĀYANA 或夜 63, 124, 125, 126, 127, 152, 158, 160
 173, 217
 UJJĀYINĪ 63 (註)
 UJJENĪ 63 (註)
 UJJENIO 124
 UJJENIYA 124 (註)
 ULWAR 69
 UNĀRISMUS 悉悉 1, 250
 UPAGUPṬA 廢墟 悉悉 146, 185-186, 199
 EPANIŠAD 廢墟 悉悉 3

UPĀSĀKA 毘舍婆 71 (註釋) 135
 UPATISA-PASINA 毘舍婆沙經 78
 UPAVASATĪHA 166 (註)
 UPOSATĪHA 止觀 166, 167
 URASA 鹿野 145 (註)
 URUMUNĀDA 毘舍婆沙 165
 USTĪRA 毘舍婆 116
 UTTARA 毘舍婆 171
 UTTARAKOSALA 毘舍婆羅 166
 UTTARASENA 毘舍婆羅 5
 UTTIYA 毘舍婆(大德) 172
 UTTIYA 毘舍婆(中) 180
 VĀC 毘(德) 141 (註)
 VADATĪHIKA 236 (註)
 VADĀKA 214
 VĀDHAPĀĪLA 216
 VAHIYAKĀ 210, 236
 VAIHĀRA 毘舍婆 8
 VAIKUNṬĪA VIHĀRA 214, 216
 VAIŚĀKHA 毘舍婆 147 (註)
 VAIŚĪLĪ 毘舍婆 毘舍婆 6, 113, 147 (註) 190
 VAIŚEŚIKA 毘舍婆 245

VIA SACRA 179
 VICTORIA 250
 VIDĪŚĪ 毘舍婆 124, 173, 174
 VIDĪŚĪGIRI 毘舍婆 124
 VIDYĀPIṬĀKA 毘舍婆 245, 246
 VIGATĪSOKA 122 (註)
 VIKRAMĀDĪTYA 毘舍婆羅 242, 243 (註)
 VIKRAMORVAŚĪ 243 (註)
 VIHĀRA 毘舍婆 毘舍婆 147, 210, 215
 VIMĀNAVĀTṬU 毘舍婆 176
 VINAYA-SAMUKKASA 毘舍婆 77
 VINDHYA 毘舍婆 19
 VIPĀŚĪ 毘舍婆 2 (註) 12
 VIPĀŚYIN 毘舍婆 226
 VIPŪDHAKA 毘舍婆 5
 VIŚ 毘舍婆 3
 VIŚA 毘舍婆 3 (註) 14 (註)
 VĪSĀLĀDEVĀ 81
 VIŚṆU 毘舍婆 119 (註) 214 (註) 229 (註)
 VIŚṆUPURĀṆA 14, 234 (註)
 VIŚVADEVĀ 216
 VIŚVAGURHĀ 112, 206

VAIŚṆAVA 毘舍婆 140
 VAJRA 242 (註)
 VAJRAMITṬA 234 (註)
 VAKKULA 毘舍婆 188
 VANAVĀSĪ 毘舍婆 170
 VANAVĀSĪMANDALA 169 (註)
 VANAVĀSĪN 169 (註)
 VARAṆA 毘舍婆 119, 139
 VĀVĀṆĀSĪ 毘舍婆 毘舍婆 68 (註) 119, 126, 147 (註) 187, 189, 224
 VARŚĀKARA 毘舍婆(毘) 6
 VARUṆA 毘舍婆 136
 VASUBANDHU 毘舍婆 240
 VASUDEVA 235 (註)
 VASUMITṬA 234 (註) 毘舍婆 毘舍婆 235
 VĀṬṬAGĀMANĪ 182
 VĀYUPURĀṆA 6 (註)
 VEDA 毘舍婆 3, 140, 141, 227
 VEDĀNTA 141, 246
 VEDAVEYAKA 96
 VEDI 毘舍婆 207, 211
 VEDISSA 124 (註)

VĪTĪSOKA 毘舍婆 2 (註) 122, 145
 VITASTĪ 毘舍婆(毘) 11, 12
 VRIJĪ 毘舍婆 毘舍婆 3, 5, 10
 VRIJĪ 毘舍婆 147 (註)
 VRIJISĪHĀNA 毘舍婆 2 (註)
 VYĀSA 毘舍婆 140 (註)
 WAN-CHANG-KUNG-CHU 毘舍婆 244
 WANG-HUEN-TSEH 毘舍婆 243
 WATHEN 26
 WILLIAM JONES 17
 WILSON, DR. 26
 YAKKHA 毘舍婆 169
 YAKŚA 169 (註) 227
 YAKKHAŚĪ 毘舍婆 171
 YAMUNĪ 毘舍婆 2, 238
 YARKAND 233
 YAVANA 33 (註) 170 (註)
 YAŚA 毘舍婆(毘舍婆) 10
 YAŚA 毘舍婆(毘舍婆) 185, 193, 201
 YOJANA 毘舍婆 55
 YONA 毘舍婆 33, 36, 55, 151, 154
 YONALOKA 毘舍婆 170

YOTA 雜家 34, 35, 38, 39, 40, 101, 157, 160
YUEH-CHI 尺牘 237, 240, 242
YUSUFZAI 21, 240

第肆 補遺及び正誤

頁	行	誤、遺	正、補
二	五(註)	KABULIA 五河の義。	KABULIA. 五河の義。般多突嚙、毗波奢、聲羅伐底、旃途羅婆伽、毗世婆
同	六(註)	五河の義。	
五	三	咀	咀
同	五	宰	宰
六	一	國境なる	大臣雨勢 VAKSANKARA. 雨行、渴舍。をして國境なる
同	同(註)	國境なる	連
同	二	しき。	せしめき。長阿舍 經卷二。
同	七	きこ云ふ。	き。阿舍經 卷二。
一	六	咀	咀
同	七	中タスタア	毗怛娑*
三	二	同	同

一六 四 畜ひたり

畜ひ、名をマユウラポオシヤカ
MAYURAIPOŠAKA.

一七 八 記あり。

畜孔雀の義。ニ呼ばれ
記あり。中阿含經卷一、城に謂はゆる

王城七事の中、造立樓櫓築地使堅、掘

鑿池漚極使深廣、築立高墻令極牢固、等

の皆具れるを見る。

一八 九(註) INDIKA.

INDIKA. この古今傳ちやと雖も、附書に引抄せ
られたるを SCHWANBECK の集めたるもの、載せて
McCRINDLE の ANCIENT INDIA に在り。

二四 八 波

婆

四九 七 外相上の尊敬

供養

五二 二、五、七 迦

羯

五四 四 同

同

六三 九 咀

咀

七九 四(註) SRUGHUNA

SRUGHUNA

九三 七 覈

覈

九六 三(註) GANGA

GANGA

一〇二 六 廬

廬

一一四 四(註) BUDDHAGAYA, GAYA.

BUDDHAGAYA, GAYA.

一二五 三 尺

肘

一一九 五(註) NARAYANA.

NARAYANA.

一二五 一 密

蜜

一二七 七 同

同

一三五 六 へし。

へし。大日經疏卷五に、胎藏界曼荼羅

GARBHAKOŠADHĀTU- 第三院釋迦牟尼の

MANĀDĀ. 像容を説きて、左手を以て袈裟

KĀŠĪYA. 角を執る、今の阿育王の像

迦沙曳。の如しと曰へれば、王僧形を爲し

きこの傳説ありて、後世所作の像、
これに従へるものならむ。

一四一 一(註) BRAHMA

釋 VAC 〇 若住 NIVYA 〇 論 〇 梵 BRAHMA

同 八(註) DUṬṬHAGĀMĪNI

DUṬṬHAGĀMĪNI

一四三 五六七密

蜜

同 八(註) DHANMAPĪLA

DHANMAPĪLA

一四四 三 密

蜜

一六三七(註) 無比法

阿含經傳教

一六八 七

阿毗達磨藏中

阿^ア毗^ビ達^ダ磨^マ ABHIDHARMA. 阿毘達磨, 阿

に存ず。帝須の

に存ず。帝須の化寂は阿育王登位

第二十六年摩呬陀上座受戒後第

八年

DĪPAVANSA 第 五年。八十一條。にして、

一七〇 八(註) KĀŚYAPA.

KĀŚYAPA.

一八二 一(註) VAṬṬHAGĀMĪNI

VAṬṬHAGĀMĪNI

一八三 七(註) BUDDHAGOSA.

BUDDHAGOŚA.

一八七 十(註) ŚĀRIPUTRA

ŚĀRIPUTRA

第五 阿育王の法誥等の原文

TEXTS.

ROCK INSCRIPTIONS OF AŚOKA

AT

SHĀHBĀZGARHI, KHĀLSĪ, GIRNĀR,

DHAULI, AND JAUGADA.

EDICT I.

S	Ayam	dhammalipi	[omitted]	Devanampriyasa	*	*	*
K	Iyam	dhammalipi	[do.]	Devānampiyasa			Piyadasina
G	Iyam	dhammalipi	[do.]	Devānampiyasa			Piyadasina

D	* * *	dha	* * *	* * *	* si pavatasi	Devānampiyasa	* * *	* * *
J	Iyam	dhammalipi	Khepingalsi	pavatasi	Devānampiyasa	Devānampiyasa	Piyadasina	
S	Ranyo	lkhapi.	Hidam	lo	ke	jiva.	* * *	* * *
K	* *	lekhapi.	Hida	no	kichi	jive.	ālabhitu	peja
G	Ranya	lekhapiā.	Idha	na	kinici	jivam	ārabhidā	peju
D	Lajo	* * *	* * *	* * *	* yam	ālabhītu	pejapa	
J	Lajina	lkhapitā.	Hida	no	kichi	jivam.	ālabhīti	pejā
S	* * *	ca pi	* *	sama*	* * *	* * *	* * *	
K	hitaviye	no pi ca	samāje.	kataviye	bahukam	hi		
G	hitavyam	na ca	samāje.	katavyo	bahukam	hi		
D	* * *	* * *	* * *	* * *	bahukam	* * *		
J	hitaviye	no pi ca	samāje.	kataviye	bahulam	hi		
S	* * *	* * *	* * *	* * *	* * *	* * *		
K	ḍosā	samajāsā.	—	Devānampiyasa	Piyadasi	Lājā	dhakhati	
G	ḍosam	samājāzhi.	pasali	Devānampiyasa	Piyadasi	Rājā	—	
D	* * *	* * *	* * *	* nam	* * *	* * *		
J	ḍosam	samajasa.	dhakhati	Devānampiyasa	Piyadasi	Lājā	—	

S	ati pi	*katiya	samāyasa	samato	Devānampiyasa	
K	atthi picā	ekatiyā	samājā	sādhunata	Devānampiyasā	
G	asti pitu	ekacā	samājā	sādhunatā	Devānampiyasa	
D	* * *	ekacā	samājāsā	sādhunatā	Devānampiyasa	
J	atthi picu	ekatiyā	samājā	sādhunatā	Devānampiyasa	
S	Priyadasisa	Ranyo	para	mahanasasa	Devānampiyasa	Priyadasisa
K	Piyadasisā	Lājine	pale	mahanasāsāsi	Devānampiyasā	Piyadasisā
G	Piyadasino	Ranyo	pura	mahanasaphi	Devānampiyasa	Piyadasino
D	Piyadasine	Lājine	* *	mahā * *	* * nam	* * *
J	Piyadasine	Lājine	pulavam	mahāvapasi	Devānampiyasa	Piyadasine
S	Ranyo	anudivasam	bahuni	pana	taha * asani	* *
K	Lājine	anudivasam	bahuni	—	satasaahasāni	ālabhiyisu
G	Ranyo	anudivasam	bahūni	pāna	satasaahasāni	ārabhisu
D	* *	* *	bahuni*	pāna*	satasaahasāni	ālabbhiyisu
J	Lājine	anudivasam	bahūni	pāna	satasaahasāni	ālabbhiyi
S	* *	* *	* *	* *	dhammalipi	lkhita
K	supathāyā	se imāni	yadā	iyam	dhammalipi	lekhita

G	sūpāthāya	sa aja	yadā	ayam	dhammalipi	likhitāti		
D	susūpāthāye	se aja	adā	iyam	dhammalipi	likhitā		
J	susūpāthāye	se aja	(*)adā	iyam	dhammalipi	likhitā		
S	—	anatakam	yo va	pranam	ganeti	* * * * jala kate		
K	tada	laniye	vi	panāni	ālabhiyanti	— deva majali		
G	—	—	eva	pāṇa	ārabbhite	supāthāya dvaṃvera		
D	—	tinni	* * *	* * *	*labhiya	* * * * * * * *		
J	—	linniye	vam	pānāni	ālabhiyanti	* * * * dūvema		
S	shi	mage	na	so	pi	mage	na	dhava
K	eke	mige	—	se	piye	mige	no	dhave
G	eko	mago	—	so	pi	mago	na	dhuvo
D	* * *	* * *	—	* * *	* * *	* * *	* * *	* * *
J	eke	mige	—	se	picu	mige	no	dhuvam
S	esa	pe	—	paṇam	ṛayi	paca	—	arabhisanti.
K	esāni	pi	timi	pāṇāni	—	—	no	ālabhiyanti.
G	ete	pāti	—	pāṇā	—	pachā	na	ārabbhisante.

D	* * *	* * *	tinni	pānāni	—	pañchā	nā	ālabhiyanti.
J	ekāni	picu	tinnd	pānāni	—	pañchā	no	ālabhiyanti.

EDICT II.

S	Savatani	vijite	Devānampriyasa	Priyadasisa	Ranyo	* * *	* * *
K	Savata	vijitansi	Devānampriyasā	Piyadasisa	Lājine	yeca	antā
G	Savata	vijitamhi	Devānampriyasa	Piyadasino	Ranyo	vamapipācantesu	
D	Savata	vijitansi	Devānampriyasa	Piyadasine	Lā	* * *	* * *
J	Savatani	vijitasi	Devānampriyasa	Piyadasine	Lājine	evāpi	antā
S	yi	* * *	Pandīya	Satiyaputra	ca	Ketalaputra	
K	maha	Codā	Pandīyā	Satiyaputo	—	Kelhalaputo	
G	yathā	Codā	Pandā	Satiyaputo	—	Ketalaputo	
D	* * *	* * *	* * *	* * *	—	—	
J	athā	Codā	Pandīya	Satiyaput	*	—	
S	—	Ṭambapāni	Antiy	kene	—	Yona	Rajaye
K	—	Ṭambapāni	Antiyoge	nāma	Yona	Lājāne	
G	a	Ṭambapāni	Antiyako	—	Yona	Rajaye	

D	—	—	Antiyoke	nāma	Yona	Lājā	—
J	—	—	Antiyoke	nāma	Yona	Lājā	ca
S	ca	aranya	tasa	Antiyokasa	sānanta	Ranyayo	—
K	ca	alanne	tasa	Antiyogasa	sānantā	Lājāne	—
G	vā pi	* * *	tasa	Antiyakasā	sāninam	Rājāno	—
D	vā pi	—	tasa	Antiyokasa	sāmantā	Lājāne	—
J	vāpi	—	tasa	Antiyokasa	sānanta	Lājāne	—
S	sarvato	Devānumpriyasa	Priyadasisa	Ranyo	kisa	kabha	—
K	savata	Devānumpiyasā	Piyadasisā	Lājine	ḍuve	cikisāchā	—
G	savata	Devānumpiyasa	Piyadasino	Rānyo	ḍve	cikicha	—
D	savata	Devānumpiyasa	*Piyadasino	* * *	* * *	* * *	—
J	savata	Devānumpiyena	Piyadasinā	Lāji	—	—	—
S	* * *	* * *	* * *	* * *	* * *	* * *	—
K	katā	manusa	cikisā	ca	pasu	cikisā	ca
G	katā	manusa	cikichā	ca	pasu	cikicha	ca
D	* * *	* sa	cikisā	ca	pasu	cikisā	ca
J	—	—	cikisā	ca	pasu	cikisā	ca

S	* * *	***	*śca(?)	janasopakani	ca	pasopakani	ca
K	osadhāni	—	—	manusopagāni	ca	pasopagāni	ca
G	osadhāni	ca	yāni	manusopagāni	ca	pasopagāni	ca
D	(osa)ḍhāni	—	āni	munisopagāni	—	pasun opagāni	ca
J	osadhāni	—	āni	munisopagāni	—	pasun opagāni	ca
S	yata yatra	nasti	savatra	harapiti	ca	—	—
K	āta tā	nāhi	savatā	hālāpitā	cā	—	—
G	yata yata	nāsti	savatā	hārāpitāni	ca	—	—
D	atata	nāhi	savatā	hālāpitā	ca	—	—
J	atata	nāhi	sava	* * *	***	—	—
S	—	—	[omitted]	—	—	—	—
K	lopāpitā	ca	savameva	mulāni	ca	phalāni	ca
G	ropapitāni	ca	—	mulāni	ca	phalāni	ca
D	lopapita	ca	—	mulāni	—	—	—
J	—	—	—	—	—	—	ca
S	—	—	[omitted]	—	—	—	—
K	—	nāhi	savata	hālopita	ca	lopāpitā	ca

G	yata	nāsti	savata	hāṛāpitāni	ca	ropāpitāni	ca
D	—	—	vata	hālopitā	ca	lopāpitā	ca
J	ta	nāthi	savata	hāḷāpitā	ca	lopāpitā	ca
S	vata	ca	kupa	ca	khanapita	—	—
K	matesu	—	lukhā	ca	māhithāni	udāpānāni	—
G	pathesu	—	kūpā	ca	khānāpitā	vachā	ca
D	matesu	—	udāpānāni	—	khānāpitāni	lukhāni	ca
J	matesu	—	udupānāni	—	khānāpitāni	lukhāni	ca
S	—	—	prātibhogave	pasu	manusānam.	—	—
K	khānāpitāni	—	patibhogāye	pasu	munisānam.	—	—
G	ropāpitā	—	patibhogāya	pasu	manusānam.	—	—
D	lopāpitāni	—	patibhogāye	pa	* nusānam.	—	—
J	—	—	—	—	—	—	—

EDICT III.

S	Devanampriye	Priyadasi	Ranya	—	ahāni	Baraya	vasā
K	Devānampriye	Piyadasi	Lājā	hevam	āhā	Duvādasā	vasā

G	Devānampiyo	Piyadasi	Rājā	evam	āha	Dvādasa	vasā
D	Devānampiye	Piyadasi	Lājā	hevam	āhā	Duvādasā	vasā
J	Devānampiye	Piyalasi	Lājā	hevam	āhā	Duvādasā	vasā

S	—	—	—	—	—	vijite	—
K	bhisite	name	iyam	ānapayite	savata	vijitāsi	mama
G	bhisitena	mayā	idam	anyapītam	savata	vijite	mama
D	bhisitena	me—	iyam	ānakam	sa **	vijite	sā me
J	bhisite	name	iyam	ā * *	* *	* *	* *

S	yota	—	rajaki	—	padesi	va	pancasu
K	yutā	—	lajaki	—	pādesike	—	pancasu
G	yutā	ca	rājūke	ca	pādesike	ca	pancasu
D	yutā	—	lajūke	ca	* * sike	ca	pancasu
J	—	—	—	ca	pālesike	ca	pancasu

S	vasesu	anusayanam	nikhamatu	eti	sato	knvayo
K	—	vasesu	anusāyānam	nikhamātu	etāyevā	abhāye	—
G	—	vasesu	anusāyānam	niyāta	etāyevā	abhāya	—

D	—	vasesu	anusayānam	nikhānāvū	—	athā	annayepi
J	—	vasesu	anusayānam	nikhānāvū	—	athā	annāye pi
S	[<i>omitted</i>]	imisa	dharmānu sanstīye	sa	anaye pi
K	—	—	—	imāya	dharmānusasthiyā	yathā	annaya pi
G	—	—	—	imāya	dharmānusasthiya	yathā	anyaya pi
D	—	kammāne	hevam	imāya	dharmānusasthiya	—	—
J	—	kammāne	* * *	* * *	* * *	—	—
S	—	kramāye	sadhu	mata	—	pitusu	sususa mitra
K	—	kammāne	sādhu	māta	—	pitasu	sususū mita
G	—	kammāya	sādhu	mātari	ca	pitari	ca sususū mitā
D	—	—	sādhu	mātā	—	pitā	sususa —
J	—	—	—	—	—	—	sā — mitā
S	—	santuta	* ta *	—	—	—	—
K	—	santuta	nātikyanam	ca	Bambhana	samaṇānam	ca sādhu
G	—	santuta	nyātinam	—	Bāmaṇa	samaṇānam	— sādhu
D	—	san * *	nāṭisu	ca	Bambhana	samanehi	— sādhu
J	—	santūṭe	sa nāṭisu	ca	Bambhana	samanehi	— sādhu

S	—	—	—	—	—	—	apaveyata	apabhīdata
K	dāne	pānāna	—	ānalambho	sādhu	apavīyāti	apavīyati	apabhīdata
G	dānam	pānenam	sādhu	anārambho	—	apavyayatā	apavyayati	apabhīdata
D	dāne	jivesu	—	anārambhe	sādhu	apavīyati	apavīyati	apabhīdata
J	dāne	jivesu	—	anārambhe	sādhu	* * *	* * *	* * *
S	sadhu	parisāpa	yutra	ti * * nadanati?	anāpīsanti	—	—	hetu
K	sādhu	palisāpi	yutā	gananasā	anāpīsanti	—	—	hetu
G	sādhu	parisāpi	yuto	anyapayisati	ganānāyam	—	—	hetu
D	sādhu	palisāpi	ca	a * tiyatani	anāpīsita	—	—	(he) tu
J	*	* * *	* * *	* * *	* * *	yi	—	hetu
S	*tha	ca	vanyana	to	ca.	—	—	—
K	vata	cā	viyanjana	to	ca.	—	—	—
G	to	ca	vyanjana	to	ca.	—	—	—
D	te	ca	viyam * *	*	*	—	—	—
J	te	ca	viyanjana	te	ca.	—	—	—

EDICT IV.

S	Atikalani	antarani	bahuni	vasasatāni	vadhito va	pramarambho
K	Atikatani	antalan	bahūni	vasasatāni	vadhitevā	pānalambhe
G	Atikātani	antarani	bahūni	vāsasatāni	vaḍhito eva	pānārambho
D	Atikantani	antalan	bahūni	vasasatāni	vaḍhiteva	pānārambhe
J	Atikantani	antalan	bahūni	vasasatāni	vaḍhiteva	pānārambhe
S	vihisa	ca	bhūtānam	nyatini	asapātipati	Sramanani
K	vibinsā	ca	bhūtānani	nātina	asampātipati	Samana
G	vihinsā	ca	bhūtānam	nyāṭisu	asampātipati	Bāhmanā
D	vihinsā	ca	bhūtānam	nāṭisu	asampātipati	Samana
J	* * *	* * *	* * *	* * *	* * *	* * *
S	sapātipati	tu	ajū	Devānam	piya*	* * *
K	asampātipati	sū	ajū	Devānam	piyasā	Piyadasino
G	asampātipati	ta	ajā	Devānam	piyasa	Piyadasino
D	asampātipate	se	ajā	Devānam	piyasa	Piyadasine
J	* * *	* * *	ajā	Devānam	piyasa	Piyadasine

S	dhammacarane	bherigosa	aha	dhammagosa	vimanena	dasanena
K	dhammacalanenā	bhelighose	aho	dhammaghose	vimāna	dasanani
G	dhammacarāṇena	bherighoso	aho	dhammaghoso	vimāna	dasanā
D	dhammacalanena	bhelighosam	aho	dhammaghosam	vimāda	dasanam
J	dhammacalanena	bhel * *	* * *	* * *	* * *	* * *
S	—	ne	—	nāṭikadhani	—	anyani
K	—	bahūni	—	agikandāni	—	annāni
G	ca	hasi	ca	agikhandāni	ca	anyāni
D	**	bahūni	**	agakhandāni	**	annāni
J	**	* * *	**	* * *	**	* * *
S	ca	divani	rupani	ḍusayitu	janasa	yadisani
K	cā	divyāni	lupāni	ḍasayitu	janasa	ādisani
G	ca	divyāni	rupāni	ḍaseyi	pujanani	yārise
D	ca	diviyāni	lupānam	ḍasayitu	munisānam	ādisa
J	**	diviyāni	lupāni	ḍasayita	munisānam	ādisa
S	hi	vrasa	satehi	na	bhuta	purve
K	hi	vasa	satehi	nā	bhuta	pulve

G	hi	vasa	satehi	na	bhūta	puve	tārise	
D	hi	vasa	satehi	no	hūta	puḷve	tādise	
J	hi	vasa	sate	*	**	*	**	
S	aḷa	vadhite	Devānampriyasa	Priyadarśisa	Ranyo	dharmānusaṅstaya		
K	aḷa	vadhite	Devānampriyasā	Piyadasino	Lājine	dharmānusahīye		
G	aḷa	vadhite	Devānampriyasa	Piyadasino	Ranyo	dharmānusaṅstīya		
D	aḷa	vadh(ite)	Devānampriyasa	Piyadasine	Lājine	dharmānusaṅstīyā		
J	**	*	*	*	*	dharmānusaṅstīyā		
S	amaran	*	naran	avhisa	bhutana	nyakasa	*	*
K	avalambhe	pānānam	avhinsā	bhūtānam	nāṭisam	sampāṭipati	Bambhana	
G	anāran	bio	pānānam	avhinsā	bhūtānam	nyāṭinam	sampāṭipati	Bahmaṇa
D	analamb	he	pānānam	avhinsā	bhūtānam	nāṭisu	sampāṭipati	Sarana
J	anlambhe	pānānam	avhinsa	bhūtānam	nāṭisunam	s	*	*
S	Sramananam	sampāṭipati	maka	piasu	tu ara	susuṣa	esam	inya
K	Samanānām	sampāṭipati	māka	piisu	susuṣā	khāsā	ca	anne
G	Samaṇānam	sampāṭipati	māleri	pitari	susuṣā	thairi	susuṣā	esa
D	Bābhanesu	sampāṭipati	matu	pitru	susuṣām	va	susuṣā	esa
J	*	*	*	*	*	*	*	esa
S	ca	bhuvadharm	dharmacarānam	vadhīnam	vadhīsati	ceyo	Devānampriyasa	
K	ca	bahūvidhe	dharmacalane	vadhite	vadhīyisati	ceṽā	Devānampīye	
G	ca	bahuvīdhe	dharmacarāṇe	vadhite	vadhāyisati	ceva	Devānampīyo	
D	ca	bahuvīdhe	dharmacalane	vadhite	vadhāyisati	ceva	Devānampīye	
J	ca	bahūvidhe	dharmacalane	vadhite	vadhāyī	**	**	*
S	Priyadarśisa	Ranyo	dharmacarānam	ime	putra	pi	ca	kunatavoce
K	Piyadasi	Lājā	imam	dharmacalanam	putā	ca	kunatāla	cā
G	Piyadasi	Rājā	dharmacarānam	idam	putā	ca	potā	ca
D	Piya	**	Lājā	dharmacalanam	imam	putapi	ca	nati
J	*	*	*	*	*	*	*	*
S	pranatika	ca	Devanampriyasa	Priyadarśisa	Ranya	vadhīsanti		**
K	panāṭikya	ca	Devanampriyasū	Piyadasine	Lājine	vadhāyīsanti		yeva
G	papotā	ca	Devānampriyasa	Piyadasino	Rānyo	vadhāyīsanti		idam
D	pā	ca	Devānampriyasa	Piyadasine	Lājine	pavadhāyīsanti		yeva
J	*	*	ca	Piyadasine	Lājine	pavadhāyīsanti		yeva

S	*	*	*	*	ica	pavata	kupa	dharmasīla	* * *
K	dhammacalanam	ima	āva	kupam	dharmasi	silasi vā			
G	dhammacarāṇam	ā va	savata	kapā	dhammamhi	silamhi			
D	dhammacalanam	imam	—	akepam	dhammasi	silasi ca			
J	dhammacal *	**	**	**	*	*	*	*	*
S	ti mato	dharmā	anusāsīsanti	eva	esa	*	*	yuta	
K	tihāto	dhammam	anusāsīsanti	ese	hi soṭṭhe	kamme	am		
G	tistānto	dhammam	anusāsīsanti	esa	hise ste	kamme	yā		
D	vīthitu	*	anusāsīsanti	esa	hise	* me	yā		
J	*	*	*	**	***	*	**	*	*
S	* nusasanam	dharmacarānam	pi ca	na bhoki	asilasa se	imasu			
K	dhammānusāsānam	dhammacalana	pi cā	no hoti	asilasā se	imisa			
G	dhammānusāsānam	dhammacarāṇe	pi na	bhavati	asila sava	imamhi			
D	dhammānusāsānam	dhammacalana	pi cu	no hoti	asilasa se	imasu			
J	*	*	dhammacalane	picu	no ho*	*	*	*	*
S	yajasa	vadhi	ahini	ca	sadhu	etāye	athāye	ima	
K	athasa	vadhi	ahini	ca	sādhu	etāye	athāye	ima	

G	abhamhi	ḍhi ca	ahini	ca	-sādhu	etāya	athāya	idā	
D	athasa	vadhi	* ahini	ca	sādhu	etāye	athāye	iyam	
J	* *	* *	* *	**	* *	* *	* *	* *	
S	lipīham	imisa	athasa	vadhiya	nyantu	hini	mahiga		
K	likhite	imasa	athasa	vadhiyu	janu	hini	ca mā alocayisu		
G	lekhāpītam	imasa	athasa	vadhiya	janu	hini	ca locayiya		
D	likhite	imasa	athasa	vadhiyu	janu	hīnī	ca mā alocayisū		
J	* *	* *	* *	* *	* *	hini	ca mā alocayi		
S	barata	varasabhisitena	Devānampiyasa	Priyadarsisa	Ranya	idam	lipikhatam.		
K	ḍuvādāsā	vasābhisitene	Devānampiyena	Piyadasine	Lājino	—	lekhita.		
G	ḍvādāsa	vasābhisitena	Devānampiyena	Piyadasino	Rānyo	idam	lekhāpītam.		
D	ḍuvādāsa	vasāniabhisitasa	Devānampiyasa	Piyadasine	Lājine	ya	* likhite.		
J	* *	* *	* *	* *	* *	* *	* *	* *	

EDICT V.

S	Devānampiya	Priyadarsi	Rāyo	evam	abakine	kayana	dukara
K	Devānampiye	Piyadasi	Leja	(omitted)	aha	kayane	dukale

G	Devānampīyo	Piyādasi	Rājā	evam	āha	kalāna	dukaraṇḍe
D	(De) vānampīya	Piyādasi	Liāja	hevam	āhā	kayāne	dukraḷe
J	Devānampīye	Piyāda	* *	* *	* *	* *	* *
S	va lapacha	so	daśarām	karoti	i	maya	bahu
K	ē adīkale kayānā	sī	ḍukalām	kaleti	se	mayā	bahu
G	a — kalāṇe	saso	ḍukarām	karoti	ta	mayā	bahu
D	— kayānā	sase	ḍukalām	kaleti	se	me	bahūke
J	—	—	—	—	—	—	—
S	karana	kata	—	maha	putra	ca	nataro ca
K	kayāne	kaṭe	* *	mama	puta	ca	nāta ca
G	kalāṇam	kata	ta	mama	putā	ca	poḷā ca
D	kayāne	kaṭe	tam	ye me	putā	va	nāta ca
J	—	—	—	—	—	—	nanti ca
S	parani	ca	tanaya	me aparām	armanāti	ava	—
K	palan	ca	tenīya	aparīne me	—	āva	—
G	paran	ca	tenaya	me aparām	—	āva	sarṇvanta

D	palan	ca	tenaye	aparīye me	—	āva	—
J	palan	ca	te * *	—	—	—	—
S	kapam	tatba ye	anuvāḷi	santi	te	sukīa	kusati
K	kapam	athā	anuvāḷisanti	se	sukatam	kachāntī	tha evn
G	kapā	anuvāḷisare	tatbā	so	sukatam	kāsati	yo tu
D	kapam	tatbā	anuvāḷisanta	sa	sukaṭam	kachati	* ehe
J	* *	* *	* *	* *	* *	* *	* *
S	ati	desam	prihapisata	sa	ḍakataṁ	kusanti	pāpantiha
K	heti	desam	pihāpāyisati	so	ḍukataṁ	kāchati	pīpā hi
G	ela	desam	pihāpesati	so	ḍukataṁ	kāsati	* *
D	ta	desam	pihāpāyisati	so	ḍukataṁ	kāchati	pāpēhi
J	—	—	—	—	—	—	—
S	sahane	—	Atikatam	antarām	na	bhuta	puva
K	nāma su	padālayese	Atikatam	antalam	no	huta	puḷuvā
G	Sukarāmbhi	pāpam	Atikātam	antarām	na	bhuta	puvām
D	supudālayesu	—	Atikantam	antalam	no	hūtā	puḷuvā
J	—	—	—	—	—	—	—

S	dharmamahamataṃ	dhama	sa	ti	* * varasbhisitena *	
K	dharmamahāmātā	dāmā	so	—	dasavasābhisitenaṃ naneva	
G	dharmamahāmātā	nāma	ta mayā	to	dasavasābhisi (tena)	
D	dharmamahāmātā	nāma	se	te	dasavasābhisitenaṃ re	
J	_____	_____	_____	_____	_____	
S	deya dharmamahamataṃ	kiṭa	te	save	paśaṇḍesu	
K	dharmamahāmātā	—	—	sava	pāsaṇḍesu	
G	dharmamahāmātā	katā	te	sava	pāsaṇḍesu	
D	dharmamahāmātā	kaṭā	te	sava	pāsaṇḍesu	
J	_____	_____	_____	_____	_____	
S	_____	dharmadhrihayo	ca	dharmavadhya	hita	sukhaya
K	viyapaḥi	dharmadhrihanāye	—	dharmavadhīye	hita	sukhāye
G	vyapatā	dharmadhristānāya	—	_____	_____	_____
D	viyapatha	dharmādhrihāvīye	—	dharmavadhīye	hita	sukhāye
J	_____	_____	_____	_____	_____	_____
S	dharma yuthasa	—	Yo	Kambayo	Gandharanam,	Rastikanam
K	vi dharmāyutaso	tam	Yonam,	Kambojam,	Gandhālanam,	_____

G	dharmayūṭasa	ca	Yonam,	Kāmbho(cam),	Gandhārānam,	Rastika	
D	ca dharmayūṭa	sū	Yona,	Kamboca,	Gandhānesu,	Iathika,	
J	_____	_____	_____	_____	_____	_____	
S	Pitinikanam, ta	vapi	—	Aparanta	bhajanayesu	_____	
K	_____	vāpi	anne	Apalantā	bhajanayesu	_____	
G	Petenikāṇau ye	vāpi	anna	Aparūtā	bhataṇayesu	va	
D	Pitenikesu e	vāpi	anne	Apalantā	bhātī	_____	
J	_____	_____	_____	_____	_____	_____	
S	Bramanibhesu	_____	anabhesu	vathasu	_____	hita	sukhāye
K	Bambhanithisu	_____	annabhesu	vathesu	_____	hida	sukhāye
G	_____	_____	_____	_____	_____	_____	sukhāye
D	Bābhani	bhisasu	anabhesu	mabhalokesu	ca	hita	sukhāye
J	_____	_____	_____	_____	_____	_____	_____
S	dharmayūṭa-a	aparigolhira	vapata te	bandhanam	badhasa	paḥividdhanāye	
K	dharmayūṭāye	apalibodhīye	viyapatā :	se bandhanam	baḥhasa	paḥividdhānāya	
G	dharmayūṭānam	aparāgoḍhāya	vyāpatā ;	te bandhana	badhasa	paḥividdhānāya	

D	dhannayutāye	apalibodhāya	viyapataḥ;	se bandhanam	badhassa	pativi**ya
J	_____	_____	_____	_____	_____	_____
S	aparibodhaye	nuccavanavaye	_____	_____	pajati	kita
K	apalibodhaye	mokhāye ca	eyam	anubandha	pajāvativī	katā
G	_____	_____	_____	_____	pajā	katā
D	apalibodhaye	mokhāye ca	iyam	anubandha	pajāti	katā
J	_____	mokhāye	_____	_____	_____	_____
S	bhikati	va	mahalaka	va viyapata	ti eha	_____
K	bhikaleti	vā	mahālākeṭi	vā viyapataḥ	te hida	bāhiesu
G	bhikaresu	vā	thairesu	vā vyāpataḥ	te Pāḷalipute	ca
D	bhikaleti	va	mahālākeṭi	vā viyāpataḥ:	se hida	ca
J	_____	_____	_____	_____	_____	_____
S	ca	nagaresu	sarvesu	orodhanesu	_____	bhratuna
K	ca	nagalesu	savesu	holodhanesu	_____	bhātana
G	ca	_____	_____	_____	eva	_____
D	ca	nagalesu	savesu	olodhanesu	evāhi	bhātānam
J	_____	_____	_____	_____	_____	va

S	mekasuna ca	yevapi anye	nyatika	savatana	viyapata	ya	ayam
K	bhaginiya evāpi	anna	nāṭikya	savatā	viyapataḥ	e—	iyam
G	_____	ne vāpi me anye	nyatika	savataḥ	vyapataḥ	te yo	ayam
D	bhaginim va	annesu	va natita	savata	viyapataḥ	ca:	iyam
J	_____	_____	_____	_____	_____	_____	_____
S	dharna	nistisita tivara	dharnadhrifane	tiva	danasayutra	va	_____
K	dharna	nisteti vā	dānasayute	tivā	savatā majala	cha	mama
G	dharna	nistito tiva	_____	_____	_____	_____	_____
D	dharna	nistativam	dharnādhrībāne,	tiva	dānasayute	va sava	patthaviyam
J	_____	_____	_____	_____	_____	_____	_____
S	asī anati mata	dharmayutasa	vana	viyapala	e	dharmamhamatra	etaye
K	_____	dharmayutasi	_____	viyapalāle	—	dharmamamahāmatā	etāye
G	_____	_____	_____	_____	_____	dharmamamahāmatā	etāya
D	_____	dharmayutasi	_____	viyapataḥ	ime	dharmamamahāmatā	imāye
J	_____	_____	_____	_____	_____	_____	_____
S	athāya ayo	dharmalipi	lipi *	** bhiti	va tinke	bhota paṇja	anuvatanu.
K	athāya iyam	dharmalipi	likhitā	ciathikikya	hotu	tathā ce me	paṇja anuvatanu.

G abhāye eyam dharmmalipi likkita _____
D abhāye iyam dharmmalipi likhitam cilabhi _____
J _____ _____
 hotu ca me paya * _____
 anuvatau. _____

EDICT VI.

S	Devanampriyo	Priyadarasi	Raya	evam	ahati	atikatam	antalam
K	Devānampiye	Piyadasi	Lājā	hevam	āhā	atikatam	antalam
G	_____	_____si	Rāja	evam	āha	atikātam	antarām
D	Devānampiye	Piyadasi	Lājā	hevam	āhā	atikanlam	antalām
J	Devānampiye	Piyadasi	Lājā	hevam	āhū	atikanlam	antalam
S	na	bhuta	puva	sava	la	_____	_____
K	no	hūta	putve	savam	kalam	atla	kammeva
G	na	bhūta	puva	sa	_____la	atla	kammeva
D	no	hūta	putve	savam	kalam	atla	kammeva
J	no	huta	putve	savam	kalam	atla	kammeva
S	patimadhra	la	_____	maya	eva	kita	savau
K	paṭivedānā	vāsa	uda	mayā	hevam	kaṭe	savau

G	paṭivedānā	vāta	_____	meyā	evam	katam	save
D	paṭivedānā	vāse	na	meyā	_____	kaṭe	sava
J	paṭivedāna	vāse	na	meyā	_____	kaṭe	savam
S	kalam	esimāna	same	_____	orodhanasi	gabthagarasi	vacasi
K	kālam	adamāna	sā	_____	holodhanasi	gabhāgālasī	vacasi
G	kale	bhunganāna	same	_____	orodhanamhi	gabthagāramhi	vacamhi
D	**	**na	same	ante	olodhanasi	gabhāgālasī	vacasi
J	kālam	**	same	ante	olodhanasi	gabhāgālasī	vacasi
S	_____	vinitasi	_____	nyanasi	_____	savatra	praṭivedaka
K	vā	vinitasi	_____	uyanāsi	_____	savata	paṭivedakā
G	vā	vināmhi	ca	nyānesu	ca	savata	paṭivedakā
D	**	vinitasi	_____	nyānasi	ca	savata	paṭivedakā
J	_____	vinitasi	_____	nyānasi	ca	savata	paṭivedakā
S	_____	abha	janasa	praṭivedaka	me	_____	savatra
K	_____	abha	janasā	*ṭivedetu	me	_____	savata
G	gīta	atme	janasa	paṭivedeṭha	_____	iti	savata

D	—	janasa	atham	pañiveda	yanlu	me	'ti	savata	
J	—	janasa	atham	pañivedayanlu		me	ti	savata	
S	ca	janasa	atha	karomi	ya pirokika			makhata	
K	—	janasā	atham	kachāmi	ha peyam pi cā			mukhata	
G	ca	janasa	athe	karomē	ya ca			kinci mukhatā	
D	ca	janasa	atham	kālāmi	ha anpi ca			kinchi mukhate	
J	ca	janasa	—	—	am pi ca			kinchi mukhate	
S	anapayāmi	—	—	pika	va	—	—	eva	
K	ānapayāmi	sakam	—	dipakam	vā	savakām	vā	ye vā	
G	ānapayāmi	swayam	—	dāpakam	vā	sāvāpakam	vā	ye vā	
D	ānapayāmi	—	—	dāpakam	vā	sāvākam	vā	evā	
J	ānapayāmi	—	—	dāpakam	vā	sāvākam	vā	evā	
S	dhayaka pi	nama kalhuna	—	acayika	nya * nasa	bhoti	traya	abhayo	
K	punā	mahāmātehi	—	acāyika	—	—	taya	abhāye	
G	puna	mahāthatesu	—	ācāyika	aropitam	bhavati	tāya	athiyā	
D	—	mahāmātehi	—	atiyāyike	alopite	hoti	tasi	athasi	
J	—	mahāmātehi	—	aliyāyike	alopite	hoti	tasi	athasi	

S	vīyo	pa na	—	* ma	parivayesha	nantariyena	pañivedatasa	
K	vivido	ni	kiṭi	vasantam	pañisūyam	anantaliyenā	* * *	
G	vivado	ni	kiṭi	vasanto	pañisūyam	ānantarām	pañivedetiyam	
D	vivādeva	ni	kiṭi	vāsantam	pañisayā	anantaliyam	pañivadeta	
J	vivādeva	ni	—	—	lisaya	anantaliyam	pañivedeta	
S	—	me	—	savata	ca	a * * *	janasa	
K	vīye	me	—	savata	savam	kālām	hevam	
G	—	me	—	savata	save	kāle	evam	
D	vīye	me	ti	savata	savam	kālām	hevam	
J	vīye	me	ti	savata	savam	kālām	hevam	
S	karomi	atrayutisa	—	—	doka	anapi ce	abha	
K	ānapanite	manayā	—	—	natthi	hi me dose	utthānasi	abha
G	mayā	anapitam	—	—	nāsti	he me to so	utthānanāhi	abha
D	ma	anusaṭhe	—	—	natthi	pi me to se	utthānasi	abha
J	me	anusaṭha	—	—	natthi	pi me to se	utthānasi	abha
S	dapaka	va	siravaka	va	yata	pana	mahanata	na
S	acayiti	me	sava	bhoti	taya	abhaya	vividasa	vatiyati

S	ra	patishaye	anantariya	na	pativi.	detaro	me	savatra
S	savam	kalam	evam	anyapitam	maya	* sti hi	me	takanya
S	santiranaya	pi	katava	mantrahi	me	sava	loka	hitam
K	santilanāye	ca	kaḷaviya	mtehi	me	sava	loka	hita
G	santiranāya	va	katavya	mtehi	me	sava	loke	hitam
D	santilanāya	ca	kaḷaviya	mtehi	me	sava	loka	hite
J	santilanāyam	ca	—	—	me	sava	loka	hite
S	tasa	ca	—	mulam	etva	atanam	atha	santirasa
K	—	—	puna	esi	mule	uthāne	atha	santilanā
G	tase	ca	puna	esa	mūle	ustina	ca	athā
D	tasa	ca	puna	iyam	mūle	uthāne	—	santilanā
J	tasa	ca	puna	iyam	mule	uthāne	ca	athā
S	ca	na	i	kamnatara	sava	loka	hiti	ti+yam
K	cā	nathi	hi	kamnatālam	sava	loka	hitayam	yam
G	ca	nāsti	hi	kamnataram	sava	loka	hitataya	ca
D	ca	nathi	hi	kamnatalam	sava	loka	hitena	am
J	ca	nathi	hi	kamnatālā	sava	loka	hitene	am

S	parakamama	—	kiti	—lanam	onāni	dese	va	ca	yam	iha	caṣu
K	palakamāmi	hakam	kiti	bhutanam	annaniyam	ye	ha—	hida	ca	kāni	kāni
G	parakamāmi	aham	kiuti	bhutanam	annanam	gacheyam	idha	ca	nāni	nāni	nāni
D	palakamāmi	hakam	kinti	bhutanam	annaniyam	ye	hanti	hida	ca	kāni	kāni
J	pālakamāmi	hakam	—	—	—niyam	ye	hanti	hida	ca	kāni	kāni
S	sukhayami	para'am	ca	saga	aradhat	—	etāye	athāye	ayi	ayi	ayi
K	sukhāyāmi	palatam	ca	svagam	—	ālādhayantu	si	etāyehāye	iyam	iyam	iyam
G	sukhāpayāmi	paratā	ca	svagam	arādhayantu	ta	etāya	athāya	ayam	ayam	ayam
D	sukhayāmi	palatam	ca	svagam	ālādhayantu	ti	etāye	athāye	iyam	iyam	iyam
J	sukhayāmi	palata	ca	svagam	ālādhayantu	ti	etāye	athāye	iyam	iyam	iyam
S	dharmalipi	tha	—	ciranthitika	hota	tatha	ca	ca	ca	ca	ca
K	dharmalipi	likhitā	—	ciathitikyā	hotu	tathā	ca	ca	ca	ca	ca
G	dharmalipi	lekḥāpitā	kinti	cirantisteya	iti	tathā	ca	ca	ca	ca	ca
D	dharmalipi	likhita	—	ciathitika	hotu	tathā	ca	ca	ca	ca	ca
J	dharmalipi	likhita.	—	ciantthitikā	hotu	—	—	—	—	—	—
S	me	putranantaro	—	—	parakrama	tasa	sa	—	—	—	—
K	me	puta	dāle	—	—	palakamātu	savaloka	—	—	—	—

G	me	puta pota ca	papota	—	—	savaloka	
D	—	puta — —	papota	me	palakamātu	savaloka	
J	—	— pota —	—	me	palakamantu	savaloka	
S	hi athaya	ma bhata ta yasa	ama ya	anyata	age	parakameua	
K	hitā	dukale ca	iyam	annata	agenā	palakamenāni	
G	hitāya	dukaranṭu —	idam	annata	agena	parakameua	
D	hitāye	dukale cu	iyam	annata	agena	palakameua	
J	hitāye	dukale cu	iyam	annata	agena	palakameua	

EDICT VII.

S	Devānampriyo	Priyasi	Rāja	savvatra	ichati	savvam	pāṣaṇ
K	Devānampiye	Piyadasi	Lājā	* valā	ichati	sava	pāsandā
G	Devānampiyo	Piyadasi	Rājā	savata	ichati	save	pāsandā
D	Devānampiye	Piyādasi	Lājā	savata	ichati	sava	pāsandā
J	—	Piyāṭasi	Lājā	savata	ichati	sava	pāsandā
S	vaseyu	save ite	sayaman	bhavasudhi	ca	ichanti	jano
K	vase va	save hite	sayaman	bhavasudhi	ca	ichanti	mune

G	vaseyu	sive te	sayaman ca	bhavasudhin	ca	ichati	jano tu
D	vasevī *	tī save	hola sayaman	bhavasudhi	ca	ichanti	muniṣā
J	vase *	* save	hite saya am	bhavasudhi	ca	ichanti	muniṣā
S	ca	ucāvaca	chando	ucāvaca	rāgo	te	
K	va	ucāvaca	chanda	ucāvaca	lāga	te	
G	ca	ucāvaca	chando	ucāvaca	rāgo	te	
D	ca	ucāvaca	chanda	ucāvaca	lāgā	te	
J	ca	ucāvaca	chanda	ucāvaca	lāgā	te	
S	savam	vā	ekadesam va pi	kāsanti	vipule		
K	savam	—	ekadesam pi	kachanti	vipule		
G	savam	va	kāsanti	kāsanti	vipule		
D	savam	va	ekadesa *	kachati	vipulā		
J	—	—	ekadesam va	kachanti	vipule		
S	pi ca	dāne	yasa	nāsti	sayaman	bhavasudhi	—
K	pi ca	dāne	tasā	nathi	sayame	bhavasudhi	—
G	tu pi	dāne	yasa	nasti	sayame	bhavasudhita	vā

D	pi ca'	dāne	asa	nabhi	sayame	bhāvasudhi	ca
J	pi ca	dāne	—	—	—	—	—
S	kiṭanyata	—	driḍhabhātika	—	nice	pāḍham	—
K	kiṭanātu	—	dāḍhibhātītā	cā	nica	pāḍham	—
G	kaṭanuyatā	va	dāḍhabhātītā	va	nica	bāḍham	—
D	—	—	—	—	nice	bāḍham	—
J	—	—	—	ila	nice	bāḍham	—

EDICT VIII.

S	Atiḷatam	antarām	ne Raya	viḥarayataṃ name	nikhamiṣam	gamagaye
K	Atiḷantam	antalaṃ	Devānampiṇyā	*** dhīya ***	nikhamiṣuhidā	nigaviyā
G	Atiḷātām	antaram	Rājano	viḥārayātām nyayāsu	eta	māgavyā
D	** kantam	antalaṃ	Lūjāno	vāḥalayātān nāma	* khamiṣā	** viya
J	t * kantam	antalaṃ	Lūjja	—	—	—
S	anyane	ca	edisāni	atasamāna	abhavasū	so
K	anyāni	ca	hedisāni	abhīla māni	hunsam	—
G	anyāni	ca	etārisāni	abhira makāni	abumsu	so
						Devānampiyo

D	annāni	ca	edisāni	abhīlā māni	puvam tīnam	se	Devānampiye
J	annāni	ca	e—	a * ila māni	puvam tīnam	se	Devānampiye
S	Priyadarsi	Raanya	dāsavasabhisite	santu	nikamiṣaye	dhiteṇa	
K	Piyadasi	Lūjā	dāsavasābhisite	santu	nikhami thām sam	bodhinitena	
G	Piyadasi	/Rājja	dāsavasābhisite	santʹ	ayāyasam	bodhimiteṇa	
D	Piyadasi	Lūjja	dāsavasābhisite	—	nikhamiṣam	bo lhi *—teṇa	
J	Piyadasi	Lūjja	dāsa—	—	—	—	
S	sa	dharmayatra	etaya iyam	hoti	Sramāṇam Bramaṇaṇam	da saṇe	na
K	tā	dharmāyātā	etāyam	hoti	Samana Bambhanānam	dasane	cā
G	sā	dharmāyātā	etāyam	hoti	Bāhuna Saumanānam	dasane	ca
D	tā	dharmāyātā	tesa	hoti	Samana Bābhanānam	dasana	ca
J	—	—	tesa	hoti	Sa * * *	* * *	ca
S	annu	* * *	* * *	hiranya	paṭivīdhane	ca	
K	ca	vidhānam	dasane	hilanna	paṭivīdhāne	ca	
G	ca	thairānam	dasane	hiranna	paṭivīdhāno	ca	
D	ca	vadhānam	dasane	hilanna	paṭivīdhane	ca	
J	ca	vadhānam	dasane	hilanna	paṭivīdhāne	ca	

S	pejanasa	janasa	dasana	—	dharmanusati	—
K	janapadasa	janasa	dasanani	—	dharmanusathi	ca
G	janapadasa	ca janasa	dasanani	—	dharmanusasti	ca
D	janapadase	— janasa	dasane	ca	dharmānusathi	* *
J	—	—	—	—	—	—
S	dharmma pari	puvacu	—	tadopayam	etḥ	bhayerati bhoti
K	dharmma pali	puchā	ca	tatapyo	esu	bhayalati hoti
G	dharmma pari	puchā	ca	tadopyā	esa	bhāyarati bhavati
D	* * *	* chā	—	tādāpyā	* sa	abhilāne hoti
J	—	—	—	—	—	* lāne hoti
S	Devānampriyasa	Priyadarśisa	Ranye	bhago	anye.	—
K	Devānampiyasa	Piyadasisa	Lājine	bhāge	anne.	—
G	Devānampiyasa	Piyadasino	Ranyo	bhāge	anne.	—
D	Devānampiyasa	Piyadasine	Lājine	bhage	anne.	—
J	Devānampiyasa	Piyadasine	Lājine	bāhge	a * *	—

EDICT IX.

S	Devānampriyo	Priyadarśi	Raya	evam	ahati	—
K	Devānampiyē	Piyadasi	Lāja	—	āhā	—
G	Devānampiyō	Piyadasi	Rājā	eva	āha	asti
D	Devānampiyē	Piyadasi	Lāja	hevam	āhā	atthi
J	Devānampiyē	Piyadasi	Lāja	—	—	—
S	jani	ucam vacam	mangalam	karoti	abādhasa	veativaha
K	jano	ucāvacam	mangalam	ka * *	ābādhesi	—avāha
G	jano	ucāvacam	mangalam	karote	ābādhesu	va avāha
D	jano	ucavacam	mangalam	kaloti	ābādhesu	—
J	—	—	—	—	—	—
S	—	—	paja patu di	—	pavasa	—
K	vivāhesi	—	pajupadāye	—	pavasasi	—
G	vivāhesu	vā	putalābhesu	vā	pavāsammhi	vā
D	vī * * *	—	* jupadāye	—	pavāsasi	—
J	—	—	pajupadāye	—	pavāsasi	—